年報

名古屋大学大学院人文学研究科
教育研究推進室

2022

目　次

巻頭言　名古屋大学大学院人文学研究科長　周藤芳幸　i

I　教育研究推進室の活動報告 …… 1

1．大学院生支援事業　1

1-1　研究発表支援事業一覧（2022年度）　1

1-2　フィールド調査プロジェクト一覧（2022年度）　1

1-3　フィールド調査プロジェクト報告書（2022年度）

朝魯蒙　静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』（1952-1966）の調査　2

張温舒芸　隋唐洛陽城における黒色磨研瓦の生産体制に関する研究　4

辜 傲然　宮崎滔天と「アジア主義」との関係性
——『宮崎滔天全集』未収録書簡・台本の調査　5

松波伸浩　古浄瑠璃の上演実態と芸談に関する実地調査
——佐渡・八王子・都城・薩摩川内をめぐって　7

水野善斗　大日本帝国と樺太——樺太関係者の私文書の調査・分析から　8

潘 揚波　日本軍事学校の清国人留学生に関する一次史料調査　10

鈴木貴裕　大正・昭和の大礼後式場拝観に関する公文書・新聞史料の調査　14

陳 永強　日本列島における渡来系遺物・遺構の考察——革袋形須恵器を中心に　16

小林 卓　ミトラス教関連の文献調査並びに考古学遺物の現物調査　19

張 睿帆　日中交流の観点から見た8～10世紀の中国窯業　22

2．教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）（2022年度）

2-1　自己紹介の会開催一覧（2022年度）　24

2-2　FD・ワークショップ・その他一覧（2022年度）　24

2-3　FD報告

人文系研究者にとっての共同研究（1）　松下千雅子・三輪晃司（司会：宇都木 昭）　25

II　人文学研究科の教育・研究活動 …… 43

1．教員の著書

1-1　単著／単独編集／共著別一覧（2022年度）　43

1-2　教員の自著紹介（氏名ABC順）

藤木秀朗 Hideaki FUJIKI
Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media. Oxford University Press　44

李 澤熊『現代日本語における意図性副詞の意味研究
——認知意味論の観点から』ひつじ書房　46

中村靖子編著『予測と創発——理知と感情の人文学』春風社　48

大井田晴彦『王朝物語の世界——『竹取』『伊勢』『うつほ』そして『源氏』へ』三弥井書店　49

２．各種報告

2-1　大学院教育の国際化に向けて

国際化推進室（安井永子）　50

第 8 回日韓学術交流会（宇都木 昭）　51

Ⅲ　各種データ …… 53

巻 頭 言

今号の年報は、2022年度における名古屋大学人文学研究科の教育研究活動の概要をまとめている。当該年度の特筆すべき事項としては､何よりも研究科の附属センターとしては三つ目となる｢人文知共創センター」の設置をあげることができよう。これは、2021年度に「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」の中に「学術知共創プログラム」が設けられたのに対し、ドイツ語ドイツ文学の中村靖子教授が中心となってこれに応募し、そのプロジェクトである「人間・社会・自然の来歴と未来：人新世における人間性の根本を問う」が見事に採択されたことによる快挙である。大型の外部資金を獲得して研究拠点を設置することは研究振興の王道であるが、今回、人文学研究科でこれを実現できたことの意義は大きい。中村靖子教授をはじめ、岩﨑陽一准教授他、センター設置に尽力された部局の教員はもちろんのこと、共同研究員としてその活動に携わられることになった学内外の研究者各位に部局長として厚く御礼申し上げたい。

また、2022年度には、この年度をもって設置期限を迎える超域文化社会センターの活動の継続延長に向けた準備も進められた。このセンターは、2008年に旧文学研究科に設置された「日本近現代文化研究センター」から数えれば15年に及ぶ活動の蓄積を誇っており、その活発な活動状況が評価された結果、人文学的知見による社会問題解決への貢献、国際的教育実践のモデル的推進、国・地域を超えた文化社会研究ネットワークの展開を三本の柱とする第二期の計画が年度末に大学本部によって認められた。センター長として対応にあたられた飯田祐子教授他、関係の教員のご貢献を多としたい。

一方で、2023年度から人類文化遺産テクスト学研究センターのセンター長に就任される予定であった近本謙介教授が2023年２月18日に渡航先のパリで急逝されたことは、研究科に大きな衝撃を与えずにはおかなかった。近本教授の研究科への多大なご貢献に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りする次第である。

2023年12月12日

名古屋大学大学院人文学研究科長
周藤芳幸

Ⅰ　教育研究推進室の活動報告

1．大学院生支援事業

1-1　研究発表支援事業一覧（2022年度）

氏 名 （分野・専門）学年※	発表題目（使用言語）	研究集会の名称 開催地（都市名・国名）	研究集会会期 （本人発表日）
生田美希 （英語教育学）3年	The Effects of Creativity and Difficulty on Analogical Reasoning in L1 and L2	International Conference on the Mental Lexicon 2022（トロント・カナダ）	2022年 10月11～14日 （10月12日）

※本支援事業の採択者は、すべて博士後期課程（当時）の学生である。

1-2　フィールド調査プロジェクト一覧（2022年度）

氏名 （分野・専門）課程※	プロジェクト題目	調査訪問機関（所在地）	調査月
鈴木貴裕 （日本史学）前期	近代の大嘗宮一般公開に関する公文書・新聞史料の調査	国立国会図書館・国立公文書館・宮内公文書館（千代田区）／府立図書館（京都市）	5月、9～10月
水野善斗 （日本史学）前期	大日本帝国と樺太―樺太関係者の私文書の調査・分析から	市立博物館（滑川市、富山）／市来庁舎（いちき串木野市、鹿児島）／立命館史資料センター（京都市）／国立国会図書館・国立公文書館（千代田区）・都立大学図書館本館（八王子市、東京）	6～7月、9～10月
松波伸浩 （日本文学）後期	古浄瑠璃の上演実態と芸談に関する実地調査―佐渡・八王子・都城・薩摩川内をめぐって	人形の館（山之口町、宮崎）／大隈記念講堂（新宿区）・日暮里サニーホール（荒川区）／東郷公民館（薩摩川内市、鹿児島）／開発総合センター（佐渡市、新潟）	6～8月、11月
潘 揚波 （東洋史学）前期	日本軍事学校の清国人留学生に関する一次史料調査	東洋文庫（文京区）・振武台記念館（練馬区）	7月
辜 傲然 （日本史学）前期	宮崎滔天と「アジア主義」との関係性―『宮崎滔天全集』未収録書簡・台本の調査	近代日本法政史料センター（文京区）／宮崎兄弟資料館（荒尾市、宮崎）	7月、10月
陳 永強 （考古学）前期	日本列島における渡来系遺物・遺構の考察―革袋形須恵器を中心に	歴史博物館（岐阜市）／村岡民俗資料館（香美町、兵庫）／弥生の里文化財センター（津山市、岡山）／成正寺（志水町、石川）	7月、10月
朝魯蒙 （文化動態学）前期	静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』（1952–1966）の調査	静岡大学附属図書館（静岡市）	7月、11月
張温 舒芸 （考古学）前期	隋唐洛陽城における黒色磨研瓦の生産体制に関する研究	杭州図書館（浙江省）／洛陽博物館・洛陽城遺跡・考古学工作站（河南省）	9～10月
小林 卓 （西洋史学）後期1年	ミトラス教関連の文献調査並びに考古学遺物の現物調査	フランクフルト考古学博物館（ドイツ）／AAR（ミラノ、イタリア）	2月
張 睿帆 （考古学）後期	古代猿投窯の施釉陶器技術と関連する中国陶磁窯の調査と相関資料収集	浙江省博物館・浙江省文物考古研究院・杭州博物館・上虞博物館・臨安博物館・慈渓博物館（浙江省）／上海博物館／南京博物院／湖南省文物考古研究院・湖南省博物館／洛陽博物館・河南省博物館・鄭州市博物館・大象陶磁博物館（河南省）／故宮博物院（北京市）／河北省博物院・河北省文物考古研究院・邢窯博物館（河北省）〈全て中国〉	2～3月

※本プロジェクトの採択者は、学年表記のある者を除き、全て2年次（当時）の学生である。

1–3　フィールド調査プロジェクト報告書　※執筆者の学年は2022年度のもの

静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』（1952–1966）の調査

朝魯蒙　文化動態学分野・専門 博士前期課程２年

本稿は、2022年度名古屋大学人文学研究科フィールドワーク調査による助成を受けて行われた「静岡大学附属図書館での一次資料『内蒙古日報』（1952–1966）の調査」の成果報告書である。今回の調査では、静岡大学附属図書館に保管されている中国・内モンゴル自治区の党政機関紙である『内蒙古日報』（1952–1966）の資料を調査した。本調査に基づき、修論では年代の区切りを考慮して、1965年までの調査結果を分析した。

研究の背景　新中国の成立後、内モンゴル自治政府は正式に内モンゴル自治区人民政府となり、社会主義改造から始まる体制転換を経験した。さらに、内モンゴル自治区の「集団化」、すなわち社会主義改造は1952年の「互助合作運動」から始まり、互助組、合作社、高級合作社の３段階を経て、1958年末ごろから、「人民公社」が数ヶ月という短期間のうちに組織された。「人民公社」は1958年から1984年まで、制度として残り続けていた。内モンゴルは社会主義への転換において、遊牧から「集団化」、そして「私有化」を経験した。

研究の目的　党政機関紙である『内蒙古日報』（1952–1965）においてモンゴル族女性を取り上げる際、少数民族と女性を特に強調する傾向がうかがえる。このような問題点を踏まえ、本稿は、『内蒙古日報』がどのようなモンゴル族女性を選出しているのか検討することによって、時代背景の考察を行い、前述の内モンゴル自治区の社会主義経験を踏まえたうえで、党政機関紙である『内蒙古日報』（1952–1965）を基に、内モンゴルにおける集団化初期にモンゴル族女性がどのようなイメージを与えられ、いかに社会主義中国で「理想」とされてきたのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法　研究方法としては、第一資料の記事に基づく内容分析が中心となる。本稿は内モンゴル自治区が経験した社会主義改造時期、社会主義集団化初期を背景として、『内蒙古日報』の1952年から1965年までの14年間の新聞記事を第一研究資料とする。

内モンゴル自治区民主改革以降、1952年から1965年の社会主義的改造、集団化初期を互助合作時期と人民公社時期を区切りとする。静岡大学附属図書館に資料調査に行って、『内蒙古日報』からモンゴル族の女性を主体に報道された記事をピックアップした。1952年から1957年の間に、モンゴル族の女性を主体に報道された記事は212件、1958年から1965年の記事は252件ある。ピックアップした記事を分類した上で、内容分析をした。

考察の結果　集団化時期には「私的領域」が「公的領域」に埋め込まれており、「公私混交」の社会構造が構成され、個人–集団–国家という同心円構造では「家族」は曖昧化されていた[1)]。このような社会構造において「労働婦人」の構築を重要な政治目標の一つとし、女性の労働参与を促すことは中国共産党と婦人連合会の政治任務の重点であり、このような国家イデオロギーによる価値志向の下で、国家が『日報』を通じて、モンゴル族女性の中に「牧業労働」に参加する「牧民婦人」という集団的アイデンティティを構築していたことを明らかにした。この時期に「牧民婦人」に対して示した新たな要求は「万能の女性」であり、伝統社会の男女役割分業と制度は瓦解された。『日報』で登場する女性労働模範は、国家が構築し、期待する「理想」の模範であり、積極分子は党政策と国家政策の忠実な実践者であった。当時の『日報』に掲載された女性像は、「産む性」と「働き手」という二つの理想的な役割をもつ女性像を大衆に伝えようとしたと考える。

1）宋少鵬、高夏薇（2022）「境況性知識、内在歴史的視域：回看中国百年婦女運働的歴史与経験」『開放時代』2022年第６期、32–53頁.

感想　今回の調査において困難だった点は、1950年代に発行された新聞紙であるため、電子版がなく、大量の資料を閲覧した上で、整理やスキャンなどの作業を行う必要があった。閲覧中に Excel などのソフトウェアでデータ化整理を行うことで、後続の閲覧や論文執筆に役に立った。また、『内蒙古日報』は特別資料館に収蔵されているため、事前に図書館職員から閲覧資格を取得し、利用時間と注意事項を確認する必要があった。

隋唐洛陽城における黒色磨研瓦の生産体制に関する研究

張温 舒芸　　考古学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　漆黒かつ潤った光沢を持つ黒色磨研瓦は、北魏時代に創出されて以来、その特別な見た目のため、普通の瓦と区別されて重要な建物に葺かれていたようである。瓦は建物の格と関連付けられ、等級制度を反映する一部を構成している。こうした背景の下、今回の調査は、黒色磨研瓦と中国古代の都城制を結びつけることを念頭に、出土品を検討することで、北魏・隋唐時代の都城における黒色磨研瓦の使用や生産実態の復元を試みる。

調査概要　2022年10月12日から10月18日までの間、中国河南省洛陽市で調査を行った。北魏洛陽城と隋唐洛陽城から出土した黒色磨研瓦を実見し、関連する漢魏故城や隋唐洛陽城遺跡、洛陽博物館などを見学した。

調査結果　黒色磨研瓦の製作技法の復元。普通の瓦と同じ成形手法で形状を整えた後、生乾きの状態で凹面の布目を全面的に消す。布目が消された瓦を乾燥させ、さらに竹や石などを用いて縦方向の研磨処理を施す。研磨処理を経た瓦を、最後に燻し焼きで黒くする。

隋唐時代における黒色磨研瓦の衰退の確認。黒色磨研瓦の製作技法として、北魏、隋唐両代は基本的に一致した方法を取っていたが、隋唐時代の黒色磨研瓦は、研磨処理や燻し焼きに一部手を抜いたものがあり、質の下がりと数の減少が見受けられることから、北魏に比べて衰退したことが認められる。

調査の意義　調査から得た一番の成果は、事実が研究計画と乖離していることから生まれた、研究目的の方向転換である。

調査に行く前、研究史から設定した研究目的は、隋唐洛陽城に限定した黒色磨研瓦の使用や生産実態を明らかにすることであり、出土瓦の年代判定や製作痕跡の確認を最初の目標にしていた。

ただし、見学してみたら、出土遺物の実態は予想から程遠く外れたことが判明した。まず、黒色磨研瓦の詳しい出土位置が望まれるが、実際に大まかな位置しかわからず、建物のどの部分から出たかは記録されていない。また、瓦の流通を調べる鍵となる瓦窯から出土した黒色磨研瓦を実見できなかった上、瓦に製作痕跡がほとんど残されておらず、手がかりがほぼ皆無であった。最後に、隋唐洛陽城の出土瓦は細かい年代断定がなされておらず、変遷と言えるほど明らかな変化が捉えづらいことも判明した。これ以上隋唐洛陽城にこだわり続けると結論が出にくいことに気づき、最初は大きなショックを受けていた。

しかし、気を取り直して考えてみると、先行研究や研究計画と違っても、自分で確かめたことが本当の事実であるからこそ、新たな発見に導くチャンスが潜んでいるはずでもある。そこで、見学で思った疑問、なぜ隋唐時代の黒色磨研瓦は北魏に比べて衰退したのかを、研究目的として設定し直した。調査で見せてもらった北魏洛陽城の資料と隋唐長安城の出土瓦を取り入れ、三つの都城における黒色磨研瓦を考察する方向に変えた。結果として、隋唐時代においては黒色磨研瓦を使う消費地でも、黒色磨研瓦を生産する生産地でもそれぞれ変化が起こったから、黒色磨研瓦が衰退したという結論に辿り着けた。

どれほど先行研究を読んだとしても、遺物を自分の目で見ていない分、どうしても確認しきれないところや事実と相違するところが生じてくる。フィールドワーク調査が、これまで他人の文章からしか知る手段のない黒色磨研瓦を、自分で事実を確認する機会を提供してくれたことで、新しい研究方向に転換できたと思うと、考古学研究にとってのフィールドワーク調査の重要性を実感できた。

宮崎滔天と「アジア主義」との関係性
――『宮崎滔天全集』未収録書簡・台本の調査

辜 傲然　　日本史学分野・専門 博士前期課程２年

本研究について　本研究は、現代における「東アジア共同体」の実現という現実問題への関心から、近代日本のアジア主義を把握することを方向性として考察したものである。そのなかで、本研究は、辛亥革命をリードした孫文と親交を結び、中国革命のために奔走していたアジア主義者の一人とされる宮崎滔天の活動に主眼を置き、現存する資料集と一部未刊行の直筆原稿から、彼の革命家としての位相と、「アジア主義」との関連性を探ることを目的とした。

調査の背景　これまでの先行研究を見ると、宮崎滔天という人物は、中国革命を支援する「義侠」としての側面だけを抽出して評価される傾向がある。アジア主義との関係性から見ても、彼のアジア主義的な活動は、思想性を持ちえなかった心情だと結論づけられている。また、このように評価するために扱われる史料も、1897–1900年の恵州蜂起期前後の原稿と孫文ら革命同志との筆談による書簡に集中しているため、その後、滔天が浪花節語りに転身した時期に残した台本や、辛亥革命（1911年）後の書簡への考察は充実とは言い難い。

調査の目的と方法　先行研究の現状を受けて、本研究は滔天とアジア主義との関係性を体現する史料を手がかりに、最終的には、彼の活動に内包される思想性を析出し、滔天の思想を考察する修士論文を書くことを目的とした。一方、本研究は、基本的に『宮崎滔天全集』未収録の書簡・浪曲関係資料、及び写真資料を中心に調査を行った。

調査の概要　本研究は二回にわたって、①2022年７月に東京大学法政史料センター原資料部、②10月に熊本県荒尾市にある宮崎兄弟資料館で史料調査を行った。

①の調査では、マイクロフィルム資料をプリントアウトする形で、「(時勢ト英雄）孫逸仙」などの浪曲台本と、「筆談残稿」など、孫文との初対面で交わした筆談の原稿を中心に複写依頼を申し込んだ。特に、「筆談残稿」は漢文で書かれていたため、当時の知識人による崩し字への読解力を要する。これについては、今回の調査にあった困難と言えよう。また、修士論文執筆に大いに役に立った史料について言えば、1915年１月、日本の対中政策・日中両国の社会改造政策を提案するために、犬養毅、頭山満、副島義一らの推薦で滔天が大隈内閣下の第十二回衆議院選挙に立候補し、その関係資料としての「推薦状」、「立候補宣言」、「吾人の主張」が挙げられる。

②の調査については、予め見学・調査を電話で予約し、資料館側の対応のおかげで、学芸員が付き添いで展示資料の解説をしてくれる形で行った。また、報告者が調査日に資料館を訪ねた唯一の見学者だったため、学芸員と資料に対する見方について議論を交わす余裕ができて、貴重な意見を得た。調査は許可をもらっての撮影という形で展開し、滔天本人だけでなく、彼の思想に影響を与えた三人の兄についても書簡や著作を通じて理解を深めた（例えば、滔天の兄弥蔵による手帳、兄民蔵による「土地復権主意書」などが挙げられる）。史料調査が終わった後、学芸員の案内によって孫文と滔天との筆談場面を再現した蠟人形を見学し、国境なき革命同志の友情を身をもって体験した。見学の最後、資料館によって作成された『夢翔ける　宮崎兄弟の世界へ』という宮崎家兄弟四人の経歴をまとめた小冊子を購入した。

考察と結果　上述の通り、①の調査で入手した「立候補宣言」、「吾人の主張」に基づき、修士論文では、「中国革命はあくまで中国人自身が主体で行われるもの」という、滔天による対中政策に反映された変革主体への意識を析出し、彼が近代国民国家を超越した視点で、政略化しつつあったアジア主義とは異なる側面から「大アジア主義」を呼びかけていたことを明らかにした。一方、②の調査で入手した「委任状」は、辛亥革

命期に滔天が武器・資金調達を担ったことを物語っている。修士論文では、南北和議後の北伐を続けるには経済面で無理があると滔天自身が最も理解していること、さらに、日本の大陸浪人らによる中国革命への過度な関与に対して彼は警戒的であったことを析出した有力な証左として活用した。

古浄瑠璃の上演実態と芸談に関する実地調査
――佐渡・八王子・都城・薩摩川内をめぐって

松波伸浩　日本文学分野・専門 博士後期課程２年

はじめに　古浄瑠璃は、近松門左衛門『出世景清』（貞享２年＝1685）よりも前に行われた浄瑠璃の総称である。近松を頂点とみなす文学史観のもと、古浄瑠璃は稚拙あるいは未熟な芸能として等閑視されてきた。現在、古浄瑠璃が実演されているのは、佐渡、都城、薩摩川内、白山の４か所のみである。こうした土地に残ったのは、参勤交代の大名らの徒然を慰めるためとされ、戦前までは地域の婚礼において催し物としても上演されたという。太夫の語りを忠実に記したとされる「正本」は、その圧倒的多数が『古浄瑠璃正本集』などに翻刻されており、研究基盤は概ね整備されているが、注釈書は未だほとんどない。その翻刻を整定・注釈するなかで、火を使った演出や、人が箱や掛軸などから飛び出る演出など、ケレンの効いた演出が見られることに気づいた。文学研究の立場からは、そうした演出を発想する基盤となった知識に関心が引かれるが、当時の舞台でできたこと、できなかったことは何だったのかを解明する必要に迫られた。また、「小栗」や「刈萱」、「山椒大夫」などの説経も、中近世には好んで語られており、当時の人々の世界観や知識の基底をなしたものと思われ、古浄瑠璃との関連も密接である。説経は現在八王子や東村山で続けられている。本プロジェクトでは、古浄瑠璃と説経に関する上演実見と芸談の聴取を行った。

調査日程等　今回の調査先はいずれも名古屋からは遠く、コロナ禍でもあるため、現地教育委員会等を通じて上演や入場制限の有無、芸談聴取の可否を保存会に確認した。本プロジェクトで訪問したのは、6/19の都城、6/25の八王子（説経節、上演場所は荒川区日暮里）、11/20の佐渡であった。薩摩川内はコロナ禍のため上演が中止され、白山は諸般の事情により調査を実施しないこととした。

古浄瑠璃上演の特徴　古浄瑠璃の人形の特徴として、一人遣いであることが挙げられる。現在、国立劇場等の主要劇場で遣われる人形は、主に三人遣いで、手足や表情に動きを付けることができる。一方、一人遣いの古浄瑠璃人形はパペット型の突っ込み人形であり、手は動かすことができるものの足はなく、目鼻口は描かれたものであるため、表情の変化はない。一方で、本物の火や水を用いた演出は、古浄瑠璃ならではと思われる。例えば、古浄瑠璃形式で上演された、都城市の『出世景清』には、火あぶりの場面があるが、これは実火を用いて煙を立てていた。また、都城と佐渡で共通して、間狂言が行われたが、その際に水鉄砲程度の水が発射される場面があった。こうした演出が、古浄瑠璃の実際の上演を考える上で有効であることは言を俟たない。というのも、こうした火や水は、現在主に人形浄瑠璃文楽が行われている、国立劇場では火は光源、水は小道具や布などを用いて見立てて演出しているからである。

説経政大夫丈との対談　6/25の説経節公演前、政大夫丈と対談し、芸談や上演に関するお話しを伺った。中でも、文学研究の立場から興味深かったのは、現在でも道行文への人気が高いという点である。道行文とは、謡曲や浄瑠璃、軍記などで、旅程に現れる地名や光景を、縁語、序詞、掛詞を用いて巧みに歌い上げる文である。当時は現代のような遠方への旅行が難しく、人々は道行を聞いて楽しんだとされている。縁語や序詞などの巧みさが現代人の心を引きつけたと思われるが、そのような本文のあり方は文学研究の立場からも、さらになされるべきであろう。

むすびに　今回の調査により、古浄瑠璃上演の実態と、語り物の道行文が現代人を引き付けることが分かった。今後、さらなる本文調査、実地踏査、文献調査を積み重ね、当時の舞台で行われたこと、またケレンの効いた演出の知識の根源を明らかにしていきたい。

大日本帝国と樺太――樺太関係者の私文書の調査・分析から

水野善斗　　日本史学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　樺太は、日露戦争後に大日本帝国が植民地として領有した、現在のサハリン島北緯50度以南の領域を指す。つまり樺太は、日露の陸上国境の１つであった。そのため、大日本帝国の北方政策を考察する上で重要な植民地と言える。しかし、黎明期を除きその人口構成において内地出身者が90％以上を占めたため、大日本帝国下の他民族への圧政に注目した日本植民地研究の潮流と上手く適合できず――2008年のサハリン樺太史研究会の発足に象徴されるように1990年代の終わりから研究が活性化してきているものの――満洲などの植民地と比べて研究蓄積は全体的に乏しい（中山大将『サハリン残留日本人と戦後日本―樺太住民の境界地域史』国際書院、2019年、46頁）。その中でも、中央政府との政治関係の解明が必要であることが強く意識されている（原暉之・天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史―四〇万人の故郷』全国樺太連盟、2017年、350頁）。こうした政治史的分析の不足は、樺太の植民地官庁であった樺太庁の公文書がほとんど現存していないという史料状況も影響していると思われる。そこで本プロジェクトでは、日本各地に散在する、樺太現地や中央政府において樺太の政治運営に関わった人物（＝樺太関係者）の私文書で未翻刻のものを主に調査・分析することを通じて、この政治関係を明らかにすることを試みた。

フィールド調査プロジェクト訪問先一覧

所蔵先	所在地（県／市）	旧所蔵者	調査史料
いちき串木野市中央公民館	鹿児島県 いちき串木野市	長谷場純孝（1854–1914）	「長谷場家文書」 「長谷場家関係文書」
国立公文書館	東京都千代田区	（公文書）	「公文雑纂」
国立国会図書館憲政資料室	東京都千代田区	上原勇作（1856–1933）	「上原勇作関係文書」
		寺内正毅（1852–1919）	「寺内正毅関係文書」
東京都立大学図書館本館	東京都八王子市	上原勇作（1856–1933）	「上原勇作関係文書」
滑川市立博物館	富山県滑川市	石坂豊一（1874–1970）	「石坂豊一関係資料」
立命館史資料センター	京都府京都市	西園寺公望（1849–1940）	「西園寺公望関係文書」
		中川小十郎（1866–1944）	「中川家史料」

調査内容について　以下、所蔵先での調査史料と旧所蔵者について述べる。

【いちき串木野市中央公民館調査】長谷場純孝は政友会における有力人物であり、日露戦争末期のサハリン島出兵の最中に、７月末から９月まで同島に赴いた人物である（楊素霞『帝国日本の属領統治をめぐる実態と論理―北海道と植民地台湾・樺太との行財政的関係を軸として（1895–1914）』政大出版社、2019年、169頁）。所蔵先とはいちき串木野市 HP の中央公民館に関する「お問い合わせ」を通じて連絡し、現在整理を進められている中で整理済みの史料について許可を頂き、長谷場宛の書翰を中心に約150点の史料をいちき串木野市役所市来庁舎にて調査することができた。

【国立公文書館調査】「公文雑纂」という薄冊に収録された、後述する上原勇作や寺内正毅が作成した樺太に関する公文書を調査した。所蔵先への事前の連絡は不要であった。

【国立国会図書館憲政資料室調査】上原勇作は樺太に守備隊を派遣していた、北海道旭川に拠点を置いた第七師団の師団長を務めた人物であり（原暉之「漁業根拠地からの離脱、一九〇五～一五年」前掲原・天野編著『樺太四〇年の歴史』90、108頁）、寺内正毅は第一次西園寺公望内閣（1906年１月７日～1908年７月14日）において原敬内務大臣らとともに陸軍大臣として樺太の植民地官制である樺太庁官制の制定に関わった人物である（前掲楊『帝国日本の属領統治をめぐる実態と論理』107–135頁）。「上原勇作関係文書」所収

の上原の日記や、「寺内正毅関係文書」所収の寺内宛書翰を中心に調査した。所蔵先への事前の予約は、平日の開館直後から調査を開始したため不要であった。

【東京都立大学図書館本館調査】先述の国立国会図書館憲政資料室に所蔵されていない、上原の私文書を調査した。所蔵先とは、新型コロナウイルス対応による入構制限があったため、名古屋大学附属図書館を通じて連絡し許可を頂き、上原の日記や上原宛書翰など70点を調査することができた。

【滑川市立博物館調査】石坂豊一は1919年から樺太庁の官僚を務めた人物であり、この間に衆議院選挙への出馬を原敬首相から直接求められている。原について戦後に石坂は「大の樺太びいきの人であった」という回顧を残している（石坂豊一「わが人生“国会への道”」土肥政雄編『石坂豊一先生を偲んで』「石坂豊一先生を偲んで」刊行実行委員会、1984年、42–43頁。初出は1962年）。所蔵先とは滑川市HPの博物館に関する「お問い合わせ」を通じて連絡し許可を頂き、石坂の樺太庁勤務時代の日記や石坂宛の書翰を中心に約700点を調査することができた。

【立命館史資料センター調査】西園寺公望は先述したように樺太庁官制の制定時などに首相を務めた人物であり（前掲楊『帝国日本の属領統治をめぐる実態と論理』107–135頁）、中川小十郎は西園寺の秘書官を経た後に1908年から樺太庁のNo. 2である第一部長を務めた人物である（前掲原「漁業根拠地からの離脱、一九〇五〜一五年」93頁）。所蔵先とは、名古屋大学附属図書館を通じて「西園寺公望関係文書」の所蔵先と『中川小十郎関係文書』1–2（亀岡市史編纂室、1998年）と後述のDVDとの関係性について立命館大学図書館へレファレンス調査を行った際、立命館大学図書館による立命館史資料センターへの確認を経て同センターから許可を頂き、史料整理のため一般利用ができない中、前者所収の書類と「中川家史料」を調査することができた。なお後者の調査では、サハリン・樺太史研究会が撮影・編集・DVD化し同センターに納めたサハリン・樺太史研究会撮影・編集『中川小十郎文書樺太関連部分DVD（0910版）〈文書編〉』（2009年）と同『中川小十郎文書樺太関連部分DVD（0910版）〈写真編〉』（2009年）を利用した。

結論　修士論文では、樺太と中央政府との政治関係を分析する上で樺太の脱軍事化の政治過程を扱った。この脱軍事化は、日露戦争による樺太領有以降、第一次山本権兵衛内閣（1913年2月20日〜1914年4月16日）において原敬内務大臣による樺太庁官制の改正を受けて達成されたと評価されているが（三谷太一郎「大正期の枢密院」『枢密院会議議事録 別冊』東京大学出版会、1990年、46頁）、その政治過程は必ずしも明らかではない。そこで上述の調査史料を、『原敬日記』などの刊行済み史料と合せて分析した結果、日露戦争後に中央政府で進められた帝国再編の中で伊藤博文・寺内正毅と原敬が軍の政治への影響力を削ごうとした動きが（同前、小林道彦「児玉源太郎と原敬—台湾統治と統帥権改革・行政整理をめぐる対立と協調」伊藤之雄編『原敬と政党政治の確立』千倉書房、2014年、74–77頁）、寺内の媒介などを受け樺太・中央政府間の政治関係の改革（脱軍事化）に結実したことを明らかにした。特にこの分析では、「寺内正毅宛原敬書翰 1908年4月23日」（国立国会図書館憲政資料室所蔵「寺内正毅関係文書」31–2〜31–4）が重要であった。同時に、原の独特な筆跡は分析の高い壁であったが、玉澤友基「「原敬書簡解読字典」の編集について」（『岩大語文』21、岩手大学語文学会、2016年）などを活用し乗り越えた。なお調査史料中には、本分析以外の内容での活用を見出しうる史料も存在する。その検討は今後の課題である。

日本軍事学校の清国人留学生に関する一次史料調査

潘 揚波　東洋史学分野・専門 博士前期課程２年

研究背景　1894年、日清戦争が勃発した。戦勝国である日本が清国と「馬関条約」を締結したという結果は清国の洋務運動の失敗を示すものであった。日本の勝利のかげには西洋から学んだ政治・工業・商業・教育・軍事があると変法派は考えた。そこで、戦争の終わった翌年である1896年、早くも13名の留学生を日本に送ることになったのである。1901年、義和団の乱が勃発したことで、保守派が政権の危機を認識したため、西太后は自ら改革を推進して、光緒新政が始まった。その教育改革は千年以上続いてきた官員選抜制度である科挙を廃止し、新式の学堂を建てた。1903年、清国は「奨励遊学生畢業章程」を発布した。この章程は留学生が卒業した後の学歴と成績によって、挙人・進士などの階級に相応しい官職を授けるということを規定した。当時、清国の新式学堂制度がまだ完備されたとは言えず、いっぽうで科挙も廃止されたという時代背景の下で、「功名」と官職を得るために、外国へ留学することは読書人の最良の選択肢の一つとなったのである。留学生の中に、日本の陸軍教育を受けた者は多く、またその多くが後の重大事件に参加した。1903年に東京に設立された振武学校は、中国人留学生に向けて作られた軍事教育の予備学校として、大きな研究価値を持っている。

振武学校に関する研究は、日本国内においてもかなり少ない。実藤恵秀の『中国人日本留学史』（1960）は留日学生全体を対象に、全面的に留日学生の留学の理由、日本での生活・翻訳活動・革命運動などについて論述し、その中で振武学校に関する資料を使用し、振武学校の成立・教育を略述している。小林共明の「振武学校と留日清国陸軍学生」（1985）は東洋文庫の資料を用いて、振武学校は急速な近代化政策の実行に迫られ、しかもその人材不足に悩む西太后新政時の新政府の日本への依頼がなければ成立しえないような学校であったという論点を提出している。中国の研究者は振武学校を論じる時、これらの日本の研究を引用しているものが大部分である。周立英の『晩清留日学生与近代雲南社会』（2011）は振武学校を紹介する時、実藤恵秀の『中国人日本留学史』が使った資料を引用している。丁果の「関於振武学校的珍貴資料」（1987）は振武学校に関する資料を略述して一部分の資料の要点を書き取っているが、引用は多くなく、筆者の修士論文で参照するには不十分である。以上の先行研究は『振武学校沿革誌』、清国陸軍学生監理委員の書類など一連の史料に言及しているため、これらの史料を精査することは不可欠である。これらの史料の大部分は貴重書として東洋文庫に収蔵されており、複写や写真撮影が許可されておらず、本人が東洋文庫へ行って閲覧しなければならない。これらの史料の分量はかなり多く、決して一度の訪問で調査しきれるものではない。しかし、名古屋と東京の交通費は、私費留学生である筆者にとっては大きな負担である。ゆえに、フィールド調査プロジェクトを申請した。

調査経過　フィールド調査プロジェクトの助けで、筆者は自身の修士論文に基づき、東洋文庫へ行って49ページの資料を手で写した。原文書について詳細な調査を行い、振武学校における中国人留学生の活動について具体的な情報を書き写すとともに、先行研究の検証を行い、修士学位論文を完成させた。ここでは、東洋文庫に収蔵している資料を用いて、筆者の発見を検討する。

調査結果

振武学校創立の目的について

『振武学校沿革誌』によれば、「明治三十六年八月ノ創立ニ係ル。其目的ハ清国ノ武官タラントスル同国ノ留学生ヲ収容シ我陸軍士官学校又ハ陸軍戸山学校ニ入学スルノ予備学校ヲ施スニ」[1]とあり、「振武学校規則」

1）『振武学校沿革誌』、東洋文庫収蔵。

の第一条によれば、「本校は将来軍人になりたい清国留学生のために設置された。学生に予備教育を授け、即ち日本語と普通学である。後に陸軍士官学校と陸軍戸山学校に進学させることを目的にする」[2]とある。つまり、振武学校は軍人志望者のために作った日本語学校である。『振武学校沿革誌』の「附表第四振武学校学術科課程表」[3]を参照すると、振武学校の単位は全部で230であるが、そのうち日本語に関する教育は73時間であり、およそ31％を占めていた。「振武学校規則」の第五条によれば、振武学校の課程の回数について、図画を除くと1,658回あり、そのうち日本語に関する教育は522回で、やはりおよそ31％を占め、普通学もかなりの比率を占めている[4]。

振武学校の教育内容について

『振武学校沿革誌』によれば、留日学生の「修業年限ハ一年三ヶ月トス。修業年限テ分テ三学期トシ毎学期ヲ五ヶ月トス」とある。その科目について、『振武学校沿革誌』、『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』の「振武学校規則」には詳細な記載がある。その科目は日本語文・歴史・地理・算数・代数・幾何・三角・物理、化学、生理衛生・図画・典令・体操であり、軍事訓練である典令と体操を除き、他の科目は普通学である。「振武学校規則」はさらにどの程度の教育を行うかについても規定している。これに関する資料はたくさんあるので、ここには物理と典令を例にする。

物理　七十一回

まず理化学とは何者であるかを授け、また力学・熱学・電気学・磁気学等を授ける……

……

典令教範　百六十五回

体操教範の一部を授け、剣術教範の全体を授ける。また歩兵操典（中隊教練まで）と要務令（第五篇の行軍の条まで）を授ける……[5]

『振武学校沿革誌』には各科目の教科書についても記載している。

日文教程（成城学校編纂）、算術教科書（長澤亀之助編）、中等教育幾何学教科書（長澤亀之助編）、中等代数学教科書（樺正董編）、平面三角法教科書及ガウス氏五桁ノ對数表（遠藤又三編）、新編中学地理（天沢昌永編）、新式地文学（岩崎重三編）、〇〇〇〇等東洋史、西洋史（桑原隲蔵編、高桑駒吉編）、生理衛生学（斉田功太郎編）、近世化学教科書（池田菊苗編）、新編中学物理（木村駿吉編）、中等教育用量画教科書（山口大蔵）、中等臨画。[6]

成城学校[7]編纂の『日文教程』を除き、他はすべて当時日本で用いられていた一般の中学校用教科書である。これらの教科書の多くは「国立国会図書館デジタルコレクション」で公開されている。

振武学校の学生の募集について、清朝の留学生選抜ルールはかなり厳しかった。全ての学生はみずから願書を提出して、のちに州試験、府試験、省試験に参加し、合格したあとはじめて留学資格を得た。日本の側

2）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「振武学校規則」、東洋文庫収蔵、「本校係為清国留学生之将来願充武員者而設。授以予備教育、即日本語文及普通学科、令其後来昇進陸軍士官学校、或陸軍戸山学校為旨。」

3）『振武学校沿革誌』に付属する第三番目の表である。

4）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「振武学校規則」、東洋文庫収蔵、「日本語　三百回……日本文二百二十二回……算数百八十二回……代数　百四十七回……幾何学　百十回……三角法　四十七回……地理地文　二十八回……歴史　二十三回……生理衛生　三十二回……化学　五十三回……物理　七十一回……図画（記録がない）……典令教範　百六十五回……体操　二百七十八回……掌課回数、自属予定、未免有時或増或減。」

5）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「振武学校規則」、東洋文庫収蔵。「物理　七十一回　先教理化学之為何、再教力学・熱学・電気学・磁気学等……典令教範　百六十五回　授以体操教範之一班、及剣術教範之全体。並授歩兵操典（中隊教練為止）、要務令（第五篇行軍之条為止）。」

6）『振武学校沿革誌』、東洋文庫収蔵。

7）成城学校とは、陸軍士官学校の予備学校であり、韓国留学生の教育を担当していた。1898年6月に清国留学生部を開き、清国からの留学生を迎えた。1903年8月、新たに振武学校を作り、成城学校に在学した中国の武学生をすべてこの学校に移した。

における身分の審査も厳しかった。「振武学校規則」の第九条と第十条には以下のことが記されている。

第九条　本校に入学を志願する学生の条件について、十六歳以上、また本校が定めた学科課程を習える学力を持つ者を合格とする。

第十条　本校に勉強を志願する学生は、入学志願書と以下のような各書類を用意せよ。これらの書類を清国政府より派遣された東京駐在の留学生総監督を経て留学生監理委員長に提出し、結果を待つように。

一、清国の各省における責任を持つ官員の公文書。

二、東京駐在の留学生総監督の保証書。

三、学生が日本に来る前の履歴書。[8)]

この入学資格を見ると、清朝は革命派が軍事学を修得することを防ごうとしていたことが分かる。公文書、保証書、履歴書を提供するという身分審査の条件があったのはそのためである。

学校の編制について、『振武学校沿革誌』と「振武学校規則」には学校の編制が記録され、内容も同じである。「振武学校規則」にはさらに各職位の関係と責任を記している。そこで、振武学校の職位設置は以下のようである。

学生監　一切の校務を総覧し、職員を率い、学生を訓育する責任を兼任する。

舎監　学生監の命令を受けて、学校を整え、学生の勤惰を監視し、庶務の処理を兼任する。

教頭　学生監を助け、学生を監督し、課程を定め、教授を兼任する。[9)]

また、舎監については、明治三十八年十月二十日に振武学校の学生監が清国学生監理委員長代理に提出した「舎監勤務ノ状況ヲ付上申」に以下のことが記されている。

舎監ハ専ラ学生ノ訓育及監督ニ任ジ居ルラ以テ日々学生ノ自習室寝室及教室等ヲ巡視シ学生ノ行為勤惰ニ注意シ其他物品ノ保存手入装置清潔等規律ヲ厳守スルノ習慣ヲ養成スルニ勉ムル事。

学生ノ願届書等班長ヨリ差出ス時ハ之ヲ適当ニ処置シ其目ラ処断スルコト於サル者ハ之ヲ学生監ニ差出スコト。

体操及教練ノ補助ヲナシ典令ノ講授ヲナス事。

常ニ学生ノ性行ニ注意シ学期ノ終リニ其成績表ヲ調製スル。

学生ノ考科表ヲ調製スル。[10)]

「振武学校規則」の後に付されている「斉房条規」にはあらゆる場所で行うべき風紀を規定している。班長について以下のことが記されている。

第一条　全部の学生はいくつかの班に分けられ、各班に一人の班長を置く。

第二条　班長は各班の学生に二人の候補を挙げさせ、最後に学生監がその中から一人を定める。

8）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「振武学校規則」、東洋文庫収蔵。

第九条　願進本校之学生資格、在十六歳以上、而備有堪修本校所定学科課程之学力者、方為及格。

第十条　願進本校肄業者、開具入学願書、及左開各項文件。請由清国政府所派駐京留学生総監督。一併転呈監理清国学生委員長査閲候示。

一、清国各省有責任官員之諮文。

二、駐京留学生総監督之保潔。

三、学生東渡前後之履歴。

9）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「振武学校規則」、東洋文庫収蔵。

学生監　総理応辦一切校務、督率職員、兼任訓育学生之責。

舎監　承学生監之命、整頓校内、監察学生勤惰、兼任辦理庶務。

教頭　襄助学生監、監督学生、訂定課程、兼任教授。

10）『清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「舎監勤務ノ状況ヲ付上申」、東洋文庫収蔵。

第三条　班長の任期は一学期であり、満期した後続けて担当することも許す。[11)]

以上の資料を見ると、振武学校の本質は日本語と普通学を教授する予備学校であることがすぐに理解できるであろう。しかし、日本の学者と中国の学者は皆日本の隊付勤務を無視している。筆者の修士論文は振武学校の普通学と隊付勤務が清国人留学生の下士官教育の役割を果たしたということに気付いた。隊付勤務に関わる資料も東洋文庫に収蔵されている。その資料をまとめて検討することが今後の研究課題である。

フィールド調査プロジェクト経験談　東洋文庫の蔵書を閲覧するには、事前に予約することが必要である。予約の詳しい流れはネットで調べることができる。ここでは資料を探すことに注意すべき点を紹介する。普通の場合は先行研究に言及した資料名、或いはキーワードを利用して東洋文庫の蔵書・資料検索を行うことである。筆者を例として、東洋文庫のホームページに「振武学校」をキーワードにして蔵書・資料検索を行い、6939『振武学校学生請暇入退院転地療養書類』、6941『振武学校教科書学需品受払簿』、6942『[振武学校]卒業生ニ関スル書類』、6945『[振武学校学生退校事件]』、6946『振武学校沿革誌』（前の番号は請求記号）などの結果が出てくる。しかし、その請求記号が連続している数字ではないことに気付いた。気になったので、請求記号を用いて蔵書・資料検索を行おうとしたが、そのような検索はできなかった。後に直接に東洋文庫のスタッフに聞くと、6940『清国陸軍学生監理委員宛報告書』、6943『陸軍士官学校清国学生関係書類』、6944『清国学生学資金総計学資収支決算表』などの書名を教えてもらうことができた。この中でも特に、6940『清国陸軍学生監理委員宛報告書』という史料の内容は振武学校の校務状況を記載しているため、重要な資料である。また、「清国陸軍学生」というキーワードを利用して、探すべき資料の範囲も広がった。このように、資料を検索するにあたっては、様々なキーワード、検索方法を試してみることが重要である。

11）清国陸軍学生取扱及教育規程、他』「斉房条規」、東洋文庫収蔵。
第一条　所有学生分為数班、毎班設置班長一名。
第二条　班長由各該班学生内公挙二名、禀請学生監批定一名。
第三条　班長之任期定以一学期為限、有時或令限満続充亦可。

大正・昭和の大礼後式場拝観に関する公文書・新聞史料の調査

鈴木貴裕　日本史学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　大礼後式場拝観（以下、式場拝観と表記）とは、1915年11月に大正天皇が、1928年11月に昭和天皇が即位大礼を行った後、京都御所などに置かれた紫宸殿・大嘗宮・饗宴場の主に３つの大礼式場が、国民に対して公開されたものである。これらは二度とも即位大礼後の12月から約５か月間にわたって行われ、期間中に数百万人が訪れるほどの一大イベントであったが、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった。しかし、式場拝観は当時の国民が即位大礼を身近に感じられる数少ない機会のひとつであり、検討の余地があると考える。そこで本プロジェクトでは、東京と京都での史料調査を通して、式場拝観について大きく２つの点について明らかにすることを目標に掲げた。１点目は式場拝観がそもそもどのように計画・実行されたのか、２点目は式場拝観にどのような意義があったのかである。

なお、採択時のプロジェクトタイトルは「近代の大嘗宮一般公開に関する公文書・新聞史料の調査」であったが、より広範な議論にするため、大嘗宮の公開のみを取り上げるのではなく式場拝観全体を研究対象とする方針に変更したことにより、報告書ではタイトルを変更している。

史料調査①――宮内公文書館　閲覧室の利用は事前予約制であり、１週間ほど前に電話で日時と閲覧予定の史料を伝えて予約を取った。当日は北桔橋門から皇居に入り、公文書館の入る宮内庁書陵部庁舎を訪れた。ここでは、即位大礼の公式記録である「大正大礼記録」と「昭和大礼記録」の調査を、５月と10月にそれぞれ行った。これらはともに巻数が多いが、それを１冊にまとめた簡易版である『大礼記録』（清水書店、1919年）や『昭和大礼要録』（内閣印刷局、1931年）をWEB上で閲覧することでも研究は可能である。しかし、今回原史料を調査したことにより、簡易版では削られていた記述を発見することができたのはもちろん、より明確な根拠をもって議論することが可能になった。なお、「昭和大礼記録」は予約の段階ではどの巻にどのような内容が記されているかが分からなかったため、事前の電話では目次にあたる巻を閲覧予約した。そして当日は、目次から自分の見たい内容が載っていそうな巻を調べ、追加で閲覧申請するという形を取ったことで、スムーズに調査が進められた。

史料調査②――国立公文書館　閲覧室の利用に予約は必要なく、10月の調査当日は入口で受付をしたのみで利用できた。閲覧史料は事前にデジタルアーカイブで検索しておき、当日閲覧申請をした。ここでは、「大正大礼記録」や「昭和大礼記録」作成の元になった一次史料があるのではないかとの見込みの下で調査を行ったが、それらに引用されていない史料も数多く発見できた。ここで発見した史料は先行研究でも使われておらず、重要な成果であったと考える。なお、宮内公文書館と国立公文書館での調査では、大学の講義で古文書の扱い方を学んでいたことが役に立った。本物の文書を扱う機会がこれまであまりなかったため、大学での学びを実践できた点でも貴重な経験だった。

史料調査③――京都府立図書館　入館予約などは必要なく、９月の調査当日は２階のマルチメディア閲覧室を直接訪問した。ここで調査した史料は、『京都日出新聞』という当時京都で発行されていた地方紙である。これは京都の都市史などの研究ではよく使用される史料だが、式場拝観に関する研究で用いられたことはなかった。しかしイベントの規模からして多少は関連する記事があるだろうとの見立てで調査を行い、結果的に全国紙に比べて内容も豊富な多数の記事を発見することができた。これらは論文中でも多く引用するなど、その後の研究において中核をなす史料となった。なお、この図書館では『京都日出新聞』がマイクロフィルム版で所蔵されており、当日はマイクロフィルムリーダーで閲覧した。大きな画面に映し出された紙面を至近距離で見ながらの調査は大変だと聞いていたが、次々と興味深い記事が見つかるため、時間を忘れて１日中画面に見入っていたことが記憶に残っている。

史料調査④――国立国会図書館　最初に訪問した5月の段階では、コロナ禍のため、日付を指定して予約を取り当選すれば訪問できるという抽選予約制が取られていた。10月に再度訪問した際には、人数制限はあったものの予約はいらず、制限は緩和されていた。ここでは館内限定で公開されている史料の調査を行った他、他の図書館ではマイクロフィルムリーダーの調子が悪くはっきりと読み取れなかった部分を最新の機器で見直すなど、他での調査を補完する形で利用した。

史料調査の成果　まず式場拝観の計画段階について、自治体や学校など、国民側からの要請に応えるという形をとって計画が始められたことが分かった。一方で、昭和度には宮内省内に専門の部署が設けられるなど、宮内省側もこのイベントを重視していたと考えられる。また、大正デモクラシーの風潮により皇室にも民主化を求めるような動きが広まっていた当時、身分制限を設けずに拝観が許可されたことは式場拝観の注目すべき点である。当時、京都御所の拝観は身分の高い人などにしか許可されていなかったのが、式場拝観の期間だけはそれが解除された。それに加え、特定の団体や個人を優遇するよう求める要望が拒否されている事例からも、平等性を保つことが式場拝観において重要であったことが分かる。

また、二度の式場拝観には3つの意義が共通して見られることが分かった。1つ目は、拝観した子どもたちに天皇制への支持を広げるという「教育的意義」、2つ目は、全ての国民に拝観を許可することで天皇制への支持を取りつけつつ、その権威も再確認させるという「国民教化的意義」である。これらに加えて、式場拝観によって利益が得られるという「商業的意義」も見出された。この「商業的意義」は先行研究ではあまり重視されてこなかったが、式場拝観に多数の国民が訪れたのは、娯楽的な楽しみを求めた人々が鉄道会社の宣伝合戦などによって式場拝観に誘導されたことによる部分が大きかったと考えられる。

まとめ――史料調査を通して　まず、コロナ禍における史料調査では事前の計画がより重要になると感じた。訪問に事前予約が必要な機関もあったが、それは予め調査の行程を決めておく必要があり、またその通りにしか動けないということでもある。計画的な行動が必須といえるだろう。しかし、制限が緩和されて以降の調査では、余った時間に急遽国立国会図書館を訪れるといった、臨機応変な行動も可能になった。今後こうした機関の利用制限がどうなるかは不明だが、コロナ禍の記録として残しておきたい。

また、遠方に史料調査に行くことの難しさもあった。遠方の機関に何度も通うことはできず、またコロナ禍の影響で突然移動が制限される可能性もあったため、一度の調査で十分に史料を集めないと再度そこに行くことはできない、との意識で調査に臨む必要があった。それにより幅広く史料を集めておいたことで、調査の過程で修士論文のテーマを変えた際にスムーズに対応できたのはよかった点である。しかし、それでも足りないものが出てきたため、後に国立国会図書館を再度訪問することになってしまった。そのときは感染状況も落ち着いていたので急遽追加の調査を設定できたが、場合によっては史料が足りない状況で修士論文を書かなければならなくなる可能性もあっただろう。これは本プロジェクトを通しての最も大きな反省点であり、今後の史料調査の際にも意識すべき点であると考える。

参考文献

伊藤之雄（2010）『京都の近代と天皇―御所をめぐる伝統と革新の都市空間 1868～1952』千倉書房.
河西秀哉（2013）「歴史を表象する空間としての京都御所・御苑」高木博志編『近代日本の歴史都市―古都と城下町』思文閣出版.

日本列島における渡来系遺物・遺構の考察
――革袋形須恵器を中心に

陳 永強　　考古学分野・専門 博士前期課程２年

はじめに　「特殊須恵器」[1]の一種とされる革袋形須恵器[2]は戦前からその特異な形状と用途不明であることで注目を集めてきた。多くの研究者による資料紹介が蓄積されているが、以下の事例については不明な点が多いため、実際のフィールド調査を実施した上で整理してみた。

鞍投窯跡　鞍投窯跡は佐賀県小城市に所在したが､開発で消滅したようである。『世界陶磁全集２』（1979）所収の小田富士雄氏による「九州須恵器」[3]の一文の中に、「窯跡としては佐賀県鞍投窯跡がある程度である。ここでは、皮袋形土器の出現が注目される」の記述がある。また佐賀県立九州陶磁文化館の徳永貞紹氏によると、『三日月町史 上巻』（1985）の「三 古墳時代の遺跡の分布」[4]の項目に「鞍投古窯跡」について簡単な記述と数点の出土品の実測図が掲載されている。さらに三島格氏の「肥後の須恵器資料(二)」[5]では革袋形須恵器の出土地は「佐賀県三日月村織島・東分・鞍投所在の須恵器窯跡出土例」と記載され、「須恵器はⅡ及びⅢA 式の焼損品と共に発見された」と指摘されている。こうした文献記録からみると、鞍投窯跡から革袋形須恵器が出土したことは確実なようである。

小篠原古墳　京都国立博物館に革袋形須恵器が所蔵されている。この資料はかつて梅原末治氏が、「大岩山附近古墳発見土器及び玉類」[6]と題して、遺物のモノクロ写真を載せていた。野洲市歴史民俗博物館の鈴木茂氏から、「これは、野洲市の字大岩山を示していると思われる。現在の遺跡名での該当する遺跡・古墳群は、田中山古墳群、桜生古墳群、福林寺古墳群、山脇古墳群、大岩山遺跡と思われるが、いずれから出土したのかは不明である。過去に野洲市の職員が、梅原先生の資料を調査しており、そこには「近江國野洲郡大篠原古墳出土　知恩院造」と明記されている。このことから､梅原先生が上記の論文を作成されるまでに、出土地を大篠原から大岩山に訂正されておられることがわかるが、その訂正の根拠は不明である」と教示を頂いた。京都国立博物館の宮川禎一氏から提供された資料には、「小篠原古墳」という文言が箱に記載されており、「伝滋賀県野洲市小篠原出土」とされている。写真による観察では、色調は灰黒色、焼成堅致、頸部は短く、根元に直径 4 mm の穴が開いているが、出土後の穿孔かどうかは不明である。全体形状は紡錘形を呈し、器体には無規則の竹管文が施されている。法量は、口径6.2cm、高11.0cm、幅19.5cm である。

八幡山６号墳　八幡山古墳群は兵庫県美方郡香美町村岡区福岡にあり、６号墳は八幡山古墳群の最も西側に位置する円墳である。古墳の約29m 西に木棺直葬とされる、墳丘径約 7 m、高約 1 m の円墳が陪塚として存在する。そして玄室は框施設を有する横口部に袖石を配置する両袖型プランの石室である。北西に開口し、

1）柴垣勇夫（1987）「特殊須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』6 、pp. 11–27、愛知県陶磁資料館.

2）研究者によってその呼称は異なるが、一般的には「皮袋形提瓶」、「皮袋形瓶」あるいは「革袋形土器」、「革袋形瓶」と呼ばれることが多い。ここで「皮」か「革」かの用言定義については、「製袋に由来するのであれば、加工されていない段階の「皮」を使用するのは不適切で、なめし加工された「革」を使用するべきこと」を平林彰氏・牛嶋英俊氏が主張している（平林1996; 牛嶋2010)。その後、入江文敏氏が研究史的経緯から検討することで、「皮袋形」を使用した（入江2015)。本稿において、古代の手工業生産に近づけるために、用言の定義として「革」を扱い、加えて「皮袋形土器」（大塚・戸沢編1996) と呼ばれる土製品があることから、混乱を招かないように「革袋形須恵器」と呼ぶことにしたい。

3）小田富士雄（1979）「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2 、pp. 227–233、小学館.

4）三日月町史編纂委員会編（1985）『三日月町史』上巻、三日月町.

5）三島格（1963）「肥後の須恵器資料（二)」『熊本史学』25、pp. 33–37、熊本史學會.

6）梅原末治（1935）「栗太、野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告（近江国に於ける主要古墳の調査録其二)」『考古学雑誌』12–2、pp. 147–160、聚精堂.

全長4.85mで4枚の天井石を用いた竪穴系横口式石室である[7]。出土遺物は村岡民俗資料館まほろばに所蔵され、珠文鏡1、環頭太刀1、玉類、須恵器と土師器が出土した。これらの遺物から5世紀代から6世紀に遡る古墳とされる[8]。革袋形須恵器の全体形状は台形状を呈し、胴部下部に「／┴＼」の突帯が貼り付き、それに沿う形で半截竹管文が施される。環状の把手が付き、肩部にも半截竹管文が一回り施されている。口頸部と肩部の接合部は平面をなし、頸部はラッパ状のように外反し、口縁は端面をもち、外方に張り出している。法量は口径8.0cm、頸部高4.0cm、器高14.0cm、底幅20.1cmである。

成正寺の所蔵資料　北野博司氏は「第4節 特殊須恵器」[9]の集成表に志雄町散田オハエ（べ）古墳出土と伝える革袋形須恵器を提示した。この資料は現在、石川県宝達志水町の成正寺が所蔵している。筆者の実見観察によって、革袋形須恵器の胴部から底部にかけての破片であることを確認した。破片の胴部から底部にかけて3か所に突帯が貼り付き、それに沿う形で竹管文が施されている。断面からみると、胴部は膨らみをもって底部にナデ調整後に接合したようで、底部形状が直線的に緩やかに側面に向かって伸びていることから、全体形状は台形であった可能性が高いと考えられる。

岐阜市歴史博物館の所蔵資料　岐阜市歴史博物館に所蔵された革袋形須恵器はこれまで報告されていない。学芸員担当の吉田晋右氏によると、出土地は多治見市内出土と伝える。法量は、口径8.0cm、頸部高4.9cm、器高12.1cm、底幅22cmである。全体形状は「紡錘形」を呈し、胴部に突帯が貼り付き、それに沿う形で刻み目が施されている。底部の両端の重なり合ったところが垂れ下がっている。口頸部の作りは外反し、刻み目が施され、口縁に二重の端面をもち、外方へそのまま張り出させる。

愛知県陶磁美術館の所蔵資料　愛知県陶磁美術館に「稲荷神社出土」とされる革袋形須恵器が所蔵されている。法量は、口径8.2cm、頸部高5.0cm、器高18.6cm、底幅25.4cmである。全体形状は「扇形」を呈し、胴部上位から底部にかけて「／｜＼」の突帯が貼り付き、それに沿う形で半截竹管文が施されている。両側の突帯が若干湾曲して、両端の底部に水平に向かって伸びている。頸部と胴部にかけて、かき目調整が見られる。

名古屋市博物館の所蔵資料①　名古屋市博物館に二個の革袋形須恵器が所蔵している。1点目の法量は、口径6.2cm、頸部高5.3cm、器高13.0cm、底幅24.9cmである[10]。全体形状は「紡錘形」を呈し、肩部から垂直に2条突帯と、両裾に向かって八字状に各1条突帯が貼り付き、「／｜＼」を表現している。竹管文は頸部と突帯に沿って不規則に施している。口頸部は内湾気味にほぼ直すぐ立ち上がる。

名古屋市博物館の所蔵資料②　『名古屋市博物館だより（1998）』の「新資料紹介」によると、二点目の革袋系須恵器には「大井」という文字が墨書きされており、外箱には「松江市朝酌町字大井野津古墳」というラベルが貼られている。ただし、「野津古墳」として広く知られている古墳は存在しないものの、該当する地域である松江市大井町には多くの群集墳が分布している[11]。この情報から、松江市大井町には複数の古墳が存在し、そのうちの一つが「松江市朝酌町字大井野津古墳」として言及されている可能性が考えられる。革袋系須恵器は口縁部が欠けており、膨らみをもつ台形の形状をしている。全体には竹管文による刺突が不規則に施されており、突帯が胴部の上部に貼り付けられている。また、頸部を巻くように配置され、側面上部で交差している。頸部の下部には透かし穴が開いているが、これが出土後に穿孔されたものかどうかは明確ではない。法量は現存器高15.0cm、胴径21.3cm×12.5cmである。

おわりに　本稿では基礎資料の提示と整理に重きを置いているため詳細な分析はできず、課題を積み上げ

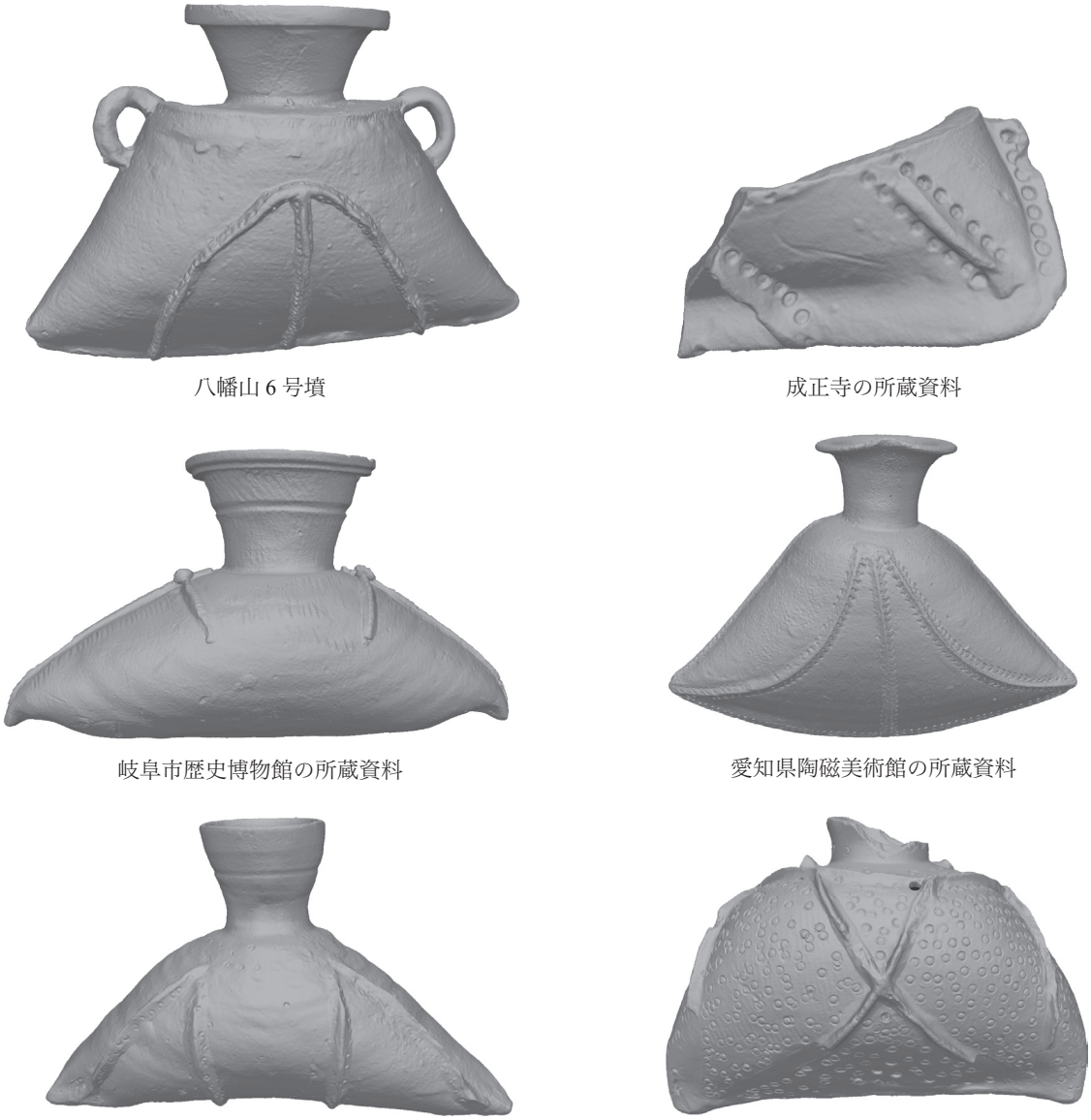
7）大手前大学史学研究所・香美町教育委員会（2014）「八幡山古墳群」『兵庫県香美町村岡文堂古墳』13、pp. 261–265、大手前大学史学研究所・香美町教育委員会編.

8）兵庫県教育委員会（1974）『兵庫県文化財調査報告書 史跡7 八幡山古墳群』兵庫県教育委員会.

9）北野博司（1997）「第4節 特殊須恵器」『祭祀具Ⅱ』pp. 47–49、石川考古学研究会.

10）名古屋市博物館（1987）「20. 須恵器 皮袋形瓶」『館蔵品図録Ⅱ』p. 150、名古屋市博物館.

11）名古屋市博物館（1998）「新資料紹介」『名古屋市博物館だより』第122号、名古屋市博物館.



第１図　革袋形須恵器の三次元画像

るだけに終わってしまった。今後、より詳細な報告や資料化を進めつつ分析を行いたい。

参考文献
大塚初重・戸沢充則編（1996）『最新日本考古学用語辞典』柏書房.
平林彰（1996）「長野県屋代高等学校所蔵の革袋形瓶」『長野県立歴史館研究紀要』2 、pp. 72–78、長野県立歴史館.
牛嶋英俊（2010）「革袋形土器研究小史―附・革袋形土器集成」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』pp. 169–186、同志社大学考古学研究会.
入江文敏（2015）「特殊須恵器の分布とその背景」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』pp. 58–77、河上邦彦先生古稀記念会.

図版出典　第 1 図は、筆者が各所蔵機関から許可を得て、対象となる遺物の写真撮影に基づいて作成した三次元画像である。

謝辞
資料調査に際しては、各文化財機関の方々にはご高配とご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。
愛知県陶磁美術館、名古屋市博物館、岐阜市歴史博物館、京都国立博物館、九州陶磁文化館、野洲市歴史民俗博物館、村岡民俗資料館まほろば、宝達志水町教育委員会、成正寺
大西遼、冨田航生、吉田晋右、宮川禎一、德永貞紹、鈴木茂、石松崇、竹森杏奈、飛龍

ミトラス教関連の文献調査並びに考古学遺物の現物調査

小林 卓　　西洋史学分野・専門 博士後期課程１年

はじめに　この報告書は、2022年度フィールド調査プロジェクトに採択され、大学から調査費用の助成を得て実施した American Academy in Rome（イタリア、以下 AAR と略称）でのミトラス教関連の文献調査とフランクフルト考古学博物館（ドイツ）で開催されていたミトラス教の展覧会の視察で得られた成果を報告すると共に、特に海外の歴史・制度・文化を研究対象とする学生にとって海外の研究機関を利用することの利点と意義について報告し、参考に供したい。

調査日程と目的　2023年２月９日に日本を出発し20日に帰国したが、17日に予定していた帰国便が空港ストライキによって欠航となったため最後の２日間はフランクフルトでの待機を余儀なくされた。従って日欧の往復の移動と待機の日数を除けば、実質の活動日数は AAR での調査が４日、ミトラス教展覧会の視察が２日である。AAR での調査ではミトラス教に関する学術書、学術雑誌、碑文集成および発掘調査報告書の書誌情報の収集と現物のコピーの入手、並びに日本からの当該文献へのアクセス方法を確認することを目的とした。というのも、研究を始めるにあたり ICT を利用して必要な参考文献をリストアップしたが、国内の大学・研究機関ではミトラス教関連の文献所蔵が限られており実見できないものが多いこと、また最新の海外での研究書には未知の文献が数多く引用されているため、海外の著名な研究機関の図書室を訪問して実際に自身の研究対象に関連する文献がどれ程存在するのかを確認し、そのうちどれだけ日本で入手ができ、自身の研究でどの文献を使用するのかを判断しておく必要があったからである。

また、ミトラスを研究対象とする以上、ミトラス教徒が残したミトラスのレリーフや彫像、あるいは祭壇や奉納碑文といった遺物を実見することは必須である。しかしながらミトラスに関する遺物は国内の博物館での所蔵は皆無であり、海外に赴く必要があった。

AAR での文献調査　AAR は17万冊の蔵書を誇るが教科書や一般向け入門書は皆無で、所蔵されているのは年代記や碑文集成のような史料集か専門的な学術書のみである。つまり AAR が利用を受け入れているのは専門の研究者であって、大学生は基本的に対象としていない。大学院生でも指導教員の紹介状が要求され、研究目的が明確であって定員に余裕がある場合に限り利用が認められるのみである。蔵書の年代は一部の稀覯本を除き、19世紀末以降最新のものが集められている。但しこの期間に刊行された全ての文献を集めている訳ではなく、それぞれの研究分野で必読とされているものや非常に有用な文献が取捨選択されて収蔵されている。カバーしている範囲は藝術を含めた人文学の分野で、一部デザインや歴史の観点から都市計画の文献などは含まれているが、純然たる自然科学や社会科学の文献は目にしなかった。

図書室では使用する机が割り当てられ、持ち込めるのは基本的に PC と筆記用具のみである。それ以外の私物は飲料水も含め持ち込みが禁止されている。また私語は厳禁で、静謐な研究空間を保つ義務がある。

図１　American Academy in Roma の外観

図２　図書館内の閲覧室

AAR では利用を開始する前に、利用に関するルールを学ぶオリエンテーションへの参加が義務付けられている。これは担当の図書館員が広い図書館内を案内しながらどの分野の蔵書がどこにあるかを紹介しつつ、同時に利用者として遵守すべきルールの説明がなされる。図書室の利用方法そのものについてはあまり説明がなかったが、滞在期間中不明な点は図書館員に聞けば必ず親切に返答してもらえるので、質問することに躊躇さえしなければ何ら不安はない。

筆者の場合は学術書の確認もさることながら、ローマ帝国の周辺地域で発見された碑文の集成を実見しコピーを取ることに第一の主眼を置いていた。しかしながら *CIL*（*Corpus Inscriptionum Latinarum*）のような歴史学者なら誰しも知る著名な碑文集成とは異なり、地方の碩学が編集したハンガリー語やスロバキア語による集成は、いきなり書棚に行って探しても見つけることは容易ではない。筆者は出発前に研究書によく引用されている碑文集を抽出し、Abbreviation を見て書誌情報をメモしていった。AAR では OPAC のような電子式検索システムがあるので、最低限書誌情報が分かっていれば検索することが可能だからである。たまたま AAR には専属の西洋古代宗教史の研究者（Dr. K. Iara）がおり、同氏との面談の中で筆者の研究テーマと今回の調査目的を伝えたところ、筆者のテーマに有用と思われる碑文集 8 点とミトラスの発掘調査報告書および国際会議の論文集13点をデータベースから抽出してリスアップしてもらうことができた。但しこのリストはあくまでも同氏の自発的な好意によるものであって、当たり前に出てくるものではないことをお断りしておく。

結果として日本ではなかなか手にすることができない碑文集を複数閲覧することができ（一部コピーを入手）、次いで学術書では蘭ブリル社が刊行している EPRO（Études préliminaires aux religions orientales dans l'Émpire roman）シリーズの全巻、更には複数の発掘調査報告書と学術雑誌を閲覧することができた。

特に聖典や教徒自身が記録した文書が全く残されていないミトラス教の研究では、遺物に刻まれた碑文がほとんど唯一の一次史料であるが、その碑文集成のコピーが入手できたことで、今年学会で発表を予定している属州ダキアでの製塩業を母体とするミトラス教集団形成の裏付けをとることができた意義は大きい。

但し AAR では文献の所蔵管理は大変厳しく、利用者による館外持ち出しは勿論のこと、大学図書館との ILL にも対応していないことが判明した。

図３　閲覧室

図４　開架式書庫

AAR で得られた成果はこれだけに留まらない。先にふれた自身と共通する分野での専属研究者の知遇を得、今後必要な情報収集のサポートもしてもらえる関係を築くことができた。更には筆者が研究対象としている属州ダキアのミトラス研究の第一人者である Dr. Csaba Szabó を紹介してもらうことができた。このように現地研究者との関係を構築することができたことも大きな成果である。

ミトラス教の展覧会　ミトラス教の研究では先に触れたとおり遺跡に残された祭壇や彫像等の遺物の実見は不可欠である。しかしながら、ミトラス教の考古学遺物は北アフリカやシリア・イランまでを含む旧ローマ帝国全域に分散しそれぞれ地元の博物館が収蔵・保管しているため、数多くの遺物を実見することは非常

に困難であった。今回の展覧会は欧州委員会の支援を受けて欧州内16カ国47の博物館から遺物を集めた特別な展覧会であった。本プロジェクトは2021年11月から本年４月まで約１年半に及び、期間中、展示場所をベルギー、フランス、ドイツと巡回し、今回は視察できる最後の機会であった。

展覧会ではただ実物を見るだけでなく、遺物の色や大きさ、造形の精粗、年代の古さ、刻まれた銘文の大きさや配列などをじっくり手に取る近さで観察することができたが、何よりも大きな発見はミトラスのレリーフの周囲に施された様々な場面の彫刻である。これらはミトラスの一代記の特徴的な場面を表すものとしてしばしば写真が掲載されるが、図版ではなかなか細部を詳細に見ることができなかった。今回それらの彫刻をつぶさに見ることによって想像していた以上に様々な場面が描かれていることが分かり、そのイコノグラフィーをより詳細に研究する必要性を感じた。また実際にミトラスのレリーフや祭壇を配置して神殿内部を再現したコーナーでは入信儀礼の雰囲気を実感することができ、今後ミトラス教の宗教思想・世界観を検討していく上で貴重な経験となった。今回の展覧会は欧州各地に散在するミトラス教遺物を一度に観察できる絶好の機会であり、事前に博物館から写真撮影の許可を取得して２日間で約700枚におよぶ撮影を行った。

図５　フランクフルト考古学博物館

図６　ミトラスのレリーフ（ニーダ出土）

海外の研究機関を利用することの利点と意義　海外の歴史や制度・文化を研究対象とする以上、本場で行われている研究の実態を知っておくことが重要であることは改めて言を俟たないであろう。その方法として海外の学会へ参加したり大学へ留学することもあろうが、今回文献調査を実施してみてAARのような研究機関を活用するのも非常に有用であると感じた。AARは必ずしも一般向けに広く門戸を開いている訳ではないが、研究者に対して必要な史資料と研究環境を提供することを活動目的としているため費用も大学の授業料程高くなく、一方で必要なサポートはいつでも得られ利便性は非常に高いと言える。また内部に専属の研究者もいるため、自身の研究分野と共通する場合は研究上のアドバイスを得られたり、他の研究者を紹介してもらえる場合もあり、ただ単に日本にない文献が見られる以上の利点が見い出せよう。

海外の研究機関を利用することの意義を筆者なりにまとめれば、研究活動の場を海外に広げる良いきっかけになるということである。最初に開けた扉が小さければその後に見られる世界も限られたものになるが、逆に大きな扉を開けることができればそこから更に世界を広げていくことができ、前者との違いは想像以上に大きなものになると確信する。最後にこのような機会を提供して頂いた関係各位に心から謝意を表したい。

日中交流の観点から見た８～10世紀の中国窯業

張 睿帆　　考古学分野・専門 博士後期課程２年

研究背景　日本の窯業が長期間にわたって中国と密接な関係を有していたということはよく知られた事実である。特に、近代以来の正倉院蔵三彩器の産地をめぐる論争と1955年以降の猿投窯の分布・発掘調査を契機とし、奈良、平安時代の日本と古代中国の窯業交流に専念した研究者が多く現れた。さらに中国古外銷磁研究会と日本貿易陶磁研究会の設立に伴い、両国間の研究者の交流も頻繁になり、1970年代末から90年代初頭にかけては、古陶磁研究が大きく進んだ時期となった。その中でも、日本で出土する中国から輸入した陶磁器は、亀井明徳氏によると、「初期貿易陶磁」と言われる。

本研究では、この８～10世紀、つまり奈良時代と平安時代前期における日本で出土した中国陶磁に基づいて、中国の産地元へ赴いて踏査を実施し、猿投窯をはじめとする日本古代施釉陶器窯業との連結点の有無について確認および検討を試みた。

課題所在　2000年以降、中国における大規模開発に伴い、新出資料は多く見られたが、日本側における施釉陶磁研究ブームが次第に落ち着いたために、該当時代の中国陶磁にもあまり関心が向けられなくなった。こうした状況の中で、日本施釉陶磁と中国陶磁の関係を再検討するため、この８～10世紀の中国窯業の調査は必要不可欠だと思われる。

越州窯と日本窯業の連結点　越州窯は、前代の落ち着いた時期を経て、８世紀の後半から10世紀の末にかけて、陶磁生産の新たな盛期を迎えた。この時代の越州窯系青磁は、日本全国で出土した中国陶磁のおよそ九割を占め、貿易陶磁の主役であったと言える。

今回の調査では、越州窯考古発掘の主要実施機関である中国浙江省文物考古研究院を訪ね、当院の謝純龍氏から教示をいただくとともに、８世紀末期以降の越州窯青磁を実見した。まず、越州窯青磁の陰刻文様について調査を実施し、結論としては紀年資料の中で、日本の緑釉陶器の陰刻紋様より前の時代のものは越州に存在しないことがわかった。次に、越州窯青磁の輪花装飾を調査し、日本施釉陶器上の輪花装飾より明確に早いものはほとんどないということを明らかにした。また、日中窯業交流史上によく言及される三叉トチンは従来、中国北部のみの窯道具だと考えられてきたが、今回の実見に即して、晩唐五代の越州窯にも使われたことを知った。ただ、大半が単面突出型の三叉トチンで、日本施釉陶器生産に使われた両面突出型の三叉トチンは確認できなかった。

長沙窯と日本窯業の連結点　長沙窯の黄釉磁や青磁は中国晩唐五代における主に海外向けの陶磁器として、日本の初期貿易陶磁の３％を占めた。この割合はそれほど高くないが、日本で模倣品が作られたので、日中窯業交流史上で研究的意義がある磁窯と考えられる。

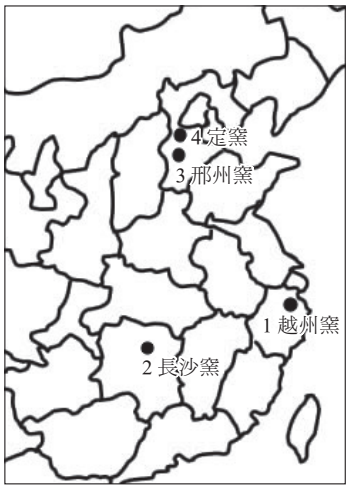
今回、日本施釉陶器水注の面取り注口に関する検討を主目的とし、長沙窯の主要発掘機関である中国湖南省文物考古研究院を訪ねた。同じ形式の面取り注口部は越州窯でもあったが、一般的には八面の面取りであったので、猿投窯と少し違う様相を示す。それと比較して、長沙窯の水注の面取り注口は日本施釉陶器水注と連結した可能性が高いと現地調査を経て考えられる。そして、当研究院の張興国氏との質疑を経た共通見解としては、平安時代の「緑釉緑彩」陶器は生産意図が理解しにくいが、長沙窯の遺物を参考にしたら、やはり緑釉褐彩を志向して作ったものではないかとの結論に至った。

邢州窯、定窯と日本窯業の連結点　大宰府、鴻臚館、平安京などの一連の平安時代前期の日本の遺跡から、中国白磁がよく出土している。これらの白磁の産地については、中国中部の鞏義窯や、東南部の未知の白磁窯という説もあるが、本研究では、やはり通説の中国北部の邢州窯と定窯をはじめとする邢州窯系磁窯に従う。

ここ数十年以来の定窯の発掘調査に関わる報告書がいまだに出版されておらず、現時点では数本の発掘概

要彙報のみがあることは残念だが、邢州窯の発掘成果をまとめる報告書はすでに出版され、多くの新知見をもたらした。したがって、今回の中国北部白磁系磁窯への調査においても、邢州窯を主役として、定窯の発掘成果は参考程度にとどめた。

以上の二つの窯の主要発掘機関である中国河北省文物考古研究院では、まず白磁蛇の目高台碗を調査し、結果として、越州窯の青磁蛇の目高台碗のうちに日本施釉陶器蛇の目高台碗の高台形式と極めて似ているものを確認した。そして、輪花装飾の調査も行い、結局越州窯の状況と同じく、日本施釉陶器上の輪花装飾より明らかに早いものはほとんどないことがわかった。また、邢州窯三彩器は、中国洛陽周辺の鞏義窯の三彩および西安周辺の唐三彩と異なって、化粧土をあまり施さないという特徴がある。これと、同じく化粧土を施さない奈良三彩との関係は、今後検討する必要があるであろう。また、日本施釉陶器生産によく使用した両面突出型の三叉トチンは、邢州窯にも確認できた。なお、当院の黄信氏から、定窯の発掘成果をまとめた報告書も、数年のうちに出版予定だという朗報を聞いた。必ず今後の研究に役立てられると考える。



付図　8～10世紀における中国主要磁窯の位置略図

終わりに　本報告では、今回の研究調査テーマに関わる収穫のみを挙げたが、今回のフィールド調査は前述した機関以外に、今後の研究に役立つ可能性のある様々な8～10世紀の中国陶磁を収蔵している研究機関を訪ねた。以上のように、確実に日本向けの商品を製作した中国陶磁窯への踏査を通して、古代日本と中国の施釉陶器生産の間には、技術上の困難さを伴う窯構造のような技術交流や模倣関係の存在が言い難いものの、8～10世紀における日本施釉陶器は、中国の様々な陶磁窯から輸入された陶磁製品を通して、確実に器形、製造技法や生活慣習などの影響を受けた可能性が十分であると言えよう。

付記　この報告書は、名古屋大学人文学研究科フィールド調査プロジェクトからの助成を受けておこなった、『古代猿投窯の施釉陶器技術と関連する中国陶磁窯の調査と相関資料収集』の調査結果に基づくものである。

参考文献

愛知県史編さん委員会（2015）『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』.
愛知県陶磁資料館編（1998）『日本の三彩と緑釉―天平に咲いた華』.
愛知県陶磁美術館編（2022）『平安のやきもの―その姿、うつろいゆく』.
亀井明徳（1986）『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎.
河北省文物考古研究院ほか編（2021）『邢窯（上冊）』科学出版社.
熊海堂（1992）『東アジアにおける窯業技術の発展史と技術交流史の研究』名古屋大学大学院文学研究科課程博士学位論文.
慈渓市博物館編（2002）『上林湖越窯』科学出版社.
長沙窯課題組編（1996）『長沙窯』紫禁城出版社.

２．教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）（2022年度）

2-1　自己紹介の会開催一覧（2022年度）

通し回数	年 月 日	登 壇 者	分野専門	発表タイトル（発表時タイトルが無い場合は、研究分野）	瞬間最多参加人数
2	2022年７月６日	川本悠紀子	西洋古典学	古代ローマ史・古典考古学・Architectural History	55名
		宇都木 昭	言語学	外国語教育・音声学	
3	2022年９月６日	志波彩子	日本語教育学	言語学・日本語学	未確認
		杉山美耶子	YLC（美学美術史学）	『イメージ、観者、そして空間イメージの分析へ』	
4	2022年10月７日	伊藤早苗	YLC（歴史文化学繋）	アジア／アフリカ史・楔形文字文書学	29名
		山口庸子	ドイツ語圏文化学	ドイツ文学・舞踊史・芸術	
5	2022年11月２日	新井美佐子	ジェンダー学	フェミニスト経済学・社会政策	29名
		吉田早悠里	文化人類学	『20世紀初頭エチオピア資料のデジタル・アーカイヴズ化（と、デジタル人文学の試み）』	
6	2022年12月８日	三輪晃司	英語教育学	心理言語学・実験心理学・言語学	39名
		長山智香子	メディア文化社会論	文化研究・クィア研究・批判的人種研究	
7	2023年１月10日	北村陽子	西洋史学	ドイツ史・戦争犠牲者援護	29名
		松下千雅子	ジェンダー学	クィア理論・スポーツ科学・LGBT 研究	
8	2023年２月６日	村尾玲美	英語教育学	外国語教育・第二言語習得論	36名
		鈴木　真	哲学	倫理学・19世紀イギリス哲学	
9	2023年３月８日	安井永子	共通（言語文化学繋）	相互行為分析・コミュニケーション学・会話分析	47名
		河西秀哉	日本史学	『象徴天皇制の歴史学的研究』	

2-2　FD・ワークショップ・その他一覧（2022年度）

年 月 日	発 表 者	題目・概要等
2021年４月10日	川村祐斗・吉本裕史	日本学術振興会特別研究員応募説明会（１回目）
2022年７月～2023年３月	別途記載	自己紹介の会（通算第２～９回目）
2022年12月14日	松下千雅子・三輪晃司	人文系研究者にとっての共同研究（1）
2022年12月23日	川村祐斗・吉本裕史	日本学術振興会特別研究員応募説明会（２回目）
2022年２月21日	別途記載	フィールド調査プロジェクト報告会（第７回教育研究推進室主催ワークショップ）

2-3　FD 報告

人文系研究者にとっての共同研究（1）

松下千雅子・三輪晃司（司会：宇都木 昭）

宇都木　今日は、人文系研究者にとっての「共同研究」について考える機会にしたいと思います。共同研究が最近話題になることがあるので、既に経験されている先生方のお話を伺いながら考えたいと思います。(1)としたのは、2回目もやろうかなと考えているからですが、それはまた改めてご案内します。

お話しいただくのは、ジェンダー学の松下先生と英語教育学の三輪先生で、順番としては、松下先生に先にお話しいただいて、それから三輪先生。それぞれのお話の後で5分ぐらいの短い質疑の時間を設けて、その後残りの時間で、ちょっと長めの質疑とか意見交換ができる機会を持ちたいと思っております。トータルで90分の予定です。

早速、松下先生、お願いします。

＊　＊　＊

【共同研究を始めるまで】

松下　はい。よろしくお願いします。ジェンダー学の松下です。共同研究を始めてから日が浅いので、私がFDでお話しするのはちょっとおこがましいのですが、私の専門はもともと文学で、そこから心理学などのアンケート調査を始めるようになりました。文学の先生はこの研究科にたくさんいらっしゃいますので、私の経験は皆さんの経験とリンクするところがあります。そこで、皆さんの参考になるかと思い、この話をお引き受けしました。

まず、私のことをちょっと知っていただきたいので、私が経験した共同研究についてお話しし、その後、研究指導と共同研究の線引きについて少し考えてみたいと思います。

私はもともと、アメリカ文学のLGBT研究、「クィア・リーディング」を専門にしており、クィア・リーディングの方法論の確立を目指していました。具体的には、脱構築や精神分析、ナラトロジーの理論を応用しながら、文学作品の中でどのようにセクシャリティーが認識されていくのかを探っていました。その研究成果は、2009年に『クィア物語論』という拙著として出版しました。

とても大きな目標を果たした後で、ポスト・ヒューマンや動物表象など、その当時流行りかけていたテーマをしようかと考えてみましたが、結局、脱構築とか精神分析を応用するのは同じことの繰り返しのように思えて、あまり関心が持てなくなりました。もう一つ、ナラトロジーを専門にしだすと、やはり読者論に発展していきます。小説の解釈行為の探究には、現実の読者に対する調査は多分あったほうがいいのですが、そもそも文学研究は、作品内に想定された読者として「理想的な読者」を扱うことが一般的で、現実の読者にアプローチするすべがありません。そこに常々文学研究の限界を感じていたこともあり、2015年に一念発起して、以前から関心があったスポーツ研究を、ジェンダー研究にとっては重要なテーマなので目指すことにして、当時、科研の挑戦的萌芽研究に採択されました。

それなりに実績もあったことを捨てるのは結構勇気が必要でしたが、あまり関心が持てないことを惰性で続けていてもこの先の研究者人生楽しくないし、当時あと15年あったので、5年間できっちり基礎を身に付けたら、その後の10年で実績はそれなりに残せるのではないかと思い、始めることにしました。もう一つは、文学研究は一人でやるので寂しく、誰かと一緒に研究してみたいということがありまして。文学で共同研究というと、共著は一種の共同研究だと思うし、シンポジウムや学会で、数人で同じテーマを発表する

のも共同研究と思いますが、結局自分の担当部分だけを一生懸命一人でやって、お互いが何を話すか知らないままシンポジウム当日を迎えて、一人ずつ自分の研究を発表するという感じで、共同で何かをする経験をしたことがなかったので、やってみたいなとずっと思っていました。始めてみて分かったことは、何かを始めるのに遅過ぎることはないということでした。

共同研究がどのようにして始まったかは、2016年に科研費が採択されてお金があったので、調査できる、アンケートを早速やりましょう、と。最初は全然分からなかったので、金相美先生からアンケート調査のやり方をとても丁寧に教えていただきました。金先生、どうもありがとうございました。金先生の指導生の論文も読ませていただいて、「あ、こうやってやるのか」と。金先生から学んだことは非常に大きかったです。

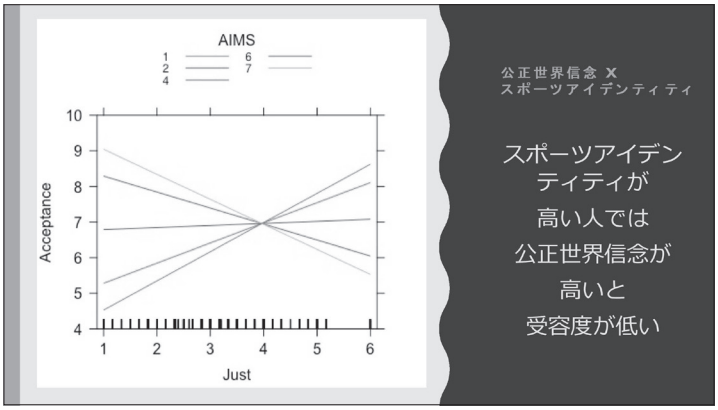
あとは、自分がやりたい分野である「トランスジェンダーのスポーツ参加」に関する先行研究を読みまくって。本当に素人だったので、アンケート調査というのは好き勝手に質問項目を作って何でもかんでも聞くのではなくて、世の中には尺度というものが存在していて、それを使ってアンケートを作り、そして論文が仮説と仮説検証で成り立っているということを（その時に）知りました。そういう論文ばかり読んでいたということです。「スポーツとジェンダー学会」に参加して、研究どころを探り、基本的な文献を知って、名古屋のレインボーパレードに出展して、初めてインタビューを取って。その時の成果は、スポーツとジェンダー学会の学会誌に掲載されていますが、一人でやれること、自分だけでやれることを知ることができました。

【共同研究の始まり】

非常にレベルが低いことしかできなかったので、統計分析を教えてくれる先生を探しました。当時、赴任したての三輪先生が統計の専門家だと聞いて、三輪先生にお願いし、共同研究を一緒にやっていただくことになりました。三輪先生には、いろいろ教えていただいたことをとても感謝しています。統計分析のあり方などは、普通は大学院などで先生から学ぶものですが、私の場合は今さら大学院に入り直すことはしなかったので、共同研究をしながら学ぶことになりました。三輪先生には、本当にたくさん教えていただきました。まず調査票は、前に金先生に教えてもらったので、同じようなやり方で自分なりに作ってみて、それを三輪先生に見てもらい、私が何を明らかにしたいのかを聞いていただき、三輪先生が「この分析をしましょう」と、分析方法を提案してくださいました。当時の私は、それが何の分析かあまりよく分かっていませんでしたが、混合効果モデルの回帰分析を行いました。後々説明してもらってだんだん分かってくることになりますが、最初にアンケートを取った時には全然分かっていませんでした。データを集めた後で、統計ソフト「R」の使い方を三輪先生に教えてもらいながら分析をスタートさせていきました。

かなり長いこと分析し、投稿して書き直して、かれこれ2年ぐらいかかりましたが、その間、徐々にお互いの専門分野のことが分かってきて、専門的なディスカッションがどんどんできるようになりました。この時のうまくいった秘訣は、役割分担が割とはっきりしていたことです。つまり、私が研究テーマに関するアイデアを出して、三輪先生が分析メソッドに関するアイデアと、さらに私に分析を教える、という役割分担でした。私が非常にラッキーだったのは、これが完全に分業制というわけではなく、三輪先生の研究室で何度も何時間も、データや原稿を二人で確認して、ディスカッションを重ねていけたことです。なので、お互いに自分たちの研究内容がよく分かったという、自分で言うのもなんですが、理想的なやり方で初めての共同研究ができたと思います。修正稿も含めて、原稿を必ず二人で確認して、一緒に投稿していました。もっと専門性が高く深い分野になってくると、本当に完全分業制で、「自分のやっている部分は知っているけど、全体像は分からないわ」という研究が、おそらく世の中にはあると思うのですが、そうなってしまったら、最終的にその論文全体に責任が持てなくなってしまうので、そうではなくて良かったと思っています。三輪先生との共同研究はとてもいい体験でした。重要なのが、気が合うこと、尊重し合えること、そして協調性があること。今になってそう思います。というのも、本当に長い時間を一緒に過ごすので、気が合わなけれ

ば難しいと思いました。



これが実際に用いたアンケートの一部で三輪先生が分析した結果ですが、国際ジャーナルに投稿しました。一緒に共同研究をする時に、最初に二人で「絶対これは」と決めていたのは、なるべくインパクトファクターの高い国際ジャーナルに投稿しよう、ということで、めでたく『Sport Management Review』という、インパクトファクターが5.589あるところに採択されました。このようなスポーツ研究やアンケート調査については、実は三輪先生もアンケート調査をしたことがなかった。三輪先生は実験をする先生なので、二人とも初めての分野で、かなり冒険だったかなと今さらながら思いますが、私たちが大変ラッキーだったのは、投稿先でのレビジョンでたくさんフィードバックをもらいまして、書き直しでとてもつらかったのですが、おかげで論文がブラッシュアップされました。具体的には、「仮説に説得力を持たせるために先行研究をもっと調べてください」「理論的枠組みでちゃんと仮説を立てること」など、良いフィードバックをもらいました。一人ではなかったので、とても心強かったです。全く新しい分野でも「やったらできるんだ」って、結構私はポジティブシンキングなので、ポジティブになっていました。

【異分野との共同研究】

その後、名古屋大学の卓越大学院の TMI「移動イノベーション」というプロジェクトに参加しました。ここは文理融合でやっていますが、（プロジェクトに）誘われた時に理系の先生から「文系の先生からアイデアをもらったら、理系の自分たちが実現するからアイデアをください」と言われ、「そんなものかな」と思っていました。しかし、「その逆もあり」と今は思っています。なぜならば、主に理系の学生たちと一緒に TMI の社会調査のプロジェクトに参加したのですが、彼らは、自分たちの技術が一般に受け入れられるかどうかをアンケート調査で知りたいという願望、そういう社会調査で調べたいというアイデアを持っていたので、社会学や私が、（それを）実現するための質問票の作り方を教え、役立つ尺度や分析メソッドを紹介することになったからです。なので、理系からアイデアを頂いて、文系から分析メソッドを紹介する関係になっています。どちらの関係でも、アイデアとメソッドの役割分担が成立していることが大事だと思います。

【近いが異なる分野との共同研究】

三輪先生との後で、TMI で社会学や経済学の先生と共同研究しました。そこで、注目している点が私とは違うということを知りました。社会学の先生は標本調査にこだわる。つまり、各都道府県から人口比に合わせて「東京都は何人で、秋田県は何人で」といったことに、非常にこだわっていると思いましたし、出版された尺度はあまり用いないと思いました。先生にもよると思いますが、一緒に共同研究した先生はそのような感じでした。経済学の先生は推定法にこだわっていて、分析に多くの数式が出てきて、同じ社会調査をして分析してもこんなに違う、と思いました。社会学の先生からは、「松下先生は心理学ですから」と言わ

れて、「ああ、そうなんだ。私、心理学なんだ」と、その時は気付いていませんでした。心理学の出身でもなんでもないですが、私が読んだ先行研究の多くが心理学だったからだと思います。その後、社会心理学の先生と共同研究をすることがあり、まさしく私がやっていることと変わらなくて、分かり合えました。よく考えると三輪先生も心理言語学なので、私が学んだメソッドは心理学だったと思います。近いけれど異なる分野と共同研究する際は、遠く離れた分野同士で行う場合とは配慮すべき点が違うことを、この時学びました。

【現在の共同研究】

今共同研究しているのは、実は文学部の仏文学の学生と。これも TMI に参加している学生ですが、彼女のリサーチクエスチョンがとても面白く、文学の評価について、文学を専門的に学んだ人とそうでない人との間に違いがあるのか、というリサーチクエスチョンを持っていたので、「だったら、小説の好みを測る尺度の開発をしましょうか」と私から提案し、共同研究を行っている最中です。偶然にもこのリサーチクエスチョン、文学研究に限界を感じていた私が、読者論とかナラトロジーの研究をしていて現実の読者にアプローチできない、と思っていたのをまさしく可能にする研究で、私も関心を持っており、文学理論を基に小説の好みに関する質問票を作成し、今は因子分析を行っていて、途中から情報学研究科の石井敬子先生に参加してもらって、石井先生から、「どういう心理的特性を持った人がどのような小説の好みになるのかを調べるために、心理学の尺度が一つあったほうが良い」というアドバイスを頂き、現在分析中です。

ここまでが私が現在、実際に行っている共同研究で、今やっているのは、曖昧性をどのように許容するのか、曖昧であることの許容度が、文学を読むことによって養われるのではないか、という仮説を基にこの研究を行っており、ここまでが共同研究です。

【学生との共同研究と指導】

ここからは具体的に、学生と共同研究する（可能性）を考えてみたいと思います。心理学とか社会学とか、言語学の一部もそうだと思いますが、共同研究が当たり前の分野であれば、「学生を指導すること＝学生と一緒に研究をすること」につながり、そこから共著者になる関係が、かなり明快だと思います。

これまで文学や文化研究の学生を指導して、最近は社会調査の学生を指導する割合が増えて、ほぼそうなっていると思いますが、本当にこの関係は明快で、教員と学生の関係は共同研究者同士の関係でもあるかな、と。学生一人よりも良い研究ができると思うので、学問そのものにもとても有益で、共著者になることが前提なのでどこまで指導すべきか迷うことはないと思います。それから、共著者になるためのルールは割と明快で、これは三輪先生が後ほど紹介してくださるので、参考にしていただければと思います。

ところが、「ちょっと困ったな、考えなきゃいけないな」と思っているのは、アンケートやインタビューをする調査系の学生とは、すごく指導した上で共著者になるんですが、文学や文化研究の学生に対しては、同じだけ指導しても共著者になってきていない。今まで、私はやったことがないです。じゃあ全然指導しないかというとそうではなくて、私からアイデアを提供することもあるし、大幅に原稿を修正することもある。だから、非常に貢献していると思うんですが、これまでの経験上、共著者になったことはありません。

理由は二つあって、文学研究とか文化研究には、共著という文化や前例があまりないからです。もう一つは、共著の価値が低過ぎるからです。だから、すごく貢献しているから共著であってもおかしくないような論文でも、共著にしてしまうと学生のその後の就職活動に不利になるのでは、など、学生のためを思うと共著者になるべきではないと思い、学生から「共著者になりますか？」と聞かれても、お断りして共著にはしないでいる。それは、その学生にとってはベストな選択ですけど、同じ指導生でも、調査系の学生には共著になり、文学・文化だったら単著にすることの不公平感がかなりあって、私の中でもモヤッとしています。

共著にしない場合は、どこまで指導すれば良いかの線引きが難しい。どこまでが職務としての指導で、どこからがオーサーシップに関わるのかは、線引きが非常に難しいと思っています。いろいろと共同研究する分野で、教員が全然貢献していないのに名前だけ出ているギフトオーサーになる例は、批判されることはあるけれども、文学や文化研究ではむしろ逆で、教員がゴーストオーサーになっている例があるんじゃないかと、今はとても思っています。研究に貢献した人が、貢献した分をオーサーシップに反映させるのは、私は両方経験していてそれが健全だと思っているので、今後、文学や文化でも、「共同研究」という文化が導入されていくと良いなと思っています。単著の方が評価が高い分野では、教員がゴーストオーサーにならないように心掛けないといけない。現状では適切な指導の分量が分からないので、手伝い過ぎている人もいれば学生の自主性に任せ過ぎている人など、こんなにたくさんいると、どちらがいいとは言えずまちまちかなと思うので、この辺の線引き、ガイドラインがあるといいと思います。

私からの提案は、共著は単著と比べて価値が低いと思わないでほしいということと、学生とオーサーシップについて話す機会をぜひ持っていただきたいということです。私の学生も、徐々に共同研究について理解してきて、文学や文化の学生であっても、私が指導したら「先生、共著にしますか」と聞いてくれる。やはり、そういう会話が一言あるのとないのではえらい違いなので、オーサーシップについて話す機会を持つといいと思います。それから、共著にする時としない時の研究指導のガイドライン、「ここまで指導しますよ。これ以上指導したら共著ですよ」という感じで学生と共有するのも、一つの手かなと思います。

【まとめ】

新しいことに挑戦するのに遅過ぎることはない。今挑戦して 5 年したら、 5 年の経験は今からでも積んでいけると思います。あと、共同研究は一人じゃないので心強い。いろんなものが学べて、一人ではできないことができるので非常に良い。私はお勧めしたい。ですが、協調性があることが前提なので、「気が合う人とでないとうまくいかない」はあると思います。もう一つ、共著は単著と比べて価値は低くない。それなりに労力は同じです。時間もかかるし、単著でできないような大きなプロジェクトをやっているので、論文の価値としては絶対に低くない、と断言できます。それから、オーサーシップに配慮した研究指導のガイドラインは、個人ではなく研究科で考えてもよいかと思います。私からのメッセージですが、新たな境地に到達するために、新しいことに挑戦するのは幾つになってもできると思うので、ぜひ皆さんどうぞ。

質問というか、ちょっと話し合えれば、と思っていることですが、異分野の人たちと共同することに関心がありますか？　あるとしたらどのような分野ですか？　学生との共著に抵抗がありますか？　共著にしない場合の、適切な指導量はどのぐらいでしょうか？　皆さんの経験や考えをシェアして、FD なので質問というよりディスカッションをメインにやっていただければ、と思います。以上です。

宇都木　松下先生、ありがとうございます。最初に言いましたように、短めの質問等ありましたら、ここでちょっと受け付けたいと思います。ディスカッション的な部分は、最後に、三輪先生のお話の後でまとめたいと思います。何か質問等ありましたら、ぜひお願いします。

ちょっと私から。三輪先生以外との共同研究は、全部 TMI つながりですか。

松下　そうです。TMI つながりです。

宇都木　TMI がいい機会になっている感じですか。

松下　そうですね。TMI がなかったら、心理学の石井先生と共同研究することもなかったし、経済学、環境学の先生ともやっていますが、そちらもなかったと思います。面識がそもそもなかったので、良い機会になりました。

宇都木　ありがとうございました。私の学生も一人、TMI に最近入りましたので、よろしくお願いします。

松下　はい。

宇都木　皆さま、いかがでしょうか。特になければ、三輪先生のお話に、と思いますが。よろしいですか。では、最後でまとめて時間を取りたいと思います。松下先生、ありがとうございます。
松下　ありがとうございます。

＊　＊　＊

宇都木　では、三輪先生、お願いします。
三輪　はい。こんにちは。聞こえますか。
宇都木　はい。聞こえます。お願いします。
三輪　スクリーン見えてますか。
宇都木　はい。見えています。お願いします。
三輪　「適切なオーサーシップと共同研究のための最強のソリューション」。最近、横文字を使う方が増えたな、恰好つける人が多いな、と思い始めたので、自分もちょっと格好つけてみようと思い、こんなタイトルにしてみました。今日ご提案するのは「最強のソリューション」です。今回の FD に参加してほしい方は、まず、共著より単著のほうが価値が高いと考えている方。単著で論文を書いているが、他人の助けを借りている人。共著で論文を書いているが、「何となく」の流れやラボの文化でオーサーシップを決めていて、ガイドラインを持っていない人。研究指導とオーサーシップを一緒に考えていない人。これだけ見ると、松下先生のお話とかぶる部分があるかもしれないですが、進んでいきます。

【はじめに～自己紹介】

アカデミアの世界で物心ついた時から、共同研究をしてきた心理言語学者です。専門は単語認知で、雑誌のエディターとして『PLOS ONE』や『Frontiers in Psychology』でエディター業務をしてきて、心理学系・言語学系の雑誌で査読をしてきました。これを紹介したのはなぜかというと、出版までの裏側を結構見てきました、というアピールです。途中でオーサーシップが変わることを見てきましたので。

アルバータ大学で学部課程と大学院時代を過ごして、テュービンゲン大学でポスドク時代を過ごしました。これを紹介したのはなぜかというと、日本と欧米は文化的に違うと思いまして、これが共同研究にも影響していると思ったからです。学生時代から今まで共同研究率100％です。これまで73人の研究者と共同研究をしてきました。結構多いですが、後でなぜか分かります。現在査読中の論文も含めると73人です。

まず謝辞から。学生時代に Harald Baayen 先生、Ton Dijkstra 先生、Gary Libben 先生、Patrick Bolger 先生、Sally Rice 先生。自分の指導教員と、外部の指導教員みたいな先生です。Ton Dijkstra は外部の先生ですが、これらの先生から、オーサーシップについてと、共同研究のやり方を教わりました。恐らく大学院生の皆さんは、ラボでのやり方に影響されると思うんです。自分の常識は、アルバータ大学の言語学科でつくられました。オーサーシップに関して、名大の同僚の先生方との雑談も参考になりましたが、名前を出すと、今後の話で「あの人のことかな？」というのが出てきちゃう。これがいいのか悪いのか分かりませんので、お名前は出しませんが、感謝しています。

今日のアジェンダです。まず、人文学と共同研究。次に、オーサーシップの決め方。オーサーシップと研究指導。これは松下先生のお話にも入っていました。最後に、適切なオーサーシップと共同研究のための最強のソリューション。本当に最強のソリューションですから、最後まで見逃しのないように聞いてください。

【人文学と共同研究】

近年、共同研究が盛んになっています。共同研究の規模も量も増えている。自分に関しては、元から100％ですから増えようがないけれど、国際共著、産学連携、学際的研究が増えています。共同研究をして

いた人が単著になるのは少ない、自分は見たことがないですが、単著で書いていた人が共同研究を始めるのは、松下先生の例のように結構あると思います。心理言語学分野に関しては、言語間や文化間の比較が増えていますから、いろんな言語をテストするためにいろんな国の人が実験に参加、という意味で、共同研究の規模が大きくなっています。研究で求められる技術も昔より高度になっていますから、新しい技術を始める時は、その専門家をチームに入れたほうがやりやすいと思います。松下先生は、統計分析で私を入れてくださった。どんなトピックも突き詰めて行くと、隣接する学問分野と一緒に共同研究していくことが有益じゃないかと思います。心理言語学だと、社会心理学と共同研究したり、AI のチームとやったり。これが現状です。

松下先生のお話にもありました、共著と単著の業績比較です。文系分野だと、共著より単著のほうが評価される風潮がある。実際、業績評価を見てもそんな感じに評価されていると思います。考えてみると、昔子どもの頃に、パジャマを一人で着られるか、「パパッパ、パッパッ、パジャマジャマ」という歌が頭に流れてきましたが、パジャマを一人で着られる子どもが偉い、親の助けを借りずに着られると偉い、と。「共同研究より単著が偉い」というと、個人的には、大人版の「ひとりでできるもん」のような感じだと思ってしまう。あと、一時期流行った競泳用の水着のレーザーレーサー。あれは一人で着られない。複数人で着ないといけないようで、「レーザーレーサーの着用を手伝う人と、パジャマを一人で着られる人は、どちらが偉いでしょうか？」という話は、考えてみるとどちらも偉くない。比較がちょっと難しいかな？

松下先生のお話にもありましたが、共同研究は、一人でできないことをするために複数人が協力していますから、そもそも仕事量が多い。最終的な成果物が大きくなるので、一人の仕事量が少ない、というわけではないと思います。特に、共著の第一著者と単著の著者は、どちらが偉いという比較は難しいです。

【共同研究のすすめ】

松下先生は結構ポジティブなお話をされましたが、人生の問題のほとんどは人間関係から来るので、やみくもに共同研究を始めるのはリスクがある、と個人的には思います。人付き合いはそんなに好きではないので、できればしたくないですが、これも結婚の話に似ています。いろんな方が「まだ結婚していないですか。結婚しなさい」のようなプレッシャーを与えてきますが、「結婚されて幸せですか」と聞くと、「いやあ、いろいろありますね」となる。共同研究も同じで、「共同研究、いいよ」という話をよく聞きますが、「実際にどうですか」となると、「いや、いいこともあれば悪いこともあって」。そんなことだと思います。

同じトピックに取り組んでいる、アプローチが異なる研究者との共同研究はしづらいと思います。逆に、違うトピックに取り組んでいたほうが、ある意味、分担がはっきりできるので、共同研究はしやすいという印象があります。昔 Ton Dijkstra 先生に、「共著者は一歩引いて研究を楽しむぐらいの姿勢がちょうどいい、全力を出し過ぎない」と言われました。共著者も全員全力を出すと、「船頭多くして船山に上る」な感じで研究が頓挫してしまいます。松下先生との共同研究の時も、全力を出し過ぎないことを頭に置いていました。あと、何に関しても失敗例はあまり報告されません。成功者の体験談には「生存者バイアス」があることに注意が必要だと思います。

（この FD は）大学院生も聞いている、という理解ですが、大学院生が先生方に共同研究をお願いすることは、失礼ではありません。つまり、指導教員じゃなくても、周りの先生方に共同研究をお願いするのも失礼じゃなくて、世界的に著名な海外の研究者であっても、自分から共同研究をお願いしてもいいと思います。自分は昔、指導教員の Gary Libben 先生に、「バイリンガル研究で今世界で一番優れている研究者は、個人的には誰だと思いますか？」と質問したところ、「うーん、Ton Dijkstra かな」という話だったので、それから Ton Dijkstra 先生の論文を見て、「いつか私は Ton Dijkstra と共同研究をするんだ」と、周りの先生たちに言っていました。そのうちにチャンスが転がり込んできました。指導教員の Harald Baayen 先生から、「Koji、ちょっ

とオランダにデータ取りに行ってきて、ついでに Ton Dijkstra に会ってくれば？」と言われて、共同研究が始まったんです。

大学院生へのメッセージですが、海外の大学院生からはメッセージを受け取ることが多く、論文に関する質問が多いですけど、日本人の大学院生からはメッセージを受け取ったことがない。日本人は、「教員にこちらから質問しちゃ駄目」、「海外の先生にメールしちゃ駄目」と、結構バリアがある感じですが、皆さんが躊躇している間に、海外の大学院生は質問があったらすぐ聞く、そんな姿勢です。時々「研究のアイデアをください」というメールもありましたが。日本は文化的に独特だと思います。国際学会で、「Miwa, Dijkstra, Libben, & Baayen 研究」を発表した時、私はカナダ、Dijkstra 先生はオランダ、Libben 教授はカナダ、Baayen 教授はドイツ、とみんな所属が違いました。日本の先生から、「何でこんな共同研究ができるの？」と質問されましたが、質問の意味が分からなくて。「え？　お願いしたから」と返事をしたのですが……。日本は共同研究に対してちょっと閉鎖的で、日本／海外、国内／国際、という区別がはっきりしていると思いました。

【オーサーシップと研究不正】

Publish or Perish の世界は、かなりプレッシャーですよね。教員は、研究費獲得のため、昇格のため、報酬のため。中国では、論文を出版したら報酬がもらえる大学もあるみたいで、とにかく論文の本数稼ぎに必死で。大学院生も、奨学金の獲得や就職のためやら業績づくりに必死で。皆さんがそうか分からないですが……。Publish or Perish、「論文を出版するか死ぬか」という世界だと、研究不正が絶えることがない。不正を勧めているわけではないですが、「死ぬぐらいだったら不正したい」と言う人がいるのでしょうね。

なぜ研究不正の話を出したかといいますと、オーサーシップの問題は「研究不正」ですから、正しい理解が必要です。文部科学省の研究不正をまとめたページには、最近の不適切なオーサーシップが 4 件あります。不適切なオーサーシップがある時は大抵、他の捏造・改ざん・盗用も関わっています。まっとうに仕事をした人が正当に評価されて、著者リストに加えられることが理想だと思います。しかし現実は、公表されなくても問題が起きているケースはたくさんあると思います。

【オーサーシップの決め方】

松下先生は、「オーサーシップの決め方は明快で、それは三輪先生がお話ししてくれるでしょう」という話でしたが、

・本質的な貢献をして、
・研究内容を理解して、
・原稿を最初から最後までしっかり読んで承認した人たちを、
・貢献した順番に著者リストに入れる、

以上です。それ以外の貢献をした人には、「ありがとうございました」と謝辞でお礼を伝える、それだけです。「以上、ご清聴ありがとうございました」、で終わってもいいですが、問題は、「何をもって本質的な貢献をしたと見なすか」です。ここまでのルールは明快ですが、ここから先が簡単ではないです。

『PHD Comics』、自分の好きなコミックで、大学院生にお勧めです。アカデミアのいろいろな問題をみんなで笑おう、ってことですが、当然「オーサーリストの背景」も含まれています。こんな順番でオーサーが並んでいますよ、と。ファーストオーサーは、実は「Made the figures」。「図を作っただけか、君は」と。最後の Smith 先生は、ラストオーサーの責任著者ですが、よく読んでみると「Hasn't even read the paper」。「読んでないのか、Smith」と。結局、すごく仕事をしたのはサードオーサーで、よく読んでみると「First year student who actually did the experiments, performed the analysis and wrote the whole paper」。「彼がほとんどやった」

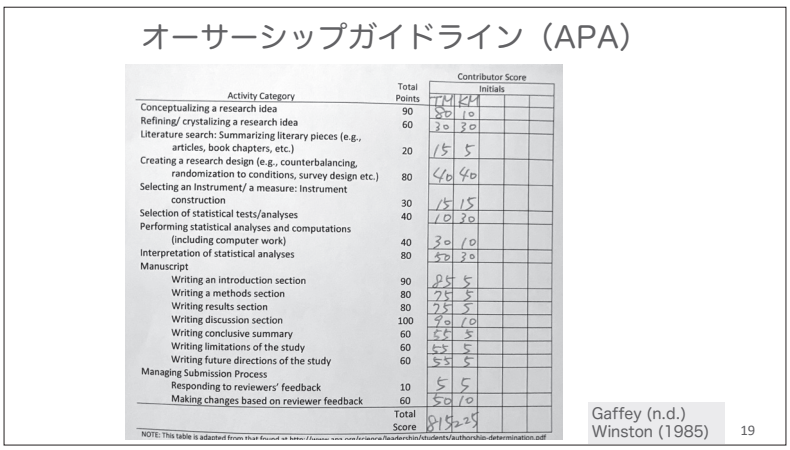
と。もうぐちゃぐちゃですね。これを見て笑う人が結構いるということは、こういう問題が本当にあるのでしょうね。

問題のあるオーサーシップ、こんなケースもあるかもしれないですね。学生が 1 人で出すよりも、教員が共著者となったほうが論文はいずれ広く読まれるから、教員がギフトオーサーシップをやる。「私が入ったほうが論文は読まれるから入れなさい」と言われた学生が、「ああ、先生が入ってくださる。ありがとうございます。これで私の論文がたくさん読まれます」。それ、不正ですから。実験に必要な機器や資金援助をしたという理由で、教員がギフトオーサーシップをやる。「先生の機材使わせてください。アイトラッカー使わせてください。EEG のデバイス使わせてください。先生の研究室使わせてください。」「私の研究室を使ったから、当然私を著者に入れるでしょうね」。それも不正です。ギフトオーサーシップですから、駄目です。仲間内でギフトオーサーシップを与え合う。例えば、ラボの中で常に一緒に研究して、「今回は私が第一著者。次はあなたが第一著者、次はあなたが第一著者」と回していくのも駄目です。正しくないですね、これも。仕事をしていない時は、ギフトオーサーシップになりますから。

松下先生のお話にもありましたように、教員が学生のプロジェクトに多大な労力を捧げたのに、大学院生が単著で出版したらゴーストオーサーシップですから駄目ですね。これは何とかしていきたいですが。

どうするか。APA（American Psychological Association）、皆さんもよく『APA マニュアル』を引用すると思いますが、APA は、オーサーシップを決めるためのガイドラインを提供しています。良かったですね、助かりました。どうするかと言いますと、私は心理言語学者なので実験系、APA なので心理学実験ですが、実験系の研究を複数の要素に分けます。研究の発案から始まって、研究デザインを作って、文献を探して、実験プログラムの作成。刺激を提示し、ミリ秒で計るプログラムを作り、実験を実際に実施して、データを集めて分析して、結果を解釈して、論文を書く。ざっくりこういうステージに分けられますが、それぞれの要素にどれぐらいの労力や時間を必要とするか、で理解します。

こんなガイドラインがあります。左側にいろいろな Category。実験の発案から、実験を作って、データを集めて分析して、最終的に Manuscript を書く。書くのにも、introduction、method section、などいろいろ分かれています。右側には Initials。指導教員、学生、共著者のイニシャルを書きます。真ん中の Total Points は、それぞれの項目に与えられるポイントで、このポイントを共著者全員で分け合うのですが、ちょっと見てみましょう。実際に記入するとこんな感じになります。実際の指導生のものではなく、「KM」は私ですが、「TM」は「太郎 名大」。仮に、「名大太郎」君を毎週指導したらこうなるのでは、ということをやってみました。

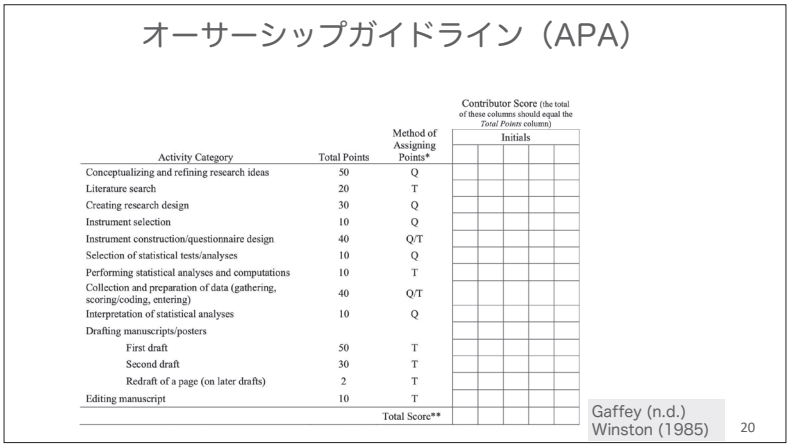


Activity Category	Total Points	Contributor Score Initials: TM	KM			
Conceptualizing a research idea	90	80	10			
Refining/ crystalizing a research idea	60	30	30			
Literature search: Summarizing literary pieces (e.g., articles, book chapters, etc.)	20	15	5			
Creating a research design (e.g., counterbalancing, randomization to conditions, survey design etc.)	80	40	40			
Selecting an Instrument/ a measure: Instrument construction	30	15	15			
Selection of statistical tests/analyses	40	10	30			
Performing statistical analyses and computations (including computer work)	40	30	10			
Interpretation of statistical analyses	80	50	30			
Manuscript						
Writing an introduction section	90	85	5			
Writing a methods section	80	75	5			
Writing results section	80	75	5			
Writing discussion section	100	90	10			
Writing conclusive summary	60	55	5			
Writing limitations of the study	60	55	5			
Writing future directions of the study	60	55	5			
Managing Submission Process						
Responding to reviewers' feedback	10	5	5			
Making changes based on reviewer feedback	60	50	10			
	Total Score	815	225			

NOTE: This table is adapted from that found at http://www.apa.org/ethics/education/students/authorship-determination.pdf

最初の「Conceptualizing a research idea」が90ポイントですが、太郎君が研究のアイデアを持ってくるなら、かなりの部分が太郎君の貢献なので80、私が10。ほぼ、太郎君の貢献です。最終的な Total Score は、太郎くんが815で、私が225。太郎君が78％、私が22％の貢献になる。こんな感じで、ガイドラインに沿って考

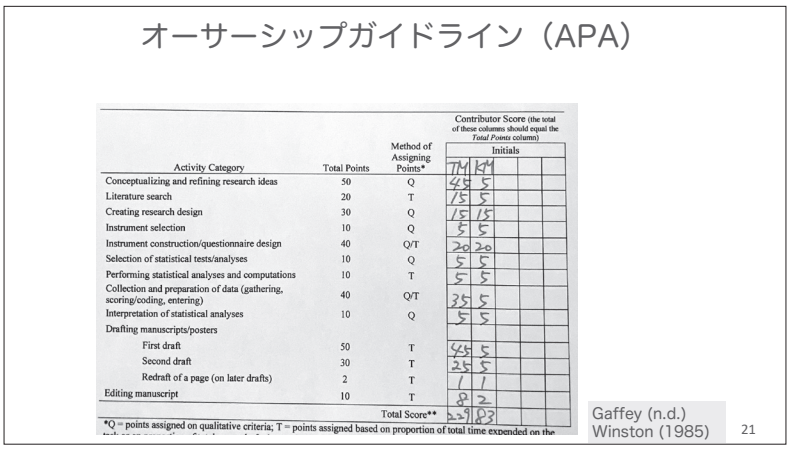
えることができます。項目が多くて、「こんな面倒くさいこと、やってられないよ」と言う方もいらっしゃると思いますが、APA の Web サイトには、他にもいろんな資料があります。もう少しシンプルなものもあり、これはシンプルだけど網羅されている項目は結構似ています。manuscripts は First draft, Second draft とざっくり分かれていますが、「どのセクションを書いたか」という分け方はされていないという違いがあります。でもやはり、Total Points と Initials を書く欄があります。ポイントの隣の Q や T は、それらが質的なものか量的なものか、例えばデータ分析は T 、つまりどれだけの時間を費やしたかという計り方ができます。だけど、研究のアイデアがいいか悪いかは質的で計りようがないので、Q。Qualityってことですね。



実際に記入してみます。これも「太郎名大」君で、hypothetical なケースです。50ポイントを二人で分けて45と 5 、など、右側の二つの数字を足したら左側の Total Points になるように記入していきます。すると Total Score が出てきます。この場合、太郎くんが73％、私が27％の貢献になります。こういうものが使えます。

最低何ポイントを獲得すれば著者リストに入れるのか、理解することがお勧めです。APA は、前ページの表で二人の場合、50ポイントを提案しています。研究全体の16％の貢献をすると著者になれますが、個々の研究者の、研究全体に占める貢献の割合で評価する方法は、注意が必要です。この考えでいくと、 6 人までしかカバーできないですね。なぜなら、6 人が16％貢献したらそれで精いっぱいで、7 人、8 人……となっていくと、研究全体の16％の貢献を下回ってしまいます。

ある項目は質的で、ある項目は量的であることも注意が必要です。この表は結構古いもので、もともと Winston の研究から来ているものらしいですが、昔と今では個々の項目の自由度が異なると思うんです。例えば、統計分析は昔よりも時間がかかりますし、よりテクニカルになっていて、データ採取により多くの時間を要します。だから、Total Points はちょっと考えなくてはいけないと思います。



こういう貢献を考えておくと、例えば『Frontiers in Psychology』だと「誰々がどのように貢献をしました」と書かれていますが、実際に出版する際に複数著者の貢献を明記しなくてはいけない場面で役立つと思います。

自分のオーサーシップの体験ですが、心理言語学研究では貢献度の順に名前を並べていきます。しかし、最後の責任著者に名前を連ねたい人もいます。それが Harald Baayen です。心理言語学分野では、どの程度の貢献が最低ラインかと言いますと、論文の根幹に関わる程度のデータ収集と、論文の執筆・修正に貢献し、内容に責任を持つことができたら、最低レベルの貢献だと見なされています。なので、査読が始まってから自分が第二著者になったこともあります。これが「Dijkstra, Miwa, Brummelhuis, Sappeli, & Baayen 研究」です。査読が始まってから著者に入ることに、驚かれた方もいるかもしれませんが、「もっと追加データ集めてください」と、かなり修正があって、査読後にこのチームに自分が入ったんです。結構、仕事しました。データを集めたり分析したり、論文を部分的に書いたり、結局、第二著者になりました。

現在査読中の論文では著者が55人いますが、私は36番目の著者です。55人いるとどう並べたらいいか、ですが、中盤の著者は基本的にアルファベット順です。だけど、最初や最後や一部の著者は、やはり貢献度が違いますから、そういう部分はしっかり並べてあります。最初から順番に。APA のガイドラインは、この規模の共同研究には素直に適応できないと思います。

【オーサーシップと研究指導】

少し時間をオーバーしちゃうかもしれません。松下先生のお話にもありましたが、研究指導や学位論文審査について、指導教員と学生の関係は対等ではなくて、教員が上で学生が下だ、という理解があると思いますが、論文の出版に関しては、大学院生が第一著者になる場合、指導教員と学生の関係は、学生が上で指導教員が下だと思います。私は、ですが。車で言うと、学生がハンドルを握っているんですね。これだけ考えると力関係がねじれているようですが、問題とは思わなくて、お互いが同格の存在としてロジカルに議論ができれば問題ないと、個人的には思います。

アルバータ大学時代ですが、大学院初日に学科長が、「大学院生は Junior Colleague だから、教員と同等として扱います」と、みんなの前で言いました。実際、そんな感じで扱われました。三輪ラボのやり方でも、指導生をそのように扱いたいと思っています。ラボの使用言語は基本的に英語で、指導教員＝私をファーストネームで呼びます。「同格」ということです。研究指導初日、大学院生が研究室に来た時に、SSCI にリストされているインパクトファクター（IF）付の国際誌に、共著で論文を出すことについて学生の同意を得ます。私は、学位論文はひとまずどうでもいいかな、という話をします。学位論文の完成ではなくて、国際誌での出版を目指してもらいます。「あなたが考えることは、国際誌で出版することです。つまり、国際誌に掲載できるレベルの論文なら、学位論文として成立するので、それだけ考えていればいい」という考えです。論文の出版しか考えないので、「学生が上、指導教員が下」、そういう感じの関係で行きたいと思います。

個別に毎週90分のミーティングで大学院生の作業を確認して、週に複数回、 1 日に 5 時間ほど作業することもあります。これだけ貢献したら十分に共著者が取れる、と個人的には思います。共同著者ですから、学生が指導教員に仕事を振ることもあります。時々学生が、「先生も共著者ですから、仕事をしてください」となるんですが、時間があれば喜んで引き受けます。学生の仕事に致命的な問題があると、指導教員＝私が判断したら、ロジカルに学生を説得します。学生が上で指導教員が下ですから、何か修正してほしい時は、ロジカルに学生を説得します。「私が指導教員だから直しなさい」は通用しないと思います。説得に応じなければ、自分がオーサーシップを放棄すればいいだけだと考えています。

アプローチとしてどちらを選んでも大きな問題がない二択がある場合は、学生さんの意向を優先させます。なぜなら、第一著者だからです。学生さんが指導教員＝私以外の研究者と共同研究することは自由で、特に

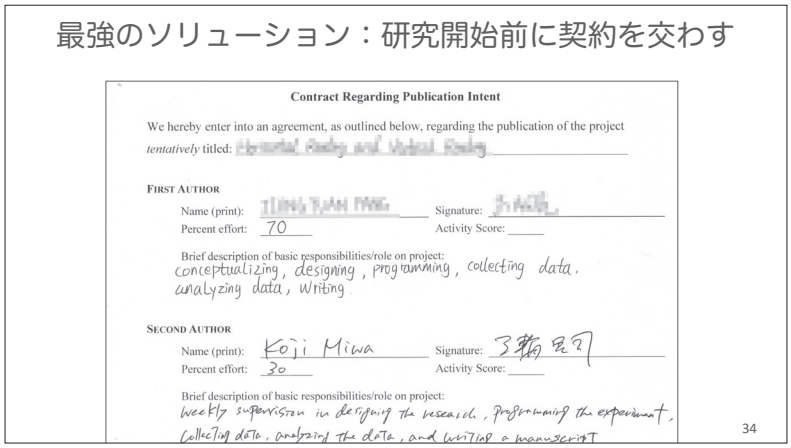
許可を得る必要もないと思っています。報告してくれますが……。実際に、アメリカの研究者と個人的につながりを持って共同研究を始めたりしていますが、いいと思います。

副指導教員ですが、アルバータ大学では副指導教員はいなくて、主指導教員 2 名（co-supervisors）の指導を受けていました。だから、副指導教員がどういうものか、今でも分からない。特に学生は、今でも分からない人は多い。タダでアドバイスを求めることができる、いつでも頼れる便利な存在と考えている人がいますが、それは違うと思います。私は、副指導教員の話が来た時に、オーサーシップに関する確認もします。「副指導教員になってくれますか」と言われた時に、「あ、いいですよ」で話を終える方もいらっしゃると思いますが、自分は絶対に、「それは、私が共同著者になる、ということですか？」という話をします。最近だと、「副指導教員になることは合意しますが、共著者になることには、私は今のところ合意しません。もし共著者になってほしい時は、ガイドラインをちゃんと理解して、また話を持ってきてください」というメールをしました。

【適切なオーサーシップと共同研究のための最強のソリューション】

私の裁判体験は、時間がないのでひとまず飛ばします。ルームメイトを訴えたけど負けたという話です。自転車を貸したルームメイトが自転車を紛失し、私がルームメイトを訴えて、裁判で負けました。負けた時に学んだことですが、この裁判は、自転車を貸す前に私が相手側にルールを与えていたら勝てたんですね。「この条件に基づいて使ってください。この条件を破ったら駄目ですよ」ということです。口約束や常識は、裁判の場では通用しませんでした。

アカデミアの共同研究も同様に、事前にルールを設定していくことで問題を防ぐことができると思います。APA は、Contract Regarding Publication Intent というのを提供しています。学生にこういうものを出して、研究開始前に契約を交わします。これは、実際の学生と私の契約書です。見せるんだったら、もっと丁寧な字で書いておけばよかった（笑）。FIRST AUTHOR が学生の名前。effort の分量を書いて、何をするかを書きます。SECOND AUTHOR に自分の名前を書いて、自分の役割を書きます。最後に日付書いて。これをやっておけば、後でもめることはありません。学生が不当に第一著者の権利を失うこともありません。最後の注意書きのところに何が書かれるかと言いますと、「論文の口述試験から 12 カ月以内に研究が出版に向けて提出されない場合は、指導教員が第一著者になって研究を完成させる」ことも書いてあって、それも同意してもらいます。

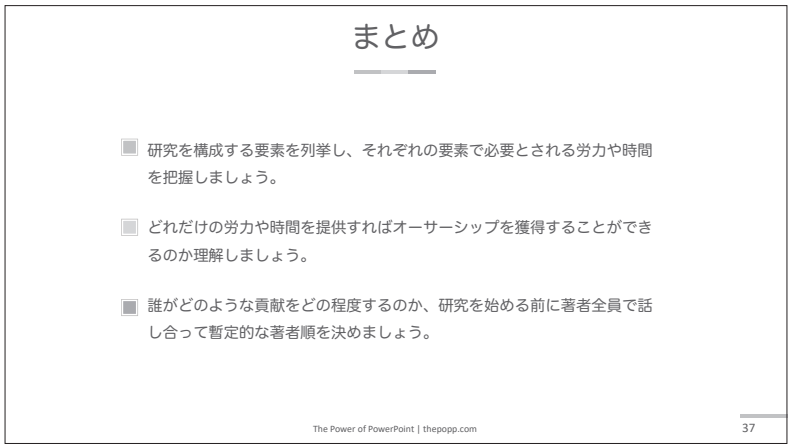


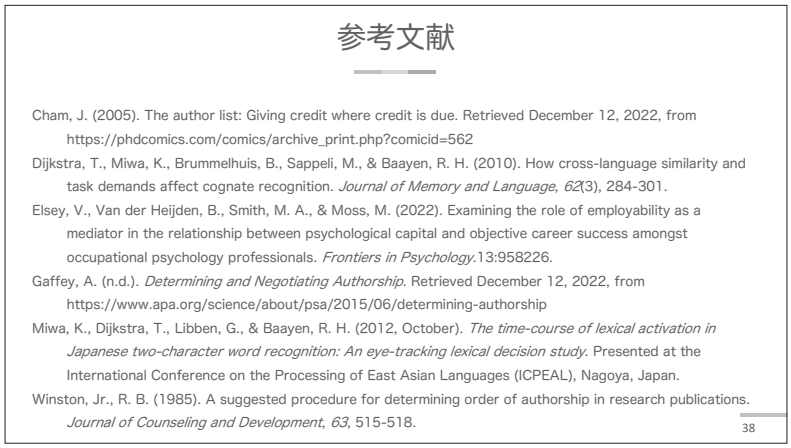
契約書があれば、指導教員が不当にオーサーシップを奪取したと非難されませんし、本質的な貢献をしない指導教員がギフトオーサーシップを得ることもありません。口約束や常識に関する問題も起こりません。これが最強のソリューションです。契約書を使用しなくても、形の残るもので、とにかくオーサーシップの

確認をするべきだと思います。

まとめがこれです。このページを出したまま、終わらせていただきます。次のページには参考文献があるので、皆さん、これを見て APA のガイドラインをダウンロードしてください。ありがとうございました。

宇都木　ありがとうございました。





＊　＊　＊

【質疑応答〜三輪先生】

それでは、最初に三輪先生に対する短めの質問があれば、受け付けたいと思います。いかがでしょうか。

どうぞ、佐野誠子先生。

佐野　佐野です。この契約書のようなものは、他の理科系の研究室でも文化的にあるんでしょうか。ご存じでしたら。

三輪　どうでしょう。自分は知らないですが。

佐野　それは、三輪先生ご自身のやり方ということですか。

三輪　APA が。

佐野　APA が勧めている。分かりました。

三輪　この契約書に関しては、特に心理学に限られた書き方をしていません。ただ、名前、役割、日付を書くだけです。どの分野でも、契約書に関しては適用できると思います。

佐野　ありがとうございます。

三輪　自分の指導生にこれを話したら「12カ月って難しくないですか」という話だったんですが、だったらその文言を変えればいいと思います。24カ月欲しかったら「24カ月」と書き直して、それにサインして

二人で同意すればいい。別にこれを押し付けているわけじゃなくて、指導教員と学生の間でお話しして、二人が納得した状態でサインすれば、後で問題がないと思います。12カ月経ったら自動的にこちらが第一著者の権利を取りにかかるか、というとそうでもない。これを含めたい理由は、卒業してから連絡が取れなくなるとか、忙しくなる学生とか、状況はみんな変わりますから。でも、研究が非常に良く、何としてでも出版に持っていきたい時に、こちらが力を発揮して出版に持っていき、結果として自分が第一著者になるぐらいの仕事をした時に、合法的に第一著者の権利をもらうためのものです。

今も、卒業してから 3 年以上経つ学生と共同研究をしていますが、その学生さんは時間があるので、引き続きその学生を第一著者にして、自分は第二著者のポジションで行こうかなと思っています。

長山　もしもし、長山智香子です。

宇都木　どうぞ。

長山　声だけですみません。大変興味深くお聞きしました。やはりカナダというか、北米の学術文化が反映されていると思います。前提条件として、個人のバウンダリーがしっかり引ける人が言葉で契約をして、ある意味、学生の側でも契約遂行されているのか見張っているような意識があって、問題があれば、「ここ、問題ですよね」と、アサーティブにコミュニケーションすることで成り立つような関係性なのかな、と思いました。それについてどう思われますか、ということと、そういうルール化がされていない、もう一つの文化的ルールがありますよね。日本社会で、日本人なり留学生でも、アサーティブな文化にいない人たちと一緒にやっていく時の、気を付けるべきこととか苦労されたことがあればお聞きしたい。もう一つはテクニカルな問題として。

（三輪：挙手）あ、聞こえませんでした？

三輪　ごめんなさい。質問が理解できたか分からないです。もう一度、アサーティブな文化？

長山　個人間のバウンダリーをしっかりと引くことができる、ある種の個人主義的な文化と、あとアサーティブネス。「先生との間に嫌なことがある」と学生がモヤモヤ思った時に、それを主張できる。そういう自己主張の能力と、指導教員側の聞く能力。それを丁寧に相手に伝える能力。そういうコミュニケーションの文化があることによって、契約とか、先生と学生の間の共著ができていくのかな、と思ったのですが。

三輪　まず、それについて話してもいいですかね。

長山　どうぞ。

三輪　その点に関して、日本はとても危ういと思っています。学生が先生をとにかく崇拝して。実際に、「これ、指導教員に話せばいいじゃないですか」と話をしたら、「いやあ、先生にはそんなこと言えません。先生にはお願いできません」という人がいまして、これは危ないな、と。第一著者の位置に就くことは、自分がハンドルを握っています。ハンドルを握っているのに、助手席にいる指導教員の意見を全て飲むのは危なくて。

自分の経験ですが、自分が第一著者で共同著者に教授 3 人が入っていた時に、 3 対 1 、自分と他の先生の意見が合っていて、Harald Baayen 先生の意見がちょっと違っていて。Baayen 先生が「Koji、やっぱりこのやり方で行こう」、僕は「いやあ、嫌ですね」と、折れなかった。それは別に間違っているのではなくて、ただのアプローチの違いで、Baayen 教授と私は、物事の理解の仕方が違っていた。最終的に自分は何をしたかというと、「私はこのやり方で行きたい」と。Dijkstra 先生も「このやり方で行きたい」。Baayen 教授だけ違うやり方でやる。だったら、「ここで二択です。僕のやり方でやるか、先生はオーサーシップを放棄して、研究から下りてください」と。そうしたら先生は、「分かった。じゃあ Koji のやり方でいい」と、それで円満に解決しましたが、納得できないなら、ただオーサーシップを放棄すればいいだけだと思います。こちらは、謝辞で「ありがとうございました」は述べますが……。Baayen 教授とそれができるから、喧嘩じゃなくてただのディスカッションですね。お互い大人だと思っているからそういう話ができるわけで、先生も、

僕に否定されたのはただのアプローチの違いですから、別に怒ったりせずに、今でも共同研究は続けています。

長山　よく分かりました。ありがとうございます。もう一つ質問があって、今度はすぐ答えられると思いますが、入ってくる院生全員にオーサーすると決めておくと、一定以上の人数は採用できないことになりませんか。数えたら、今私、 8 人指導生いるわ、って。オーサー 8 本はしたくない。どうしますか。

三輪　そうなんですよ、実際。指導生が10人の先生もいますが、自分はできないと思っていまして。理由は、時間がないこととお金がないことですね。お金の問題はオーサーシップとは別に関係がないですが、自分が共同著者になるので、指導生のお金の面倒も見ようと、全部自分が出しています。時間に関しても、先ほどの計算だと少なくとも20％ぐらい貢献するというと、 3 人いたら合わせて60％になって 4 人いたら80％で。それは、もう一つの研究を自分がやるような感じになっちゃいますから、自分の限界は 3 人かなと思っています。

カナダで Johanne Paradis という先生に指導をお願いした時、しっかり共同研究する先生で、「ああ、ごめん。今、指導生が 3 人いるからこれ以上は無理だ」と断られました。しっかり共同研究してかなり時間を割く場合は、 3 人だとかなり忙しくなる、と言う人もいれば、Harald Baayen はもっと指導生がいました。ちょっと覚えていませんが、10人ぐらいの学生と共同研究をしていた記憶があります。でも、かなり時間を割いていて、Harald Baayen と毎週 2 回ぐらいはミーティングをしていた覚えがあります。なぜできるかというと、おそらく仕事がとても速かったのだと思います。

長山　なるほど。分かりました。すみません。丁寧にお答えいただき、ありがとうございました。

【質疑応答〜全体】

宇都木　あと15分ぐらいですが、全体的に、松下先生のお話も含めて、ご質問・ご感想・ご意見、あるいは、松下先生から三輪先生、三輪先生から松下先生など、そういうのも構いませんが、いかがでしょうか。

周藤　一つ、よろしいですか。

宇都木　周藤芳幸先生。

周藤　西洋史の周藤です。今日、僕は二人の話を聞いて、とても意外で。ご案内を見て、共同研究をどうやって組みます、という話かと思ったら、お二人とも、特に三輪さんはオーサーシップにかなり特化した話をされて、「なるほどな」ととても新鮮に聞いていました。

一方で、主に三輪さんにお尋ねする感じになるかもしれませんが、これはある種、共同研究と言っても、ルールを共有している人の共同研究のような感じがします。つまり、ある一つの学問分野で、そこではお互いにルールがだいたい確立されていて、一緒に研究すれば共著の論文ができる。

それに対して、ここにいらっしゃる人文の方の中には、むしろ全然違う分野の人を前提として共同研究をどうやるのだろう、と考えている人も多いと思います。そうなると、そもそもルール、文化、慣習が全然違うわけですね。僕は、理学でいろいろな話を聞きますが、「あそこの研究室は、論文を出す時に教授の名前を必ず最後に付けなくては駄目だ」など、いまだにそういう研究室がありますね。

松下さんはむしろこちらに近いと思いますが、比較的離れた分野の人と共同研究をする時のポイントがあれば、次回は、そういうところについても教えていただいて。今日、オーサーシップについては非常に勉強になりましたが、共同研究を巡る FD の話題に、そのような点も入れていけたらいいなと思いますが、三輪さん、いかがですか。

三輪　そうですね。自分は、離れた分野の人と共同研究をしたことがない。一番離れているのは社会心理学ですが、やはり実験心理学の中だから。実験系は、仮説を立てて、実験して、データを取って、分析して、ディスカッションで、方針は同じですから、同じ考えを持つ者同士が共同研究をしたことになります。

ただ、今日の「最強のソリューション」は、やはり最強のソリューションですから。何が最強かと言いますと、違う分野の人と共同研究する時も、やはり事前に話し合いが必要だと思います。話し合う時に、その研究で想定されるステップ、論文の出版までに何が必要なのか、ひとまずその項目だけを全部列挙して、それぞれの項目でどれぐらいというポイントは付けなくてもいいので、誰がどの部分を担当するかだけを決めておけば、最低限の共同研究ができると思います。それをしないで、みんなが勝手に仕事を始めてしまうと、一人がやり過ぎたりやらなかったりで、やらなかった時に、「言われてないから」と言われたら困ってしまう。でも、契約書があれば、「あなたは、これをやると言いましたよね」とか、一人がやり過ぎた時も、「あなたはこれをやるべきではないのに、なぜ他の人の仕事を取るんですか」ということにもなりますから、すべきことをまず全部書き出してみんなの合意を得る、それは同じだと思います。

周藤　なるほど。ありがとうございました。

宇都木　今の話、周藤先生のご質問とも関連して、私などは、言語学は結構多様だなと感じるところがあります。三輪先生のような心理言語学の人は、心理学寄りのカルチャーの中にいるし、私などの音声学だと、医学や工学の方法の影響を受ける部分があります。

一方で別のタイプ、統語論だったり理論だったり、あるいは文献を扱う研究というのは、かなり個人研究のカルチャーの中にいます。だから、言語学の人の中でも、一緒にやると文化の違いを感じることがあります。共同研究を始めてから、「あれ？　何でこの人は、一人で論文を出しちゃったの？」、「あれ？　これ、どうして私の名前が入らないの？」のようになることがありますので、それは最初に話をしなくてはいけなかったと思います。言語学だから文化を共有しているかというと、必ずしもそうではないし、三輪先生の話につながるところで、要は最初に話をしておけばいいんですね。

三輪　そうですね。オーサーシップに関わる問題をいろいろな先生から聞きましたが、全て、最初に話をしておけば解決できた問題です。これは本当に最強のソリューションだと思います。

ただ、1点考えることがあるとすると、学生とはやりたいと思ったのです。将来的にも全ての学生に対して、少なくとも最初の研究だけは絶対に契約書を作ろうと思います。そうすることで、学生たちの教育にもなりますし。だけど実際、一流の研究者たちと仕事をする時に、「さあ、あなた、契約書を書いてください」と言うのは、少々気が進まない。自転車の貸し借りの話に戻りますが、あの場合に、「この条件の下で、あなたに貸します」とやることは、相手を部分的に信用してないから、難しいことがある。契約書を持ち出すのは、時々気が引ける時がありますが、少なくともメールで、とにかく口約束はせずに、いつでも証拠が残るように書面で、「こういうことをやって下さい」や「こういうことをやります」とお願いするようにしています。

宇都木　金相美先生から手が挙がっていますね。お願いします。

金　すみません。お二人がとても仲良くしているのは知っていましたが、こんなすてきな共同研究をなさっていたのですね。おめでとうございます。共同研究は非常に大変なので、分野が離れている人と一緒にやるのは、非常に勇気が必要だったと思いますし、お二人とも強烈な人格、性格の持ち主なので、それで成功したのかなと思います。絶対そうだと思います。

まず三輪先生と松下先生の共同研究について伺いたいです。私は、社会心理学からの調査票作りで、標本抽出から行いますが、三輪先生の実験心理学ですと、標本はどれぐらい集めていればいいのか。そして、標本作りのみに貢献した人も、共同研究者として名乗ることができるのか。というのも、社会心理学の場合、少なくとも200標、500～1,000標、2,000標ぐらい必要とする場合が多く、今はネット調査が流行していますが、紙調査でやる場合は、1標1,000円ぐらいかかるものもあります。500標ですと50万、1,000標だと100万はかかりますね。研究者たちが研究費を出し合って、ある時は区役所を回ってリストをもらうなどして、標本抽出に非常に苦労していた記憶があります。そうすると、その標本作りに貢献した人も共同研究者で載

せます。調査そのものに非常にお金がかかるわけです。 1 回の調査票が長くて10ページぐらい。自分と 4 人が共同した場合、 4 名の研究テーマが違うとしたら、研究テーマを検証できる質問票を入れます。論文を書く時は 4 名の名前を入れますが、自分が興味あるテーマについて書いた場合は、その名前をファーストオーサーとして入れて、共同研究、論文を出していた覚えがあります。

今もそのような形で行っていますが、実験心理学ではどのように行っているのか、そして、社会心理学というか、私の研究室のやり方だったのかもしれませんが、三輪先生や松下先生の感覚から見ますと、どんな感じに思われるのかを知りたいです。標本はどれぐらい採っていらっしゃるのか、実験心理学について知りたいな、と。

三輪　サンプルですよね。心理言語学の場合だと、参加者数も大事だし、一人の参加者がどれだけのアイテム（刺激単語や刺激アイテム）を見るかが大事です。仮に言語特性の効果を知りたい場合は、参加者数も大事ですけど、一人の参加者が、どれだけの数の分野、単語を見るかというほうが大事です。一人の参加者に大量にやってもらうということは、例えば自分だったら、600単語や1,400単語見せたり……。

金　一人の参加者のデータそのものがサンプルになる、と考えてもよろしいですか。

三輪　はい。おそらく金先生の研究では、個人の特性に興味がある。だから、参加者がたくさん欲しい。心理言語学分野でもそちらの方向に向かっているので、参加者数も多いほうが良いです。現状、そこまでたくさん採らなくても良いですが、最近参加した55人の大きなプロジェクトでは、自分が名古屋大学で百数十人の参加者からデータを集めたのですが、最低100人を集めてくださいということでした。そのようなルールで、みんなで行っていました。

金　ファーストオーサーの設定の仕方ですが、標本抽出として調査票作りに参加して、データを取った後に論文を書く時、私のテーマで論文を書いた場合は、ファーストオーサーとして私の名前を入れて、これは standard author になりますね。で、second, third, fourth は適当に決めていって、一緒に文章を書くことはしないで、全部書いた後に回して、一度見るのですが、「研究方法」には、抽出法など、どのように調査したのかを書く章がありますね。そこに、貢献していた研究者の名前が載るのですが、論文はほぼ、80〜90％、ファーストオーサーが書きます。その後、査読時にみんなで協力することはあるかもしれませんが、この場合はいかがでしょうか。

三輪　一人が全部書いてからみんなで回すというのは、よくあると思います。松下先生との共同研究では、松下先生がイントロや理論的な部分を書いて、自分が分析の部分、メソッドセクションや結果報告の部分を担当して、きっぱり分かれましたが、普通は一人が書くと思います。でも、ジャーナルに論文を出す前に、まずみんなで読む。読む時に結構コメントが出てくると思うので、修正し、みんなで作業すればいいのではないかと思います。

重要なのは、共同著者になるためには、仮にそれが承認だけだとしても、自分がした貢献なのではないか。しっかり全部読み込んで、内容を理解して、本当にその人が「いいな」と思ったら、承認だけでも立派な貢献だと思います。共著者になりたいからといって、やたらめったら論文を修正したり非難したりする必要はないと思います。

松下　私、TMI で、金先生が今おっしゃった、本当に似たような経験をしました。社会学の先生も入っていらっしゃって、数人分のテーマを一つの調査票に入れ込んで、もちろん、どのような調査票を作るかは、みんなでディスカッションしますが、それぞれテーマが違っています。複数のテーマに関する質問を入れるから、それぞれが割合無関係だったりします。データを得た後、それぞれ自分が関心がある分野を、変数だけを抜き出して、それで分析をして論文を書くということをやっていました。そのうちの一つを学会で緊急発表することになりまして、「発表に申し込んでおいたから」「あなたも一応オーサーに入れましたよ」と言われ、それには驚きました。事前に言ってほしかった、と思いました。

だけど、確かに一緒に調査票を作ったし、分析の過程も、複数回にわたって Zoom で会議を重ねて発表していただいて、中身を全部把握しているので、それは良いなと思いましたが……。私はそのやり方、分析の仕方や調査の質問項目やデータの取り方も、私はやらないな、と疑問に思った点があって、その研究に関して、最終的には著者になりたくないと思っていました。だから、論文になる時にはお断りしようと思っていますが。

宇都木　そろそろ、時間が過ぎているので。よろしいですかね。今の松下先生の言われた、勝手に申し込んじゃって、な話は、ありがちだと思います。。

予定していた時間を若干オーバーしたところですが、いろいろと実りある話になったのでは、と思います。松下先生、三輪先生、ありがとうございました。

じゃあ、今日はこれで。あとは、個別に何かあれば、松下先生や三輪先生に、ご連絡やお話しをされるといいのではないかと思います。ありがとうございました。

松下　ありがとうございます。

三輪　お疲れさまでした。

Ⅱ　人文学研究科の教育・研究活動

1．教員の著書

1-1　単著／単独編集／共著別一覧（2022年度）

単 著	書 籍 名	出 版 社	発行年月
李 澤熊	現代日本語における意図性副詞の意味研究 ――認知意味論の観点から	ひつじ書房	2023年 1 月
Hitoshi Ogurisu	Édition électronique du « Roland » d'Oxford	Independently published	2022年10月
星野幸代	翼賛体制下のモダンダンス――厚生舞踊と「皇軍」慰問	汲古書院	2022年 9 月
秋田喜美	オノマトペの認知科学	新曜社	2022年 8 月
大井田晴彦	王朝物語の世界	三弥井書店	2022年 8 月
小栗栖等	古フランス語入門――11世紀末から15世紀末まで	Independently published	2022年 6 月
Hideaki Fujiki	Making audiences: A social history of Japanese cinema and media	Oxford University Press	2022年 4 月

単編著	書 籍 名	出 版 社	発行年月
中村靖子編著 岩﨑陽一・鳥山定嗣 ・大平英樹他著	予測と創発――理知と感情の人文学	春風社	2022年11月
周藤芳幸編著 安川晴基・川本悠紀 子他著	古代地中海世界と文化的記憶	山川出版社	2022年 6 月

共 著	書 籍 名	出 版 社	発行年月
Shinji Ido & Behrooz Mahmoodi-Bakhtiari	Tajik Linguistics	De Gruyter	2023年 1 月
William Grabe & Junko Yamashita	Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice (2nd ed)	Cambridge University Press	2022年 9 月

1-2　教員の自著紹介

藤木秀朗 Hideaki FUJIKI
Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media.
Oxford University Press, 2022.

本書は、『年報2018』で紹介した単著書『映画観客とは何者か――メディアと社会主体の近現代史』（名古屋大学出版会、2019年）の改訂英語版であり、内容的には『年報2018』に書いたこととほぼ同じである。そこで以下では、英語版出版の経緯について出版契約、翻訳作業、校正作業、刊行の順に簡単に記しておきたい。英語での書籍出版を検討している方の参考になれば幸いである。

本書は私にとって2冊目の英語単著書になるが、1冊目の *Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan* (Harvard University Asia Center, 2013) に比べれば、1点を除いてかなりスムーズに進めることができた。通常、英語圏の学術出版社と契約しようとするときは、出版社へ電子メールで問い合わせ、興味があるとの返事が来たら企画書（通常10ページぐらい）とサンプル・チャプターまたは全原稿を送付し出版社によるレビューを受ける。これを通過したら2名程度の研究者によるブラインドの査読を受け、そこで拒否されなければ査読者のコメントを基に修正し、出版社と契約を結び、校正作業を経て刊行という運びとなる。前著では、初めてということもあり5つぐらいのアメリカの大学出版局にメールを書き、3つぐらいから原稿受け入れの返事をもらい1つの出版局にだけ全原稿を送ったが謝絶されてしまった。そんな折りハーバード・イェンチン研究所滞在時に当時の私の受け入れ教員であったハーバード大学のアンドルー・ゴードン教授に出版計画について話をする機会があり、最終的にゴードン先生の紹介で Harvard University Asia Center と契約を結ぶことになった。このとき Harvard University Press と交渉するかそれとも Asia Center と交渉するかの選択肢があったが、日本語関係の編集作業がしっかりしているという理由（加えて、前者だと絶版になるのが早いとも聞いた理由）で後者を選んだ。とはいえ、Asia Center からの出版は「アジア研究」の枠組での出版ということになり Film Studies の領域でのプロモーションが弱くなるので、後になって後悔したという記憶がある。

今回の著書に関しては、最初から Oxford UP（以下 OUP）と契約を結ぶことを狙っていた。というのも、100年にわたる日本の近現代史をカバーしている本書の性格上、英語圏の権威ある大学出版局の中では OUP が一番適していると判断したからである。そこで OUP のウェブサイトの著書出版に関するページをみたところ、巨大出版局にふさわしく分野ごとに窓口が分かれその数が20ぐらいあることがわかった。そのためどの分野の窓口にコンタクトを取るか迷ったが、当初は Film Studies 全般よりも日本に特化した歴史の方が本書の性格上採用されやすいのではないかと判断して歴史部門にメールを書いた。結果はあえなく惨敗で「現在多数の出版予定で埋まっている」との返事をもらっただけだった。そんな折り、本書の執筆と同時進行的に進めていた共編著書 *The Japanese Cinema Book* (British Film Institute, 2020) のパートナーの編者でウォリック大学教授のアラステア・フィリップスさんに OUP から出版したい旨を話したところ、Film Studies 部門の OUP の知り合いの編集者を紹介してもらうことになり、そこからはとんとん拍子でことが運んだ。同じ OUP かと疑いたくなるほど、歴史部門からのつれない謝絶メールとは大違いで、レターヘッド電子メール、その後に企画書、サンプル・チャプターを送ってからは高待遇で応対していただき、出版に向けて非常に前向きな姿勢でサポートしていただいた。2名による査読も出版の可否を決めるためのものというよりは、出版を前提にコメントを受けたという感が強かった。結局、こうした私の経験から言うと、書籍の内容、一連の交渉、綿密な企画書――これにはいくつかのテクニックが必要――はもちろん重要だが、それらに劣らず重要なのは英語圏でもコネ（およびおそらく実績）だという感慨をもっている。

この OUP との契約で一番苦労したのは、そうした契約内定までの OUP との交渉よりも、日本語版の出版

局との間でもめごとが起こってしまったということだった。詳細は省くがそのときのいざこざを通じて、日本語版の出版契約を結ぶときには、将来外国語版を円滑に出版できるように明確に記述してもらうことが非常に重要だということを改めて痛感した。

非母語話者として人文系の書籍や論文を英語で出版した人なら誰もが認識していると思うが、英語での執筆で非常に重要なのは、いかに優秀な英文編集者を採用できるかという点である。日本語でもそうだが英語でも編集には非常に高度な技術とセンスが必要である。大学院生のとき近所の英語ネイティブの方に編集してもらってそれを当時のアメリカ出身の指導教員に見せたら、“Nightmare!” と言われたことがある。それ以来さまざまな人に自分の英文を校閲・編集してもらってきたが、その能力にはピンからキリまであり、出版レベルの英文が編集ができる人の数はかなり限られているということを実感してきた。今回の書籍の場合、非常に幸運なことに、フィリップさんからウォリック大学の優秀な院生を紹介していただいた。フィリップスさん自身、映像学の分野でトップクラスの学術雑誌の論文編集に携わっているので、その目で高く評価されている院生であれば安心できた。人文学の高度な英文の良し悪しは非母語話者である自分が評価するには限界があるということは言うまでもない。本書は640ページにも及ぶ長さなので、チャプターごとに私の執筆とその編集者による英語編集のやりとりをするのに一年ぐらいの年月がかかったが、非常に適切かつ丁寧に仕事を進めていただいた。

日本語版を英語に翻訳する作業に際しては、憂鬱な気分の連続だった。というのも、日本語版を読み返していく中で相当数のミスが見つかったからである。もちろん日本語版も注意深く校正作業を行っていたのだが、それでも英語版作成時に「どうしてこんなことを間違えてしまったのだろう」と何度思ったことかはかりしれない。将来改訂日本語版が出せる機会があればありがたいのだが、それは叶いそうもない。とはいえ、英語版を改訂版として刊行できるということが唯一の救いにはなっている。

一方、校正作業は、OUP が巨大出版局であることを実感する過程でもあった。通常、英語で出版社を書誌情報の一部として記す際には London and New York: Oxford University Press のように記すが、Film Studies 部門は（およびおそらく他の部門も）表向きには NY にあるというようになっているものの、どうやらフロリダの方にこの部門も含め OUP アメリカ支局全体のオフィスがあるようだということがわかった。また校正作業は、おそらく下請け会社に外注しており、お世話していただいた担当者のお名前やメールの送信時間からその拠点はどうやらインドにあるらしかった（確実な情報ではない）。コピーエディターとのやりとりも、その担当者を介してしか行えなかったので、多少もどかしさを感じた。案の定、出版後に拙著に目を通したら脱字が見つかってしまった。

最後に刊行について一言。本書は、先述のように640ページという大部になったこともあり、165US ドルという高額価格で販売されており、現在の円安状況（1ドル＝150円）で換算すると2万5千円にもなってしまう。この値段は、電子版、ハードカバー版ともに同じである（ペーパーバック版はなし）。とはいえ、名古屋大学も含め世界の大学の多くが Oxford Academic を契約しているので、大学の図書館システムを通せば電子版を無料でダウンロードできる。またロンドンの大和基金の運営の下、ロンドン大学バークベック校と SOAS の企画でオンラインの Book Launch を開催していただいたが、そのイベントには100名以上の登録者、60名ぐらいの参加者があり、思いがけなく多数の方に関心をもっていただき、うれしさとともに驚きを感じた。実は、日本映画の研究は英語圏の方が日本国内より規模が大きく活発だというところがあり、海外の研究集会に参加すると日本映画を研究している院生や研究者が数多くいることに驚かされることがよくある。

ともかくも、本書の執筆にあたっては数え切れないほどの方々にお世話になった。本書の謝辞にも書いたが、この場を借りて改めてご協力・ご支援いただいたすべての方々にお礼申し上げたい。

李 澤熊『現代日本語における意図性副詞の意味研究――認知意味論の観点から』ひつじ書房

本書は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した博士論文がもとになっており、2022年度の科学研究費の助成を受けて出版されたものである。世に出るまでに実に20年の歳月を要したが、こういう形で出版できたことは素直に嬉しい。

タイトルにもあるように、本書は日本語の意味を分析したものである。ことばの意味というのは、統語論や音韻論などの研究分野のように視覚や聴覚では捉えられず、（極端な言い方をすれば）日本語母語話者の心の中でしか把握できない、得体の知れないものであると言える。そういう意味では、日本語の意味研究は日本語非母語話者である私にとって無謀な挑戦に見えるかもしれない。にもかかわらず、（細々とではあるが）研究を続けている理由は非母語話者なりに何らかの貢献ができるのではないかと思っているからである。

日本語は、日本人にとってみれば無意識のうちに身につけた母語であり、空気のような存在である。従って、日常の意識ではそもそも問題にならず、当たり前のことをわざわざ問題にすることも普通はしないと考えられる。それ故、日本語母語話者であっても様々な注目すべき言語現象（日本語の重要な特徴）に気づかないこともよくある。実は、母語話者よりむしろ非母語話者のほうがそのような言語現象によく気づいたりする場合もある。というのは、非母語話者の場合、母語話者に比べて日本語を客観的な立場・視点で観察しやすい側面があるからである。具体例を一つ見てみよう。

(1)　先日、恋人の花子と（○といっしょに）映画を観ました。
(2)　先日、恋人の花子と（？といっしょに）結婚しました。

例えば、外国人（非母語話者）に「人と」と「人といっしょに」の違いについて質問されると答えられず困ってしまう、つまり、この2語の使い方が正しいかどうかという判断はできるが、なぜそうなのかという理由の説明がすぐにはできない人が、（専門家は別として）意外と多いのではないだろうか。外国人の場合は、日本語学習の段階で意識的に習得するため、母語話者よりよく知っていたりすることもある。一般的に「人と」は「必ず相手が必要な行為をする」ことを表す場合に用いられるのに対して、「人といっしょに」は「1人でできる行為をたまたま2人以上でする」ことを表す場合に用いられる。このような違いに気づくためには、日本語という母語を自分自身から突き放して捉えてみる、つまり、客観的な立場から日本語を観察するということが非常に有効であると考えられる。そうすることによって、普段気づきにくい日本語の様々な現象に気づくようになる。これから日本語の専門家を目指す人には、こういったことを念頭において日頃の日本語に接してほしいものである。

さて、本書は現代日本語の意図性に関わる副詞的成分の意味用法について、言語は認知主体である人間の認知能力を反映したものであると考える認知言語学（認知意味論）の観点から、分析・記述したものである。以下、本書の概要を簡略に述べる。

第1章では、研究の目的と対象、本書の立場について述べた。

第2章では、本書の基盤となる理論的背景について概観した。具体的には、まず、意味分析の基本的な考え方と方法について、注目すべき記述がなされている先行研究を取り上げ、本書の立場を確認した。また、類義語と多義語の基本的な性質および定義付けと、本書の議論の土台となる基本的概念・理論について、先行研究を踏まえて概観した。

第3章では、副詞に関する先行研究を整理・検討し、副詞の定義・分類を行った。考察にあたっては、プロトタイプ（prototype）に基づくカテゴリー化（categorization）という理論に基づき、副詞というカテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺的なものもあり、成員間で段階性が見られるということを明らかにした。

第 4 章では、本書で考察する語の副詞における位置付けを検討した結果、従来例外扱いされていた意図性に関わる副詞的成分を「情態副詞」と「陳述副詞」の中に位置付けられることを明らかにした。

第 5 章では、本書で考察する語のより詳細な分析・記述を行う前提として、階層構造（下位分類）を提示した。階層構造の検討を通して、本書の考察対象である意図性に関わる副詞的成分は、家族的類似性（family resemblance）の観点から見た場合、家族的類似性の構造のうち、鎖状のカテゴリーに該当することを明らかにした。

第 6 章では、第 5 章で階層構造を提示した際に、各グループの境界に位置付けられていると考えられる 5 語（思わず、つい、ふと（ふっと）、何気なく、さり気なく）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることによって、各グループが連続的につながっていることを検証した。第 7 章から第10章にかけては、第 5 章で提示した下位分類に基づき、各語の意味について詳細に記述・分析した。

第 7 章では、AI グループに属する 5 語（つい、うっかり（と）、うかうか（と）、うかつに、うかつにも）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。なお、「うっかり」と「うかつに」の分析については、認知意味論の観点からの考察が有効であると考え、 2 語の意味の類似点・相違点を明らかにする前提として、ベース（base）とプロファイル（profile）の概念を援用した。

第 8 章では、AII グループと AII′グループに属する 6 語（思わず、無意識に、我知らず（に）、知らず知らず（に）、いつの間にか、いつしか）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察した。

第 9 章では、AIII グループに属する 5 語（何となく、何だか、何気なく、それとなく（Ⅱ）、どことなく）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。なお、「何となく」「それとなく（Ⅱ）」「どことなく」の分析については、認知意味論の観点からの考察が有効であると考え、 3 語の意味の類似点・相違点を明らかにする前提として、フレーム（frame）の概念を援用した。

第10章では、BI グループと BII グループに属する 6 語（さり気なく、それとなく（Ⅰ）、敢えて、強いて、無理に、無理矢理（に））を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。

第11章では、第 5 章から第10章までの考察結果を踏まえて、考察対象とする語の副詞における位置付けの検討を行った。具体的には、プロトタイプに基づくカテゴリー化という考え方に基づき、考察対象とする語が「情態副詞」と「陳述副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってその一方の性質をより強く持つという連続的な性質について検証した。

第12章では、本書のまとめを行い、本書の意義と今後の課題について述べた。

中村靖子編著『予測と創発――理知と感情の人文学』春風社

2017年、情報学研究科の大平英樹先生を代表とするプロジェクトが、課題設定による先導的人文学・社会科学の研究推進事業の領域開拓プログラムに採択され、私はその中の人文学班のリーダーを務めることになりました。人文学以外には、認知神経科学、複雑系科学、認知科学、データサイエンスの研究者が入り、人文学の中では、ドイツ文学、イギリス史、フランス思想史、美学美術史の研究者による総勢8名の、超学際的プロジェクトです。なんといっても、分野を同じくする人同士が全くいないのです。最初の顔合わせでは、お互い、知らない用語ばかりで困りはしたものの、こんな研究があるんだ！という驚きの連続で、とても楽しかったのを覚えています。その楽しさが、プロジェクトが継続できた秘訣だったように思います。

このプロジェクトは、当初の研究期間の後、継続が認められ、新たに、記号創発ロボティクスを専門とする方をメンバーに加えて、合計5年半続きました。同事業には2021年度から新たに学術知共創プログラムが設けられましたので、我々のプロジェクトの最終年度にあたる2022年、後継プロジェクトとして応募しました。後継プロジェクトとはいえ、今回は私が代表となり、これまでの研究成果を足がかりとしつつ、さらにいろんな分野の方にメンバーに加わっていただいて研究体制を組みました。そして今回も、同じ専門分野の人はいません。そうしたメンバーで5つの研究班を構成し、申請までに何度も各班でミーティングを重ねました。何度も申請書を推敲し、申請を完了するまでのこの期間は、一種の合意形成プロセスのように共通基盤を形成する期間となりました。ヒヤリングに臨むときには、メンバーのみなさんをほとんど盟友のように感じ、とても心強く感じていました。『予測と創発』は、こうしたプロセスのなかで生まれました。大平先生代表のプロジェクト名は、「予測的符号化の原理による心性の創発と共有――認知科学・人文学・情報学の統合的研究」であり、新しいプロジェクト名は、「人間・社会・自然の来歴と未来――「人新世」における人間性の根本を問う」というものです。英文名称はAnthropocenic Actors and Agency in Humanity, Society, and Nature、略してAAAプロジェクトです。人文学が諸科学を先導する、と謳っているとおり、未来設計には、自然科学系の方たちの関与あってこそです。論集の副題に、「理知と感情の人文学」とあるのもそのためです。

この欄では、論集発行に際した苦労話などをご紹介するのが趣旨とのことです。けれども、たしかに発行に至るまでにはいっぱい苦労したと思うのですが、時間が経つと苦労は忘れて、愉しかったことばかり思い出されます。その上で強いて言うならば一番困ったこと、一番焦ったことは、自分自身の原稿がなかなか書けなかったことです。それは、編集作業が大変だったから、というよりはむしろ、自分のなかでまだ十分に熟していないことを、むりやり形にしようとしているからだということが、自分でも分かっていました。他の執筆者の方たちの原稿がどんどん揃っていくなかで、自分の原稿の仕上がりについてはまったく展望が見えない、という状況が続いていたあいだは本当に苦しかったです。そのあいだ、もう論集を編むのはこれきりにしよう！と自分に言い聞かせていました。しかし、それにしても預かった原稿はちゃんと形にしなくてはなりません。せんじつめるに――こんな大げさな言い方をするまでもなく――、執筆者の方々も、みながみなお忙しい中、こうして原稿を寄せて下さるというそのことが、私自身が原稿に向き合うよう、押し続けてくれたのでした。

この本は、ご覧になっていただくと分かるように、文献の挙げ方などは統一していません。分野が多岐にわたるため、それぞれの分野の作法に則るのがよいと思いました。それもまた、専門知の多彩性の現れとしてご寛恕いただければ幸いです。もう一言、述べさせていただくと、規格化や画一化は便利であることを承知しつつも、そうした動きに対し、根強い不信感をもつのは、ドイツ文学を学んできたがゆえでしょう。画一化しきれないところに知のインパクトを感じていただければ、と祈るばかりです。こうした知を湛えた論考を編むことは、知を繋ぐことであり、まさに知の愉しみといえます。

大井田晴彦『王朝物語の世界――『竹取』『伊勢』『うつほ』そして『源氏』へ』三弥井書店

本書は、私の二冊目の論文集である。博士論文を基礎とした第一論文集『うつほ物語の世界』（2002年、風間書房）から、二十年も経ってしまったが、その間、無為に過ごしてきたわけでは必ずしもなく、『竹取物語』（2012年、笠間書院）および『伊勢物語』（2019年、三弥井書店）の註釈作業を進めていた。やはり古典文学の研究は、地味だが地道な註釈に始まり註釈に終わるのだと思う。そして絶えず更新を迫られるものでもある。これまで註釈作業をしては面白いと思ったこと、気づいたことを漫然と論文に発表してきた。それなりの分量にもなってきたので、一区切りつけようと思うに到った。

平安時代は物語文学の誕生した時代であり、かつ最盛期である。数多くの物語が書かれ読まれ、そして忘れ去られていった。その多くは名前のみ伝わり現存しない。仮名で書かれた物語は、娯楽読み物、消閑の具に過ぎず、文芸とは見なされなかった。現在で言うところのサブカルチャーに該当しよう。それだけに現存するわずか数篇の物語は、歴史のふるいにかけられた、選りすぐりの傑作群ということができる。普遍的な価値を持った、いつまでも古びることのない魅力を放ち続ける、真の古典である。本書は、「『竹取』『伊勢』『うつほ』そして『源氏』へ」という副題が端的に示すように、これら四作品を中心に論じている。第一論文集では『うつほ』のみを論じるのに精一杯であったが、本書はより対象を拡げている。物語文学の成立と展開というテーマには、研究の始発期から興味を抱いていたが、前著より物語史論的な性格は強まっているように思う。

本書は全四篇、序章を含め二十六章から構成される。第一篇「竹取物語の世界」では「物語の出で来はじめのおや」、『竹取』に関する四章を収める。最初期の作品にして既に完成された驚くべき物語であるが、その達成について、戯作性にも注目しながら表現に即して論じている。第二篇「伊勢物語の世界」は、十章からなる。二条后との恋、東下り、惟喬親王との交流など、さまざまな話題ごとに、『伊勢』の主題性を「みやび」と和歌の観点から論じている。第三篇「うつほ物語の世界 続」は、前著以降の『うつほ』に関する七篇の論文を収めた。最初の長篇がいかにして成立したのか、という問題意識のもと、作中人物の造型を手がかりに、物語の論理と構造を解明する手法は前著と変わらない。第四篇「物語の種々相」の四章では、姉妹の話型、老女の懸想、蛍火の美、病と死など、王朝文学全般に関わるテーマを論じた。本書は、一貫して、作中人物を軸に物語世界に踏み込み、解明するという傾向が強い。果たして物語の分析に有効な方法であるのかわからないが、昔からこうした流儀でやってきた。

物語研究に限らず、日本文学研究全般について、近年の研究の専門化・細分化は著しい。珍しい作品や作家が注目される一方、論じ尽くされた感のある古典的名作は、遠ざけられがちである。価値観が失われつつあるのかも知れない。そうした時流に抗うわけではないが、若い頃から親しんできた物語について、面白いと思ったことを書き綴ってきたに過ぎない。

知力・体力・気力が今後どれほど続くかはわからないが、まだ研究したい作品とテーマはある。本書を一つの区切りに、次のステップへと進みたいと考えている。

２．各種報告

2-1　大学院教育の国際化に向けて

国際化推進室（安井永子）

国際化推進室では、私費外国人研究生、国費留学生の受け入れにかかわる業務（面接等）、在学留学生の支援（相談、チューター配置、オリエンテーション、日本語添削室等）、協定校への交換留学生の派遣にかかわる業務、協定の締結、協定校との交流事業（研究集会の実施）などを担当している。それら日常の業務に加え、日本での就職を目指す留学生が近年増加傾向にあることから、ここ数年は全学の留学生支援事業経費の援助を受けた、留学生のキャリア支援事業を展開している。以下、2022年度のキャリア支援事業について報告する。

具体的な実施方法は以下の通り、セミナーと個別相談会の二本立てであった。セミナーやワークショップの開催は、以下の通り計6回であった。

2022/09/06　人文系留学生のための就活セミナー（オンライン）
2022/12/07　履歴書とエントリーシート書き方講座（オンライン）
2023/01/11　就職面接グループディスカッション訓練講座（対面）
2023/01/18　就職面接対策講座（対面）
2023/02/01　就職模擬面接訓練1（対面）
2023/02/08　就職模擬面接訓練2（対面）

第一回目の就活セミナーは、学外のプロのキャリアカウンセラーに依頼して実施した。留学生と日本人学生の就活の違いや、留学生が特に力を入れるべき点などについての説明がなされたほか、日本の企業から内定を得た博士前期課程2年生2名による体験談の発表もあった。次に、人文学の知識や研究能力についてどのように就活の場でアピールすべきかがわからない多くの人文学系の学生を対象に、留学生のキャリア支援を専門とする学外講師によるエントリーシート書き方講座を開催した。加えて、同講師には、ディスカッションで意見を述べることを苦手とする人文学の学生向けに、就職面接ディスカッション訓練講座や面接講座も実施していただいたほか、模擬面接を通して丁寧な個別指導も提供いただいた。

以上のような就活の各種セミナー・ワークショップに加え、プロのキャリアカウンセラーによる個別キャリア相談を9月から3月まで毎月1回、計7回開催した。1回あたりの参加者は5名（1名あたり1時間）であり、対面、オンラインの両方での対応とした。利用者の多くは博士前期課程の学生であった。相談内容は、適合する職種の探し方、就活の進め方、情報収集の方法、エントリーシートの添削や面接の練習まで、多岐に渡った。利用希望者が多く、月1回5枠の予約がすぐに埋まる状態であったことは、やはり日本での就職のニーズの高まりを示しているといえよう。

多様なバックグラウンドを持つ留学生のニーズは様々であり、年々、変化する。国際化推進室では今後も、受け入れ前から卒業・修了後までという長いスパンで、留学生が抱える多様かつ刻々と変化する問題に敏感に対応しながら、必要なサポートを提供していきたいと考えている。

第 8 回日韓学術交流会（宇都木 昭）

日韓学術交流会は今回で第 8 回を迎えた。もともとは人文系部局再編以前の国際言語文化研究科が韓国の大学との学術交流を目的として行っていたものであるが、部局再編後は人文学研究科に引き継がれ、日本側と韓国側が交互に開催するかたちで、これまでほぼ毎年開催されてきた。コロナ禍の真っただ中、2021年度にはオンラインで開催されたのだが、その際に多くの関係者は、「次回はぜひ対面で開催を」と願っていたと思う。しかし年度がかわって2022年度になっても、残念ながらコロナ禍の状況はさほど大きく改善してはいなかった。海外渡航の規制は徐々に緩和されつつあったのだが、それでも先行きが不透明な状況が依然として続いていた。そのようなわけで、開催予定の数か月前の段階で、2022年度もオンラインで開催するという方針を定めたのだった。

2022年度の日韓学術交流会は、2023年 2 月 3 日に、名古屋大学人文学研究科、中央大学校日本研究所、中央大学校大学院日語日文学科、韓国外国語大学校日本語大学日本言語文化学部の主催により、オンライン（Zoom）で開催された。

当日のプログラムは以下の通りである。

〈午前〉
9：00　　開場
9：30–9：40　　開会の辞
9：40–10：40　　基調講演Ⅰ　文明載（韓国外国語大学校）
「日本語文学と文化の融合研究――慣用表現からの試み」
10：40–10：50　休憩
10：50–11：50　基調講演Ⅱ　日比嘉高（名古屋大学）
「パンデミックを読む――近現代日本の疫病と文学」
〈午後〉
13：00–17：55　一般発表（ 2 会場）
終了後、オンライン懇親会

当日は星野幸代副研究科長による開会の辞から始まり、午前中に 2 件の基調講演が行われた。そして昼休みをはさみ、午後には言語研究を中心としたA会場と文学・文化・歴史研究を中心としたB会場に分かれ、大学院生・若手研究者を中心として計19名（名古屋大学関係者10名、中央大学校関係者 3 名、韓国外国語大学校関係者 6 名）による一般発表が行われた。コロナ禍になってずいぶん時間が経ち、参加者がみなオンライン発表になれていたこともあるだろうが、特にオンラインに伴うトラブルも見受けられなかった。基調講演でも一般発表でも活発な質疑応答がなされ、学問的にとても充実した会となった。

すべての発表が終わった後は、日韓学術交流会としては初めての試みとして、オンライン懇親会が行われた。oVice というメタバース的なオンライン会議システムを用いたこの懇親会では、各参加者のアバターが仮想の懇親会場を動き回り、そこで集まった人同士でカメラ・マイクを使って会話をするというかたちをとった。ほとんどの参加者が oVice 未経験という状態でスタートしたが、各自が利用方法に慣れるのにさほど時間はかからなかった。始まってまもなく、会場の数か所に人の輪が形成され、この新しい試みを楽しむ様子がみられた。

このようにして、当日はメインの学術プログラムもその後の懇親会も、概ね円滑に行われた。あえて残念だった点を一つだけ述べるならば、懇親会場に食べ物も飲み物も用意されていなかったことである。いや、

正確に言えば、懇親会場（という名のオンラインスペース）に、寿司やビール瓶の絵は描かれていた。その点では、主催者にぬかりはなかった。問題は、それらの寿司を実際に手に取って食べたり、ビール瓶をとってグラスに注いだりすることができなかったことである。この問題に対する解決策はおそらく、対面で会を開催するほかにないであろう。

謝辞
本学術会議は名古屋大学人文学研究科の研究科プロジェクト経費の支援を受けました。基調講演を賜りました文明載先生、日比嘉高先生、そして開会の辞を頂いた星野幸代先生に深く感謝いたします。また、各セッションの司会を務めてくださった先生方、事前の準備にご協力いただいた中央大学校、韓国外国語大学校、および本研究科の先生方、事前の準備から当日の運営までを手伝ってくださった日韓双方の大学院生の皆さん、そして全ての発表者・参加者の皆様へ心からの感謝を申し上げます。

Ⅲ　各種データ

1．教育の現況

1-1　教育プログラムの構成

資料1-1-1　人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門（2022年度）

学位プログラム	分野・専門／コース／プログラム
言語文化学繋	言語学・日本語学・日本語教育学・応用日本語
英語文化学繋	英語学・英米文学・英語教育学
文献思想学繋	日本文学・中国語中国文学・ドイツ語ドイツ文学・ドイツ語圏ドイツ文化学・フランス語フランス文学・西洋古典学・哲学・中国哲学・インド哲学
超域人文学繋	映像学・日本文化学・文化動態学・ジェンダー学・メディア文化社会論
歴史文化学繋	日本史学・東洋史学・西洋史学・美学美術史学・考古学・文化人類学
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人コース
多文化共生系	国際・地域共生促進コース
G30国際プログラム	言語学・文化研究プログラム
	「アジアの中の日本文化」プログラム

資料1-1-2　文学部のコースと分野・専門（2022年度）

学位プログラム	分野・専門／プログラム
言語文化学繋	言語学、日本語学
英語文化学繋	英語学、英米文学
文献思想学繋	ドイツ語ドイツ文学、ドイツ語圏文化学、フランス語フランス文学、日本文学、中国語中国文学、哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化学繋	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学繋	社会学、心理学、地理学
G30国際	「アジアの中の日本文化」プログラム

1-2　国際化

資料1-2-1　大学院生の海外研修（オンライン含む延べ人数）（2022年度）

学年（人数）	研修先の国名（機関名）	研修期間
D3（3）	アメリカ（**オレゴン大学**） イギリス（**ウォリック大学**） カナダ（**なし**）	10ヶ月 10ヶ月（2021年度～） 1週間
D2（9）	イギリス（**ウォリック大学・なし**） 韓国（**国際韓人文学会・釜山国際映画祭・なし5名**） 香港（**香港中文大学**） 中国（**なし2名**）	9ヶ月半（2021年度～）・8日 11日・半月・5日／10日／11日／12日2名 4ヶ月半 1ヶ月／1ヶ月半
D1（1）	イタリア（**AAR**）	10日
M2（5）	エストニア（**タルトゥ大学**） イギリス（**エジンバラ大学2名・SOAS**） 中国（**社会科学院考古研究所洛陽工作站など**）	1年（2021年度～） 6日／9日・5ヶ月 1ヶ月半
M1（2）	オーストリア（**なし**） 韓国（**ソウル国立大学校**）	10日 4日

注：オンラインではないものは太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

資料1–2–2　学部生の海外研修（オンライン含む）（2022年度）

学年（人数）	研修先の国名（機関名）	研修期間
学部４年（3）	アメリカ（**セントオラフ大学**） カナダ（**オタワ大学**） ドイツ（**フライブルク大学**）	９ヶ月（2021年度～） ８ヶ月 11ヶ月（2021年度～）
学部３年（6）	カナダ（**ブリティッシュコロンビア大学**） フランス（**リヨン第三大学・ストラスブール大学**） オランダ（**トゥエンテ大学**） ノルウェー（**オスロ大学**） オーストラリア（**西オーストラリア大学**）	８ヶ月（2021年度～） 10ヶ月半・半月 半月 10ヶ月半 ５ヶ月
学部２年（15）	アメリカ（**オレゴン大学２名**） フィンランド（**ヘルシンキ大学**） オランダ（**トゥエンテ大学２名**） タイ（**チュラロンコン大学２名**・日系企業） オーストラリア（**西オーストラリア大学２名**） 台湾（**国立台湾大学**） フランス（**ストラスブール大学４名**）	１ヶ月 10ヶ月（2021年度～） 半月 半月２名・２週間 １ヶ月 ３週間 半月
学部１年（8）	アメリカ（**ノースカロライナ州立大学**） オーストラリア（**西オーストラリア大学２名**） タイ（**チュラロンコン大学２名**） オランダ（**トゥエンテ大学**） アメリカ（**オレゴン大学**） フランス（**ストラスブール大学３名**）	１ヶ月 １ヶ月 半月 半月 １ヶ月 半月

注：オンラインではないもの（一部オンライン含む）は太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

資料1–2–3　留学生経費配分額（前期）及び追加配分額（後期）（2022年度）

区　分	学期	配分額（千円）	備　考
学生積算経費	前期	6,799	私費留学生分：×85％
	後期	228	国費以外留学生分：×75％
チューター謝金	前期	5,028	111名
	後期	1,482	51名
論文指導・ネイティブチェック支援	前期	607	72名中、30.35名分
調整額	後期	–10	中国学位認証システム

出典：文系教務課

資料1–2–4　大学院留学生の受入実績（2022年度）

研修先の国名（機関名）	研修期間	人数
東呉大学	６ヶ月	2
上海外国語大学	６ヶ月	1
ウォリック大学	１年（2021年10月～）	1

注：オンラインではないものは太字で示されている。
　　協定校は下線で示されている。
出典：文系教務課

1–3　FD

資料1–3–1　ファカルティ・ディベロップメント（FD）開催実績一覧（2022年度）

主催もしくは講師所属先	実施内容	参加者数	日時	講演者
ハラスメント相談センター	アカデミック・ハラスメント―特に大学院生に対する指導を考える	93	5/18	内川菜月相談員
学生支援本部	コロナ禍の名大生における心の健康―部局連携のお願い	90	6/22	松本寿弥学術主任専門職
附属図書館オープンサイエンスプロジェクトチーム学術データ基盤整備 WG	名古屋大学の学術データ管理・公開支援のご紹介	99	7/20	鬼塚昌枝図書職員
IR 戦略室	「成果を中心とする実績状況に基づく配分」において人文学研究科の算出方法について	94	9/14	堀池令奈主任 吉田千穂主任リサーチ・アドミニストレーター
学術研究・産学官連携推進本部研究支援・人材育成部門人材育成ユニット	名古屋大学における若手研究者育成施策の現状と課題	94	10/19	熊坂真由子主任リサーチ・アドミニストレーター
グローバル・エンゲージメント・センター	海外留学保険について―学研災付帯海外留学保険	91	11/16	星野晶成准教授
東海国立大学機構法人統括管理責任者	研究費等の適正な使用について	92	3/3	中東正文機構長補佐

出典：文系総務課

1–4　大学院生・若手研究者等の支援

資料1–4–1　大学院生支援事業実施状況（2022年度）

事業名	前期課程（件数）		後期課程（件数）			計	助成決定額（千円）
	国内	国外	国内	国外	オンライン		
研究発表支援事業			0	1	0	1	180
フィールド調査プロジェクト	6	1	0	3		10	1,260
計	6	1	0	4	0	11	1,440

出典：教育研究推進室

資料1–4–2　各種研究員等受入状況

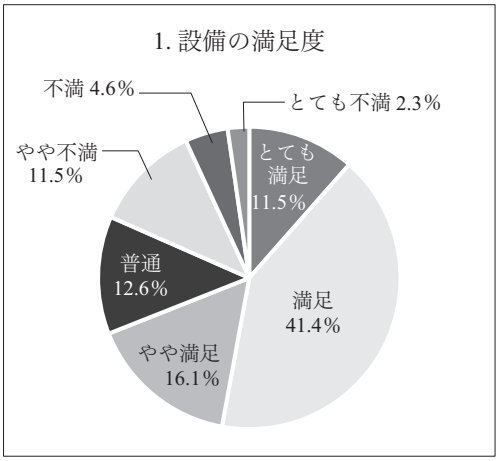
	博士研究員	博士候補研究員	CHT 共同研究員	TCS（JACRC 含む）共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2018年度	16	20	8	0	5	18
2019年度	16	23	10	1	5	17
2020年度	17	21	8	0	0	6
2021年度	15	25	8	2	3	7
2022年度	17	29	6	1	4	10

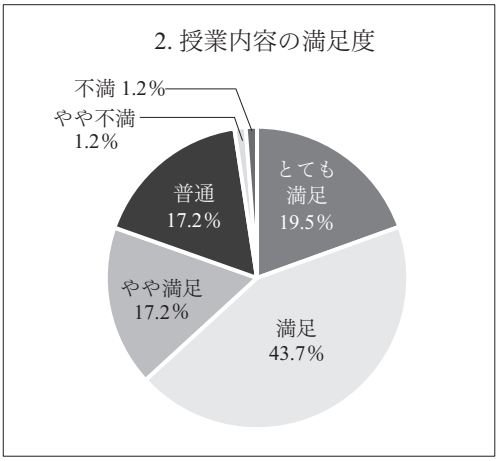
注：CHT＝人類文化遺産テクスト学研究センター
　　TCS＝超域文化社会センター（2018年度～）
　　JACRC＝「アジアの中の日本文化」研究センター（～2017年度）
出典：文系総務課

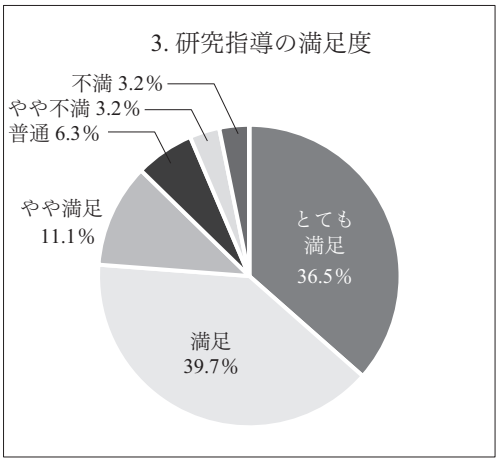
1–5　教育の成果

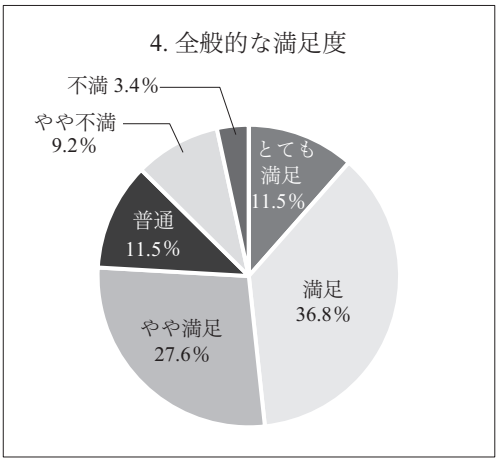
資料1–5–1　教育環境の満足度調査（2022年度）

・教育環境の満足度調査の項目
1．教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。
2．シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。
3．所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。
4．全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。









出典：文系教務課

資料1-5-2　大学院生等の研究業績件数

	論文発表		学会発表		受　賞	研究助成
	査読有	査読無	国際	国内		
2018年度	46		144		1	
2019年度	74	27	43	83	1*	4**
2020年度	76	22	39	72	4***	1****
2021年度	6	6	3	16	5*****	7******
2022年度	22	3	5	28	2*******	11********

*D2　日本語／日本語教育研究会第11回研究大会ポスター賞
**D3　公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成
**D2　ロータリー米山記念奨学金
**D2　東海ジェンダー研究所研究助成
**D1　公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成
***D3　朝鮮大学人文学研究院・518記念財団優秀論文賞
***D3　日本英語学会大会優秀発表賞
***D3　2020年日語教育与日本学研究国際会議研究生学述論壇優秀論文評選
***D1　第16回日本近世文学会賞
****研究員　公益財団法人鍋島効公会研究助成
*****研究員　日本中国学会賞
*****D 「伊勢の御師フォーラム2021」懸賞論文最優秀賞
*****M　TMI QE1優秀賞
*****D3　第12回中日対照言語学会シンポジウム大学院生フォーラム優秀賞
*****M　全国学生英語プレゼンテーションコンテストトップ50入賞
******M　TM1卓越大学院プログラム履修生
******研究員　笹川科学研究助成
******D2　日本学術振興会特別研究員 DC2
******D2　ロータリー米山記念奨学金
******D1　名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業（アジア未来創造分野）
******D1　伊藤忠兵衛基金
******D3　東海国立大学機構融合フロンティア次世代リサーチャー事業
*******D3　笹川科学研究奨励賞
*******M1　2022年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム大学院生論壇優秀論文
********D2・D3（計２名）　日本学術振興会特別研究員奨励費
********D1・D2（計２名）　人文学研究科フィールド調査プロジェクト
********D1・D2（２名）・D3（計４名）　東海国立大学機構融合フロンティア次世代リサーチャー事業
********D2　名古屋大学融合フロンティアフェローシップ事業（アジア未来創造分野）
********D3　笹川科学研究奨励賞
********D2　伊藤忠兵衛基金

1-6　進路

資料1-6-1　就職活動セミナー開催実績一覧（2022年度）

開催日	名　称	講　師
2022年11月21日	文学部・人文学研究科 就職セミナー2022	水野健斗（株式会社マイナビ） 船津静代（学生相談総合センター　就職相談部門）
2022年12月９日	文学部・人文学研究科 教職セミナー2022	杉山武（愛知県立武豊高校　英語科） 谷香澄（愛知県立西春高校　国語科） 馬塚智也（私立東海中学　社会科）

出典：文系教務課

資料1−6−2　学芸員の養成

	人数
2018年度	3
2019年度	2
2020年度	3
2021年度	3
2022年度	7
2023年度	6（1）

注：カッコ内は、内数でリカレント教育
出典：教育研究推進室

1−7　高大連携

資料1−7−1　教員による高校訪問、高校による大学訪問、出張講義等実施実績一覧

2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
5月24日	岐阜県立斐太高校	5月15日	私立麗澤瑞浪高校	10月1日	私立愛知淑徳高校	6月3日	私立愛知淑徳高校	6月15日	名古屋市立緑高校
5月30日	私立麗澤瑞浪高校	5月23日	岐阜県立斐太高校	11月9日	愛知県立江南高校	6月29.30日	私立福井南高等学校	7月7日	名古屋大学教育学部附属高校
6月4日	浜松市立浜松高校	6月10日	浜松市立浜松高校	11月12日	名古屋市立菊里高校	7月第1週	名古屋大学教育学部付属高校	7月11日	三重県立桑名高校
6月7日	私立愛知淑徳高校	7月9日	愛知県立明和高校	12月21日	愛知県立明和高校	10月15日	愛知県立半田高校	7月14日	愛知県立明和高校
6月27日	愛知県立常滑高校	7月27日	私立聖隷クリストファー高校	3月12日	福井県立藤島高校	10月21日	愛知県立刈谷北高校	7月15日	私立聖隷クリストファー高校
6月29日	愛知県立大府東高校	8月6日	愛知県立知立東高校			10月25日	愛知県立岡崎高校	9月15日	静岡県立磐田南高校
7月6日	私立愛知高校	9月3日	愛知県立刈谷北高校			10月27日	愛知県立豊橋東高校	10月12日	愛知県立半田高校
7月9日	愛知県立明和高校	9月17日	岐阜県立多治見北高校			10月28日	愛知県立西尾高校	10月20日	愛知県立刈谷北高校
7月10日	愛知県立知立東高校	9月20日	岐阜県立岐阜北高校			11月8日	愛知県立江南高校	10月25日	愛知県立豊橋東高校
7月19日	私立名古屋高校	9月27日	愛知県立松蔭高校			11月10日	愛知県立豊田北高校	10月25日	私立南山高校男子部
7月31日	名古屋市立名古屋西高校	10月16日	愛知県立半田高校			11月11日	名古屋市立菊里高校	10月27日	愛知県立西尾高校
9月27日	愛知県立松蔭高校	10月18日	私立愛知高校			11月16日	岐阜県立岐阜北高校	11月8日	岐阜県立多治見北高校
10月12日	愛知県立時習館高校	10月21日	愛知県立岡崎北高校			11月16日	岐阜県立多治見北高校	11月10日	名古屋市立菊里高校
10月15日	愛知県立江南高校	10月28日	愛知県立江南高校			11月18日	愛知県立豊田西高校	11月14日	愛知県立江南高校
10月22日	愛知県立岡崎北高校	10月29日	私立南山高校・中学男子部			12月20日	愛知県立明和高校	11月17日	愛知県立豊田西高校
10月23日	私立南山高校・中学男子部	10月31日	愛知県立西尾高校						
10月24日	愛知県立豊田北高校	11月7日	愛知県立豊田西高校						

2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
11月 1日	名古屋市立 菊里高校	11月 12日	岐阜県立 多治見北高校						
11月 8日	愛知県立 豊田西高校	11月 13日	愛知県立 豊田北高校						
11月 9日	愛知県立 半田高校	11月 22日	愛知県立 半田東高校						
11月 15日	愛知県立 西尾高校	1月 21日	名古屋市立 菊里高校						
12月 6日	名古屋市立 名古屋西高校								
1月 11日	私立土佐塾 中学・高校								
11月 9日	名古屋市立 菊里高校	3月 12日	福井県立 藤島高校						
11月 10日	愛知県立 半田高校								
11月 15日	愛知県立 西尾高校								
3月 13日	福井県立 藤島高校								

出典：文系教務課・広報体制委員会議事録

２．研究の現況

2-1　研究の成果

資料2-1-1　教員の研究活動状況

	著書数		招待論文数		査読付き論文数		その他
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語	
2018年度	23（7）	9（0）	33	9	14	32	302
2019年度	28（6）	12（3）	36	14	29	21	275
2020年度	40（8）	13（0）	33	3	19	29	203
2021年度	53（3）	7（1）	0	0	38	35	69
2022年度	33（6）	17（2）	22（4）	14（7）	17	24	

注：著書数については、内数（カッコ内）として「単著」の数を記載。
　　学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウント。
　　「招待」かつ「査読付き」の場合は、「招待」でカウント。
　　カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

資料2-1-2　国際／国内研究集会開催件数

	国際研究集会	国内研究集会
2018年度	19	17
2019年度	16	16
2020年度	12	29
2021年度	46	44
2022年度	15	45

資料2-1-3　共同研究実施件数（教員延べ件数）

経　費	授業料	科学研究費補助金	名古屋大学全学諸経費	人文学研究科プロジェクト経費	その他
2018年度	2	39	0	4	31
2019年度	6	57	10	6	46
2020年度	2	37	0	1	17
2021年度	11	65	5	6	25
2022年度	0	89	4	3	24

資料2–1–4　海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
アメリカ	6	3	1（1）		1
イギリス	1	5	4（4）		24（18）
イタリア	1	1			
インドネシア	1				
ウズベキスタン					2
エジプト	1	1			
エチオピア			1（1）	1	
エルサルバドル	2	2			
オーストラリア					1
オーストリア	1			1	
カメルーン			3（3）		
韓国	4	2			
ギリシャ		1			
キルギス		1			1
グアテマラ	1	1			
サマルカンド					2
スイス	1				
スペイン	1	1	1（1）		1
タイ	1				
台湾	5	4			1
中国	7	5		6（6）	8（8）
ドイツ	2	2			1
トルコ		1			
ニカラグア	1				
ノルウェー		1			
フィリピン	1	1		1（1）	
フィンランド					1
フランス	2	6	2（2）	1（1）	4
ホンジュラス	1				
メキシコ		1		1（1）	
ラオス		1			
ロシア	1	1			
不明			1（1）		24

注：（　）内はオンラインの内数

資料2−1−5　研究会実施回数

学会・研究会の名称	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
奥田靖雄プロジェクト研究会	8	1	6	12	12
フーコー研究：人文科学の再批判と新展開	10	6			
イマージュ論研究会		3			
名古屋大学会話分析データセッション	9	12	5	10	10
名古屋大学英語学談話会	10	10			
「身体と記憶の共鳴」研究会 （2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更）	3	3	1	4	1
名古屋平安文学研究会	2	2	1		2
リーディング・語彙研究会	12		12		1
日本語教育研究集会	1	1			
「日本言語文化研究」学術研究会	1		1		
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会	1		1		1
名古屋音声研究会	13	10	3	2	1
名古屋言語研究会	11	5	5	5	5
名古屋大学国語国文学会	2	2	1	1	
Nagoya Iconicity in Language and Literature Society（NILLS）	10	1			
名古屋大学アメリカ文学・文化研究会	1	1	1		
「地域と宗教」研究会	3				
フェミニズム・ジェンダー読書会	6	7	3	4	4
1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ	2	3	1		
1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究	1	3	2		4
古代アメリカ学会西日本部会	2				
考古学研究会東海例会	1				
ドイツ社会国家研究会	4				
テキストの中の文法研究会	2			2	2
アコリス考古学プロジェクト	1		1		1
賢愚経研究会	9	6			
スイス科研研究会（2020年度より「アルプス科研研究会」へ名称変更）	5		1		
先導的人文学研究	6	3			
言語の類型的特徴をとらえるための対照研究会	3				
歴史教育研究会	1	1			
東海縄文研究会	1				1
東アジアと同時代日本語文学フォーラム	1	1	1	1	1
古書の会		11			
象徴天皇制研究会		4	3		1
名古屋大学西洋古典研究会		1			
仏教教学研究会		5			
日中文献交流史研究会		6			
比較人文学研究会		15			
中世史研究会		10	10		
中国語文献を読む会（in 名古屋）		1	2	3	3
中国社会研究会		6	8		
日本フランス語フランス文学会中部支部大会		1	1	1	
ボルヘス原書読書会		30			

学会・研究会の名称	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
「訳官使・通信使とその周辺」研究会		3			10
六度集経研究会		3			
「言説と情動」研究会		5		3	2
名古屋大学東洋史研究会大会		1			
「地域と宗教」研究会		2			
名古屋哲学フォーラム		1			1
中部人類学談話会		5			
電算文学研究会			1	12	12
オンライン映画上映と監督との対話シリーズ			4		
Global Hardy			1	1	
日本ハーディ協会			1	1	1
ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム			1	1	1
多様な観点からの日本映画			1		
ベルギー・ナミュール大学教授 Jean-François Nieus 講演会			1		
西洋古代史インターユニヴァーシティ・ワークショップ			1	1	1
エジプト領域部研究の新展開			1		
日本オリエント学会			1		
日本ナイル・エチオピア学会			1		
日本言語学会			1	2	
考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア			1		
超域文化社会センター 国際シンポジウム			1	1	
Japanese and Korean Linguistics Conference			2	1	
「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」研究会			2		
グローバル化時代における「観光化／脱–観光化」のダイナミズムに関する研究会			2		
International Workshop on Mimetics IV			1		
「コンピュータを使った近現代文学研究」勉強会			3		
フランス・アカデミーの総合的研究			3		
上海財経大学・名古屋大学共同研究会			1	1	1
Zora Neale Hurston, “The Swear”			1		
国立民族学博物館共同研究				7	
東アジア日本研究者協議会（パネル数）				2	
Logic and Engineering of Natural Language Semantics				1	
伊保谷から見た豊田市の古代				1	
Gender, economy and mobilities in the Upper Mekong region				1	1
メコン川上流地域における宗教・経済・ジェンダー				2	1
中世社会と書状―文書実践の日欧比較―				1	
西洋古代におけるジェンダー				9	
日韓学術交流会				1	1
東アジア日本語学研究国際シンポジウム				1	1
名古屋大学英文学会				1	
中华学术外译项目《古汉语通论》日译研讨会				1	
中华学术外译项目《古汉语通论》申报汇报会				1	
玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本				1	1
学僧慈円学会				1	1

学会・研究会の名称	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
バーミヤーン・フォーラム―二大仏の破壊前と現在：課題と展望―				1	1
西域・中国からの水脈―仏典と翻刻・俗講				1	
「テキストマイニング」研究会				2	
「シン・人文学」研究会				3	
先導的人社研				1	1
会話分析研究（発表）会				1	1
ミシェル・フーコー「コレージュ・ド・フランス講義」を読む、公開書評会				1	
歴史語用論・歴史社会言語学研究会				1	
名古屋歴史科学研究会				1	
名古屋大学最先端国際研究ユニット中間成果報告会				1	1
日本認知言語学会チュートリアル				1	1
The International Cultural Seminar by the Japanese Society for German Studies				1	
国際オンライン講演会（名古屋／トゥーロン）				1	
中唐文学会大会「唐代仏教霊験譚の研究」				1	
International Conference of the European association for Japanese Studies, “Migration and Sustainable Society: the limits and opportunities of cultural diversity in Japan”				1	
日本に住む脱北した元「帰国者」の記憶・夢・声―アートプロジェクト『朝露』				1	
『NO NUKES ―〈ポスト3.11〉映画の力、アートの力』刊行記念講演				1	
植物遺伝学とテクスト理論の関連について				1	
Colloque international à l’occation du 40e anniversaire de la Société franco-japonaise d’art et d’archéologie				1	
新約聖書図像研究会				1	
北東アジア研究会「近代家族論の射程と中国における社会主義的近代化―『中国の家族とジェンダー』とその後」				1	
日仏社会学会大会				1	
上野千鶴子氏講演会＋座談会「30年目の『家父長制と資本制』：中国・日本女性における今日的な意義」				1	
名古屋大学人文学研究科言語学分野公開講演会				1	
名古屋大学人文学研究科英語学分野公開講演会					1
名古屋大学人文学研究科文献思想学繋西洋古典学セミナー					1
ELO Conference 2022					1
映画プロデューサー渡邉一孝トーク					1
中国における仏教怪異故事の流通					1
中国・マンガ・メディア研究会					1
Reimagining the Buddhist Landscape of Ancient Rajagrha/ Rajgir					1
日本語文法学会第23回大会シンポジウム					1
ヴェセル・クルル教授／ヨシネ・ブロク教授講演会					1
イラッド・マルキン教授講演会					1
Workshop on Typology of Ideophones					1
Atelier Cinematographique					1
YLC 共同研究助成月例研究会					9
名古屋大學―屏東大學・文學交流暨論文發表會					1
日本語教育研究集会					1
建国初期中国を移動する身体メディア・プロパガンダ―戦時期からの継承と展開					1

学会・研究会の名称	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
労働と身体の大衆文化論―戦時下・戦後の接続の試論として					3
International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammer					1
会話分析中級（以上）者セミナー					1
学術知プロジェクト研究会					15
「予測と創発―理知と感情の人文学」刊行記念シンポジウム					1
人文知共創センター設立記念シンポジウム					1
Making Micro-Anarchic Voices: Questioning Body, Sexuality, and State Power with Moving Images					1
Ezra Pound International Conference					1
Screen and Energy Symposium					1
ケアの倫理と人文学					1
現代の第一線の研究者による古代哲学講演					4

出典：教育研究推進室

2-2　研究資金の状況

資料2-2-1　科学研究費等受入状況

			新規採択	継続採択	合　計
2018年度	件　数		18件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	55件 （うち基盤S：1件 基盤A：0件）	73件 （うち基盤S：1件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	31,300,000円	80,600,000円	111,900,000円
		間接経費	9,390,000円	24,180,000円	33,570,000円
		合　計	40,690,000円	104,780,000円	145,470,000円
2019年度	件　数		23件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	48件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	71件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	37,500,000円	53,800,000円	91,300,000円
		間接経費	11,250,000円	16,140,000円	27,390,000円
		合　計	48,750,000円	69,940,000円	118,690,000円
2020年度	件　数		18件 （うち基盤S：0件 基盤A：1件）	57件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	75件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）
	受入金額	直接経費	28,200,000円	67,831,555円	96,031,555円
		間接経費	8,460,000円	19,296,000円	27,756,000円
		合　計	36,660,000円	87,127,555円	123,787,555円
2021年度	件　数		19件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	44件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）	63件 （うち基盤S：0件 基盤A：3件）
	受入金額	直接経費	21,000,000円	72,142,160円	93,142,160円
		間接経費	5,400,000円	21,351,000円	26,751,000円
		合　計	26,400,000円	93,493,160円	119,893,160円
2022年度	件　数		14件 （うち基盤S：0件 基盤A：0件）	50件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）	64件 （うち基盤S：0件 基盤A：2件）
	受入金額	直接経費	13,500,000円	63,275,699円	76,775,699円
		間接経費	4,050,000円	18,849,000円	22,899,000円
		合　計	17,550,000円	82,124,699円	99,674,699円

出典：研究事業課

資料2–2–2　寄付金等受入状況（2022年度）

種　別	課題名	出　所	代表者	受入金額
寄付金		ハーバード・燕京（イェンチン）研究所（Harvard-Yenching Institute）	藤木 秀朗	1,366,560円
寄付金		公益財団法人たばこ総合研究センター	黄 潔	800,000円
寄付金		安藤 悦子	梶原 義実	10,000,000円
寄付金		河西 秀哉（一般財団法人 カワイサウンド技術・音楽振興財団）	河西 秀哉	500,000円
寄付金		公益財団法人住友財団	影山 悦子	1,000,000円
寄付金		公益財団法人窓研究所	川本 悠紀子	2,000,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	杉山 美耶子	1,500,000円
寄付金		公益財団法人電気通信普及財団	梶原 義実	2,000,000円
受託研究	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）	独立行政法人日本学術振興会	中村 靖子	15,353,000円
補助金	科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業	文部科学省（学内配分）	徐 韻文 外7件	2,000,000円
補助金	次世代研究者挑戦的研究プログラム助成事業	国立研究開発法人科学技術振興機構（学内配分）	毛 星文 外17件	6,000,000円
補助金	（2021年度未渡日者向け追加研究費）東海国立次世代研究者挑戦的研究プログラム助成事業	国立研究開発法人科学技術振興機構（学内配分）	毛 星文	250,000円

注：寄附金は、『R4年度寄附金受入等一覧』より人文学研究科分を抽出（2022年度中に入金のあったもののみ）
　受託事業・受託研究等は、学内分担分を含まない
　科研費は、人文学研究科分・高等研究院（人）を抽出（G30については専任のみ除くが、2022年度については全員兼任のため内数とする）
出典：研究事業課

資料2–2–3　人文学研究科教育実施経費配分状況（2022年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
美術史実習1a／2aおよび美術史実習1b／2b	美学美術史学	245,120円
日本史博物館実習Ⅰ	日本史学	29,000円
文化資源学研究Ⅰ	歴史文化学繋共通（考古学・日本史学）	34,000円
文化資源学研究Ⅲ	歴史文化学繋共通	58,000円
日本文化フィールドワーク実習a	文化人類学	164,280円
日本文化フィールドワーク実習b（学部） アーカイヴス・テクスト学フィールドワーク実習（大学院MC）	文化人類学	127,980円
文化人類学フィールド実習Ⅰa	文化人類学	177,180円
文化人類学フィールド実習Ⅰb	文化人類学	290,680円
文化人類学フィールド入門実習Ⅰ	文化人類学	55,200円
考古博物館実習Ⅰa/ Ⅰb/ Ⅱa/ Ⅱb	考古学	312,000円

出典：文系総務課

資料2–2–4　人文学研究科プロジェクト経費配分状況（2022年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
人文学研究科で言語を研究する院生のための最先端研究紹介・キャリア形成支援プロジェクト	堀江 薫	180,000円
日中学術交流推進プロジェクト	鷲見 幸美	400,000円
宗教遺産をめぐる真正性研究プロジェクト―宗教遺産テクスト学の発展的展開―	近本 謙介	500,000円
文化財三次元閲覧システムの実用化に関するプロジェクト	梶原 義実	400,000円
第8回日韓学術交流会―言語文化を巡って―の企画と実施	宇都木 昭	130,700円

出典：文系総務課

2-3　研究成果の社会還元

資料2-3-1　社会還元活動実施状況

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	73	90	57	75	60
新聞記事の掲載・テレビ出演等	41	104	48	24	34
高等学校への出張授業等	24	21	5	16	22
その他	15	18	20	0	2

注：カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

資料2-3-2　地域連携活動一覧

	種　別	内　容
2018年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史
	文化財調査事業等	奈良文化財研究所、名古屋市、豊田市（2件）、稲沢市、刈谷市
	博物館美術館等	国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館、岡崎市、稲沢市美術館〈九州国立博物館、名古屋市教育委員会、㈱ナカシャクリエイテブ（名古屋市）〉
2019年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史、鳥取市史
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、稲沢市、刈谷市、豊川市、豊田市、設楽町、東栄町、豊根村、岐阜県大垣市
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館（2件）、岡崎市美術博物館、稲沢市荻須記念美術館、一宮市博物館、西尾市岩瀬文庫〈羽島市不二竹鼻町屋ギャラリー、愛知県〉
	その他団体	北設楽花祭保存会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館、特定非営利活動法人難民支援室
2020年度	自治体史等	愛知県史、知立市史、西尾市史（4件）、豊田市史、新修豊田市史（2件）、小松市史、新修鳥取市史、明石市史
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、岡崎市（2件）、稲沢市（2件）、豊田市、豊川市（2件）、一宮市、あま市、岐阜県垂井町・白川町・大垣市（2件）、福島県只見町・金山町、長野県阿智村・飯田市
	博物館美術館等	名古屋市博物館（2件）、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、西尾市岩瀬文庫、国立歴史民俗博物館（2件）、静岡県立美術館、三重県立美術館、大学共同利用機関法人国文学研究資料館、花祭会館、ハーバード美術館（アメリカ）〈三井記念美術館、名古屋市美術館、岡崎市美術博物館、名古屋市教育委員会〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須観音真福寺、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、中部日本ミツバチの会、一般財団法人日ロ友好愛知の会、サントリー文化財団、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所
2021年度	自治体（自治体史・文化財調査事業等）	名古屋市、豊田市（3件）、一宮市、犬山市、知立市、西尾市（3件）、豊川市、岐阜県、大垣市、石川県、小松市、鳥取市、明石市、福島県只見町・金山町
	博物館美術館等	名古屋市博物館、大須観音真福寺宝生院文庫、愛知県公文書館、愛知県埋蔵文化センター、愛知芸術文化センター、岩瀬文庫、豊田市美術館、史跡大曲輪貝塚、稲沢市荻須記念美術館、国立歴史民俗博物館、静岡県立美術館、三重県立美術館、平洲記念館、ハーバード美術館（アメリカ）〈都城市博物館、高岡市美術館、福井県立美術館、一宮市博物館〉
	その他団体	名古屋テレビ、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、日ロ交流愛知の会、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所、東京都港区立男女平等参画センター、文化遺産国際協力コンソーシアム（3件）、長野県白馬村観光局、大学入試センター、日本学術振興会（3件）
2022年度	自治体（自治体史・文化財調査事業等）	愛知県（4件）、豊川市（3件）、犬山市（2件）、豊田市、稲沢市、西尾市、岐阜県中津川市、大垣市（3件）、関ケ原町、垂井町、石川県小松市、かほく市、兵庫県姫路市、明石市
	博物館美術館等	名古屋市博物館（3件）、特別史跡名古屋城、東栄町花祭会館、岩瀬文庫、史跡大曲輪貝塚、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所〈徳島県立美術館、府中市美術館、四日市市立博物館、岐阜県文化財センター、小牧市教育委員会、大阪城天守閣、沼田市歴史資料館、石水博物館（津市）〉
	その他団体	名古屋難民支援弁護団、花祭の未来を考える実行委員会、日ロ友好愛知の会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館、国際交流基金、文化庁、大学入試センター、日本学術振興会（3件）

注：博物館美術館等の〈　〉内は、学芸員の就職先を示す（臨時職員・現職リカレント教育を含む）
出典：教育研究推進室

編集委員

川　本　悠紀子

McGEE Dylan

三　輪　晃　司

小　川　翔　太

周　藤　芳　幸
（人文学研究科長）

宇 都 木　　昭
（教育研究推進室幹事）

吉　田　早悠里

（アルファベット順）

年報2022　名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2024年1月31日発行

発行　名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室
〒464−8601　名古屋市千種区不老町
TEL（052）747−6391

組版　株式会社 あ る む
〒460−0012　名古屋市中区千代田3−1−12
TEL（052）332−0861